
押し入れの異世界

コスモス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

押し入れの異世界

【Nコード】

N3792Y

【作者名】

コスモス

【あらすじ】

大掃除中に自らの黒歴史を封印した押し入れを開けてしまった主人公。

それは、開けてはならないパンドラの箱だったのか？

無職のおっさん予備軍であるところの主人公が神様からもらったお仕事とは何なのか？

まじめでエッチな主人公が、異世界チートで活躍するおはなし。

1 プロローグを含むようです。

プロローグ

大晦日・・・のイブイブ。

せめて散らかり放題の部屋を大掃除しようと思い立った。いや、思い立ってしまった。

実家の2階が私の警備担当区域。そう、私が世に名高い「自宅警備員」だ。

33歳にもなって・・・orz

「自宅警備員」それは、高校や大学を卒業後、女子が実際には家の手伝いなんか全くしていないにも関わらず、免罪符のように名乗る立派な職業であるところの「家事手伝い」の男子バージョン。

まあ、私の場合は、10年程は就職してはいたんだけどね。

何はともあれ、だれが考えたのか知らないけど、乾いた拍手を送ろうと思う。

さて、小学生時代から使っている机の上に、パソコンとCDラジカセ（懐かしいなあ）各種のテキスト。その横のパソコンラックの上にプリンター、真ん中に液晶テレビ、下にDVDレコーダー。

その他には、ベッドに洋服ダンスに本棚。そうそう、エアコンを忘れてはいけない。私はエアコンが無いと、特に夏は生きていけないので。

でも、今年の夏、冷房を掛けると、ときどき盛大に『シュゴオオオ・・・ピルピルピル』なんて異音を響かせて、結構な量の水が滴り落ちてくるようになったので、今年から室内にはバケツがデフォルト。

悩みは、この異常音の発生のタイミングが、全く予想が付かないこ

とで・・・

深夜に唐突にやられてみな？死ぬほどビビルよ？

寝入りばなだったときなんか、ビクッ！ときて間違いなく3秒程心停止したね。

あの感じを、ホラー映画とかで再現できたら間違いなく大ヒットだと思う。

それはさておき、掃除だ。

窓を開け（何日ぶりだ？）、一通り叩きを掛けてから掃除機をぶんまわし、最後に濡れ雑巾で拭きあげると、『いらないなあ・・・もう・・・』と思われた本や雑誌や年代落ちの参考書といった資源ごみを紐で縛った。

関係ないけど。こういう時、いつも思うのだが、SMの縛る方の人ってホントに上手だね？私は微Sなので、縛られたいとも、縛りたいとも思わないが、あくまで、技術として尊敬してます。

最後に、大掃除の一大イベント『昔のマンガを読みふける』もちやんとやりました。

そして、ふと、きれいな部屋を見渡して、就職した時に封印した押し入れに目が行く。

押し入れといっても、襖ではなく、扉形式の押し入れで1メートル四方のスペースがあり、上下に仕切られている。

中学の頃、上段を空けて座布団とアイロン台と電気スタンドを持ち込んで、内側から扉を閉めて受験勉強をしたのは良い思い出だ。なんか、めちゃくちゃ落ち着くんだ。

しかし、その後は、その隠れ家的な思い出のスペースも、いやだからこそこか？高校、大学という7年間の暗黒歴史の産物が詰め込まれた結果、就職時に封印せざるをえないこととなったわけだ。

えっと・・・要するに。ゴミ収集のおじさんだったり、おにいさん

だったりさえ、見られるのが恥ずかしい物「とか」も、大量にあったわけだな。

でも、もうそろそろ、警備担当者としては『片付けたい!』と、思ってしまった。

ちなみに、封印の方法として、取手を取り外しておいたので、本当に10年近く一度も開けてない。

中身についても『忘れてしまいたい』という天使と『もう一回くらい見てもいいんじゃない?』という悪魔の戦い?が続いていた結果、具体的に何を入れたかは覚えていない。

一大決心の末、という程ではないけれど、ちょっとした工具を持ち出して・・・ゴソゴソとやること1時間。

開きません。うんともすんとも。どんなに工具を引っかけて引っばしても。

そろそろ、疲れました。自宅警備員に体力を求めてはいけない。ということ、押してみた。

「バコン!ズズズズズズ・・・」という微妙に重々しい音とともに、あっさり開いたわけだが、えっと・・・私の記憶が確かでなくとも、このタイプの押し入れは外開きのハズ、内開きにしたら、せっかくの収納スペースが殆ど失われる。

壊れたか???

それでも、ようやく開いたのだからと、妙な義務感に後押しされ、結構、力任せに押しました。

で・・・

「ここはどこだ!??」

「うちの押し入れですけど」

問われたので即答したよ？

10年程とはいえ、社会の荒波に揉まれた私は、いくつかの貴重な教訓を得ていたわけで、その中に『殺気立つ「美女」には、決して逆らってはいけない』というものがありましたからね。

「・・・何をいつてる？さっきまで『深奥の迷宮』最下層域にいたはず！」

「・・・誠に恐縮ですが、本当「は」存じ上げません。ここはどこでしょう？」

「ふざけるなッ！他の仲間はどこだ!？」

冷や汗が伝う、様な気がした。

咄嗟に、『うちの押し入れ』などと答えてしまったが、見渡す限りにおいて、周りはいわゆる石室。

対応ヲ間違エタデショーカ？

慌てて振り向けば・・・おお！石材に訳のわからないレリーフがあり、そこにポツカリと私の部屋が普通に見える。良かった。

とても奇妙なことに、押し入れの木製の扉の内側が、見るからに堅そうな石材の扉になっていた。『よくもまあ、蝶番が重量に耐えられるなあ』と、妙に感心していると。

「無視しないでもらおう！」

「あ、いえ。無視しているわけではなくてですね。私にも状況が分からないもので」

誰にでも経験のあることだとは思いますが、一方が異常に興奮すると、他方は逆に冷静になっていくもので、私の場合は以前の仕事の経験で、特にその傾向が顕著なのだ。

でも、5メートル程先で、西洋の長剣？を構えて肩を上下させ、こちらを睨みつける30前後の美女の目が、明らかに『殺る気、満々』となれば、ちょっとだけ、言うてはならないセリフが脳裏をよぎりましたよ？

つまり、『話せばわかる！』と。

これって、死亡フラグでつか？

脳裏をよぎっただけだからセーフ？

でも、黒猫はよぎっただけでもアウトだったか？

1 プロローグを含むようです。(後書き)

初心者が適当に、好きなように書いてます。
不愉快に思った方、ごめんなさい。

2 「話せば分かる」は死亡フラグではなかったようです。

いろいろあった訳だが、私が武器を所持していないことを示して、どうにか剣を下してくれた美人さん。安心した途端に倒れるように座り込んでしまった。

なんでも、丸1日この石室に閉じ込められて、何も食べていなかったそう。

慌てて、一旦、自室に戻り、警備区域外の冷蔵庫からスポーツ飲料と、菓子パン2個を持って石室に戻った。

貪るように菓子パンに齧りつき、ドリンクを飲み。一息付けたのは3分後？ええ、3分で2リットルのドリンクと菓子パン（ソーセージ入りとクリームパン）を平らげましたよ。

私の深夜警備のための夜食が・・・もうそろそろ警備員云々のネタはいいか？

「たすかった、礼をいう。私の名はスン。冒険者をしている」

「御丁寧に。私は俊といいます。村上俊。自宅警び・・・ゲフンゲフン。失礼。自宅で仕事をしております。まあ、自営業ですね。よろしくおねがいたします。」

ぱっと見て美人さんだが、この方、よく見ると「すごい美人さん」だった。

残念なことに多少薄汚れているし、金色の髪もボサボサになってしまっているが、透きとおるような白い肌に宝石のようなブルーの瞳、無粋なことにフルアーマー？の西洋甲冑に身を包んでいるため、スタイルは分からん。（でも東洋人のような・・・ハーフか？）

でも、身長が私より高く175センチ位で、全体的に細身。フム、期待できそう。

という分けで、当面の行動として、スンさんにお風呂をお勧めした。異世界人？にお風呂を勧めるのっておかしいか？どんな美人さんでも、うんこするし、汗臭くもなる。アイドルは「うんこしない」なんて幻想は、随分前に、すごい右手を持つ男子高校生に、ぶち壊される以前に自壊した。

スンさんは、私の部屋に来てからあちこち引っかき回し、窓から見える町並みに驚き、通りを走る車に剣を向け「ここにも魔獣が！」とか、つまりはビビリまくっていたが、危険は無いと認識したのか、漸く、お風呂場に連れ込むことに成功した。

甲冑は私の部屋で脱いでもらい、ファ○リーズをシュッシュしておいた。

彼女のオッパイ？頭から被るタイプのシャツ？の下に、サラシの様なものを巻いているらしくて、サイズは未だに不明だ。

誠に遺憾だ。

自宅の一階にある風呂場に連れ込み、シャワーとシャンプーとボディーソープの使い方を教え、脱いだ服は全て（↑ここ最重要。テストに出ます）籠にいれるように指示し、出てきた時は、取り敢えず、私が昔使っていた夏用パジャマ（↑ここも重要）に着替えるように伝えた。

この時点で、蛇口からお湯がでることや浴室のライト、浴室の手前にある洗面所の鏡を見て大騒ぎしていた彼女には、私の黒い策謀を看破することなどできず、言われるがままに頷いた。

そして30分後・・・お待たせした。

万民に鬼畜外道と罵られようと発表する。彼女のバストは目測でEカップ以上だ。

歳は30歳前後だと思うが、全く垂れる気配さえなく、ブラジャー

なんかしてないのに私の夏用パジャマの胸部を押し上げ、大きく開いた胸元は、深い谷間を形成している。

所謂、ぽつつんぽつつんだ！ヒーーーーハアーーーー！！

しかも、胸の盛り上がりのために、上着とズボンとの間に隙間が出来て、パカパカしていやがる。

その後、部屋に戻ってグラスにお茶（緑茶）を注いで一息入れるとともに、お互いのこと、特に、聞かれるままに、こちらの世界のことを話した。

まあ、「このグラスが」だの「鏡が」だの、正直、どうでもいいことばかり聞かれた。

ちなみに、二階に戻る階段は、もちろん彼女の後ろだったよ？鍛えられたお尻（恐らくノーパン）と腰の曲線が壮観で、いろいろ大変だったことは報告しておこう。

スンさんの話しによると、仲間とパーティーを組んで『深奥の迷宮』に挑み、魔獣を討伐しながら最下層域にまで進んだところまでは良いが、最後の最後、『神魔獣』が居る筈の部屋はもぬけのからで、祭壇の上にあった水晶のような物を手に取った瞬間に、あの石室に彼女だけが飛ばされ？閉じ込められたのだとか。

それから、丸一日を掛けて、脱出のために石室内部を探ったが、床の転移魔法陣以外は発見できず、体力的にも限界で途方にくれていたとのこと。

ちなみに、神魔獣戦に備え身軽になるために、いくつかの装備と今まで得たお宝の数々、水や食料は部屋の外に置いてきていたそう。

「災難でしたね？」

「まったくだ・・・」

話しに一応の区切りができたところで、私は一階に降りることにし

たが、彼女は『仲間が救出にくるかもしれないから』と、開けたままの押し入れの扉から見える石室を見張っていることになった。彼女のいう魔獣とやらがどんなものか分からないが、石室に湧いて出た挙句、こちら側に出てこられては迷惑なので、彼女に『よろしく』と伝えて階段を降りた。

さあ、これから、楽しい『お洗濯の時間』が、はじまらるよ！

堪能した。

あ、匂いを嗅いだりとかではないよ？そこまで変態ではない。匂いがしなかったとは言わないが！

最初の疑問の解明。彼女のブラジャーは敢えて云うなら、女性用のボディースーツの上半身部分のような形だった。

実にけしからんことに、カップのような形成はされておらず、厚めの生地で、胸前で数か所を紐で縛るといふ締め付けタイプ。大事なことなのでもう一度。実にけしからん。

まあ、女性が甲冑の下に着るならこういう作りになるだろうなあ、と少し感心はしたが。

予想どおり、パンツは無し。

次々と全自動洗濯機に放り込み、洗剤と柔軟剤と漂白剤をたっぷり打ち込んで「スイッチオン！」。（ここも自動なんだけどね）

我が家の洗濯機は乾燥機付きなので、この量なら45分ほどで出来上がりだが、洗濯機の前で1時間近くも突っ立っているのは、洗濯機警備員になってしまうので、そそくさと二階に戻る。

部屋の扉を開けると、そこには……はい、スンさんはお休み中でした。

いやしかし。鞆に納められた長剣を豊満な胸に抱きかかえ、胸元まで捲れ上がったパジャマが絶対領域を形成している。ここにもあったんだね、絶対領域。

もちろん、下からだけでなく、パジャマの上からは抱きかかえられたために、更に盛り上がったEカップ（推定）が、今にも夏用パジャマの胸元から零れ落ちそうだ。

さらに、横向きで眠っているため、ウエストとヒップの標高差がああ、曲線がああああ！

申し訳ない、つい、取り乱してしまった。

でも、ホントに美人さんだなあ。

それが、私のベッドに横たわり、あられもない姿でお休み中なのだ。これを「据膳」とは言わないが、寝顔を拝見するくらいは許されると思う。

で・・・洗いたての金色の髪は、まだ湿っているが波打つようにベッドに広がり、マスカラなんぞ必要としない長い睫毛が小さく震えている。

小さな桜色の唇は、つやつやだ。

そんなに私を信用しないでほしいのだが・・・

3 考えたら負けのようです。

スンさんを捕獲・・・ではなく保護したのは昼過ぎだったが、その後のムフフなイベントを消化している間に、彼女が眠りこけてしまったので、その寝顔を堪能している間に結構な時間が過ぎた。まあ、そればかりではなかったけど。

まず、まさかとは思ったが、押し入れの扉を開いた状態で固定した。大掃除中、いろいろ考えているうちに、何故か亀甲縛りになってしまった本や雑誌達を使って、何かの拍子に閉じてしまうのを防いだわけだ。

本さんと雑誌さんがドSであることを祈る。

スンさんによれば魔獣が出てくる恐れはあるのだが、それよりも次元の壁が閉じてしまって、彼女が帰れなくなる方が問題だ。

見たところ文明レベルは明らかにこちらが上だが、それでも、こちらの科学技術を使用しても次元とか空間の壁は越えられない。

あ、現状、既にファンタジーを肯定しているが、一方で、科学技術信奉者でもあるから、はっきり言うておくが、将来的にも次元と空間の壁は越えられないそうだよ？

いつぞや、ワープ航法について、その可能性を検討した論文が発表されたのだけど、それによると、ワープ以前に、人為的方法で次元や空間を超えるには、計算上ビクバンクラスのエネルギーが必要だそうで、論理矛盾になるのだとか。

かつて、中二病を患った私としては、けっこうなショックだったが、あにはからんや、少なくともSFの世界では、代わりにワームホール理論が脚光を浴び、未だに沢山の作品が作られ、むしろ、以前より、設定に無理が無くなった、といった効果があるのだとか。

まあ、そんなもんだ。

兎に角、現状で、私の部屋の押し入れとスンさんの世界が繋がっているとするなら、科学的にはワームホールによる一時的な現象と考えられるものの、ワームホールの発生や消滅が一時的とはいえ、その一時は宇宙規模の一時であり・・・つまり、一度、繋がった以上、数百年？いやいや、数千から数万どころか、数億年規模で繋がったまんまの可能性もあるわけだが、だからと云って油断は禁物。

まあ、このあたり『そんじゃあさあ！自宅の押し入れと異世界の迷宮がワームホールで繋がる確率は科学的にどのくらいなんよ？』なんて質問するのも、その答えを考えるのも無駄だと思う。現実に関がっているわけだし、その所は、やっぱり『考えたら負けかなあ』なんて思うわけで。

その他には、石室に入ってスンさん同様にあちこち調べてみた。

一辺30〜40メートルの多分正方形の石室。

インカ・アステカもびつくりの見事な石組みで、まさに剃刀一枚入りそうにない。

装飾としては、私の押し入れの扉を石室側から装飾しているレリーフ、特に意味のある図形が描かれているわけでもなく、ありふれた唐草模様だった。

模様自体に意味があるとは思えない。唐草模様自体は、こちらの世界でも、古代遺跡にはありふれたもので、デザインの多少の違いはあるけれども世界中にあるそうだから。

「それにしても、石質はなんだろう？大理石？でも真っ黒だから黒曜石？」

なんせ、表面はピカピカに磨かれて、すべすべ。

気持ちがいいのでペタペタと触っている内に右手の人差指でカリカリっとしてみた。

んで、猛烈に後悔した。

ボロボロとあっさり削れてしまった。咄嗟に、明日の朝刊が脳裏に浮かぶ。

『日本人観光客が世界遺産を破壊』

血の気が引く。が、後の祭りだ。

誠に遺憾ではあるが、見なかったことにしよう。追及されたら「最初からそうだった」と言い張ろうと決意する・・・いや、やっぱり、素直に謝ろう。

どうせ、この手のことには責任の取りようがないし、深く反省していますから勘弁してください。

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。もうしません！

気を取り直して、調査再開。

といっても、さて床の魔法陣。オーソドックスに二重円の中に、三角形を二つ上下逆に組み合わせた図形。その周囲にあるのは模様か文字か？

この手の物は考えても無駄なので、取り敢えず写メに何枚か撮ってお終い。

最大の疑問は、天井の・・・明りか？？？

全体的にぼんやりと光って石室全体を照らしているが、錯覚で無ければ、壁と同じ材質の石材そのものが光っているような・・・

もう少し近くで調べたいところだが、天井までの高さが数メートルあって良く見えない。

後で、脚立でも持ってきて調べよう。

そうこうしている内に、お外は真っ暗になっていた。

12月は流石に日が落ちるのが早い。

慌てて明りを付けたが、相変わらず私のベッドではスンさんはエロっぽくお休み中で、でも、エアコンのお陰で寒くはなさそうだ。

だが、私はお腹が空きましたよ？

かつて一人暮らしを10年ばかりしていたお陰で、簡単な料理くらいはできる。

でも、スンさんをこのままにして下に降りるのは、魔獣とやらのもともあって危険だし、そろそろ起きて欲しいと思う。

こういう場合、声を掛けながらほっぺとか、オッパイとか、オッパイとか、オッパイとかをツンツンして起こしたいところだが、触った瞬間にバツサリとやられる恐れがあるので、やりません。

結局、少し離れた所から声を掛けるといふ、慙愧に堪えない方法を選択した。

「スンさん、起きてください。スンさん！」

「うううん・・・お願い・・・あと・・・あと、ご・・・ご・・・」

「・・・ご・・・？」

「・・・あと・・・5年、寝かせて・・・」

私の得た数少ない教訓に『美人の理不尽には逆らってはいけない』というものがある。

予想の斜め下をいくお返事を頂戴した私は、彼女の暫定放置を決定して夕食を作り、1階に降りることにした。

まあ、生死の掛った緊張状態から取り敢えず解放されたことで、疲れが出たのだろう。

ご飯を炊いて、豆腐の味噌汁を作り、豚肉に生姜焼きの素を振りかけてフライパンで焼く。焼きすぎると、辛くなるので注意。

最近は何でもかんでも激辛にする傾向があつて、『俺はトウガラシの50倍が好物だぜ!』なんて、聞いてもいないのに自慢げに発表する輩がいるが、なんなんだろうね、あれは? 味覚音痴を世間様にカミングアウトして、まずい料理しか作れない女性にアピールしているのか?

まあ、いいや。

付け合わせはキャベツの千切りで良いだろう。男の料理なんてこんなもんだ。

ちなみに、ちゃんと二人分作りましたよ?

3 考えたら負けのようです。(後書き)

ん？サブタイトルはどうやって直すのだろう・・・

4 食事のときは楽しい会話をするようです。

食事の準備が整い、そろそろ真面目にスンさんを起こそうかと考え始めた頃、トン・トン・トン、と階段を降りてくる足音が聞こえた。

むむ、生姜焼きの匂いで目を覚ますとは、やりますねスンさん。

できれば寝ぼけていた時のように、女の子言葉でお話ししてください。

男っぽい話し方も萌えますが、そのギャップが・・・

「ご飯できてますよ、スンさん」

と、声を掛けながら目を向けると、スンさんが剣を片手に台所の戸口に立って、頭を盛大に掻いていた。

せっかくシャワーを浴びて汚れを落としたのに、乾ききる前に眠ったせいで、予想通り、長い金髪が暴発している。

ベッドに横になったままなら乱れた髪が色っぽく感じるのだが、立っているともうそうでもないから不思議だ。

もっとも、地が美人さんだけに、『百年の恋も冷める』というよりは『ギャップ萌え』しそうだ。

「おお・・・すまない・・・」

男前だなあこの人。スンさんはそう応えようと、私の向かいの椅子に腰かけ、剣をダイニングテーブルに立てかけた。

箸のかわりにナイフとホークも用意しておいたのだが、スンさんは私の真似をして箸を手にとると、見よう見まねで食事を始めた。

なかなか器用だなあと思いつつも、うまい、うまい、と連発する彼女が微笑ましく思えたが、そろそろ聞かなければならないことがある

る。

「ところで、あなた、どちら様？」

「・・・ほお・・・どこで分かった？擬態は完ぺきのはずじゃがな」
「あらま？当たり前でしたか・・・」

このスンさんは偽物だ。

だが、バストサイズとかウエストのくびれとかが微妙に違う、私のエロメガネを見くびるな！というわけでは、全然ない。断じて違う！単なる勘だ。

これも勘だけど、多分、体そのものはスンさんのもので『中の人』だけが入れ替わっているようなそんな感じだろうか？

「わははは・・・正解じゃ。まずは、自己紹介からじゃな？わしは・・・神様じゃ」

背景に後光もなければ、玄界灘の荒波もなく、二人きりのちよつと寂しげな夕食の食卓で、急に爺様くさい口調になったスンさんは、あっさりとそう云った。

ちよつと、奥さん、聞きました？神様ですって！！！
予想とはちよつと違っていたけど、まあマシな方向だったから良しとしよう。

魔獣とやらが乗り移っていたりしたら対処のしようがない。

「で、御用件は、やっぱり、うちの押し入れのことでしょうか？」

「あんまり、驚かんな？・・・が、話しが早くて助かる。」

「と、おっしゃいますと？」

ファンタジーの世界には、ストーリーとして勇者召喚とか異世界転生とか、いろいろあるが、総じて召喚主や神様に、結構な確率でタ

メロだったり、タメロになったりする。

がしかし、私は現状を無視すれば「社会人」なので、相手が何者であらうと相応の態度、言葉使いで対応すべきなのだ。

PTA・・・ではなくTPOに合わせるのは社会人の常識という話し？

「うむ。実はな、そなたに『深奥の迷宮』の最下層域を支配する『守護者』になってもらいたいのじゃ」

「・・・？・・・あぁなるほど・・・」

私としては『なるほど。じゃねえ！』と自分自身に突っ込みたい気持ちもあったが、微妙に納得できてしまったのだから仕方がない。スンさんはこう話していた『「深奥の迷宮」の最下層域に、最後の神魔獣が居なかった』と。

では、前任者はどこに？

「前任の『守護者』の方は、どうなさったのですか？」

「あやつは、契約終了と同時に神に昇格して、どこぞで世界を構築しておるじやろ」

「神魔獣が神様になるのですか？」

「まあ、すべての神魔獣がそうなる、と云う分けではないがの。そもそもじゃ。神魔獣とは・・・」

面倒なので要約すると、神々が作った世界であっても、人を始めとした生き物が存在する限り次第に闇は生じる。

かつては神々自らが生じた闇をその神力によって滅していたが、本来、人は神の頂きに迫る『可能性』を宿しているはずなのに、闇を神々が滅していた世界では、まったく進化が見られず、むしろ衰退することが多かった。

一方で、神々が地上への干渉を控え、闇を滅することを止めた世界では、比較的短期間に進化や発展が見られた。

その結果、神々の多くが地上を離れ、人々を見守ることにして、干渉を極力避けることにしたのだが、そうすると今度は、闇の力が人々を飲み込む事態が生じた。

そこで、闇をただ駆逐するのではなく、管理することにした。

神々は、闇の象徴とも言える魔獣を基本的に迷宮に縛るとともに、迷宮から大量の魔獣が溢れるのを防ぐために『守護者』を置くことにした。

「つまり、神魔獣というのは、本来魔獣ではなく、神々の・・・使徒。ですか？」

「そう云う事じゃな。なにぶん、役目から迷宮の最下層域に奉じられておるために、人からは魔獣の神たる存在と誤認されておるがな。魔獣に神は存在せんよ」

「ですが、迷宮を踏破する・・・冒険者ですか？には、神魔獣も討伐されているのでは？」

スンさん達のパーティーが冒険者としてどの程度のレベルにあるのかは分からないが、既にいくつかの迷宮を『踏破』してきているらしい。

つまり、神魔獣Ⅱ守護者を倒している。

まだ、引き受けると決まった分けではないが、守護者を引き受けた途端に、冒険者たちの討伐対象になるのは正直、御免だ。

それに、まだ、納得できない部分もある。なぜ、私？

「まあ、ある程度のレベルに達しておる連中が相手の場合は、死んだように見せてはおるがの。本当に死んでしまつては、迷宮そのものが機能を失うでな。誤認されておるならいっそのこと、そのまま

にしておいた方が此方としては都合がよいで、姿形も魔獣のように見せておるのよ。もちろん、そなたが引き受けてくれた場合はじゃ、十分な能力を授けるで、守護者としての役目は果たせるはずじゃし、後は、まあ、世界をブラブラしながら、適当に冒険者の相手をしておればよい。ああ、ところで、この話し、断つても構わんが、そうすると、そなた。もうすぐ死ぬぞ？」

なんですと？

4 食事のときは楽しい会話をするようです。(後書き)

設定があ．．．めんどくさいです。

5 食後は運動するようです。

あれから暫く自称神様とのお話しは続き、私の疑問もいくつか解消され、条件付きで、神魔獣・・・いやいや、守護者を暫定的に引き受けることになった。

どうも、私、3日後には死ぬみたいですし、どおせ、ですから。

はははぁ・・・お正月に死ぬんですか？・・・私、今から、グレテモイイデスカ？

まあ、死んだ瞬間に真っ白な世界に連れ込まれて、とか、いきなり転生させられて、とかよりは事前説明があった分、良心的？な感じがするが、拒否権のない交渉は不毛以外のなにものでもないわけでお話しの終わった後、神様はきっちり夕食を召し上がって帰って行かれました。

まあ、そのまま二階に上がっていき、元通りにベットに横になっただけだが。

おおっ！オッパイのはみ出し加減まで、元通り再現しましたよ？グッジョブ！神様！

仕事としては、神様の加護で、こちらの世界での生活は保障されるが、守護者としての業務もこなしながら、異世界を自由に探訪して良いそうだ。

というより、何となく異世界探訪の方がメイン業務のような気がする。

しかも、守護者と神魔獣の関係や神様の存在について守秘義務を守る限り、こちら側の知識や事物の持ち込みも自由だ。

その代わり、神様の加護による生活保証といっても、何もしなくてよい分けではなく、異世界で何らかの収入を得ると、こちら側で同

価値の収入が発生する仕組みになっているのだとか。

あれれエ？・・・それって結局、こちら側の世界では、ですよ？・・・世間様的には相変わらず、私って自宅警備員なんじゃ？・・・
いいいいやあああああ！

ま、それはそれとして、神様が本当は私に何をさせたいのか良く分らないが、兎に角、二つの世界の行き来には、我が家の押し入れが使用される。

残念ながら、神様といえども、異世界間の「ど〇でもドア」は世界にかかる負担が大きいそうで、押し入れと「神魔獣の間」がデフォルトで繋がったまま、それではとてつもなく不便なので、神魔獣の間にある転移魔法陣で、地上との行き来をすることになる。

ちなみに、私が授かった能力は、前任者が持っていたものと同等の力だそうだ。

もちよつと詳しく、と粘ってみたが、全部分かってしまつては面白くなかうと返された。

まあ、神魔獣の能力に関する情報なら、スンさんに聞けばある程度分かるはずだし、目を覚ましたら聞いてみようと思う。

しかしだ。

この人、ホントよく寝るなあ、まさか本当にあと5年も寝るつもりじゃないだろうな？なんてことを考えていたら起きました。

幸い、目が覚めた途端に斬りかかられるといった、心配された事態にはならなかった。

「・・・うん？うん・・・おはようシュン」

「まだ、こんばんわ、ですよ、スンさん？」

それでも8時間以上は眠っていたはずなので、休養十分なのか、ベ

ツドに横たわったまま、大きく伸びをする。

スンさん、かわいいです、かわいいですけど、やめてください！その幸せそうで満ち足りた、無防備な素敵な笑顔は！美人さんのそういう姿は私には猛毒です。主に精神面で！

さっきの会話だって、恋人どうしならどれだけ甘い会話か！？

でも、せっかくなので・・・『ほ〇てま〇やろ～～～！』（心の叫び）

「お腹、空いてませんか？少しだけご飯が残ってますが？」

「いや、不思議だな？あまり空腹を感じない。さっき貰った食料は特別なもののかな？」

「いいえ。ごく普通のパンと飲み物ですよ」

神様が、その体を使って飯食ったとは云えない。

どうでもいい会話で自身の黒い想念を誤魔化しつつ、精神の立て直しを図る。

今更だが、云っておこう。

私は、かなりHだ。それもかなり守備範囲の広い。

ただし、どんな場合でも、相手の明示の或いは黙示の了解がある場合に限る。

「そうか？」

「そうですよ」

せっかく立て直しつつあるのに、スンさんはまた笑顔を見せる。自分でも分かる。耳が赤くなっているのが。

スンさんはそのことを知ってか知らずにか、クスクスと笑う。

ああ、駄目だ・・・見つめないで・・・

結論から申しましょう。いろいろお話した末に・・・

スンさんとエツチしました。

抱きしめたスンの体は思った通り、素晴らしい弾力と柔軟性を持っていた。

.....都合により削除されました.....

その後、外が明るくなるまで、何度もスンと交わった。

正確には、明るくなってスンが息も絶え絶えに「お腹が空いた」と抗議するまでだ。

なんか、いろいろごめんなさい・・・すごく、良かった。

5 食後は運動するようです。(後書き)

ちよつとえつちいですか？

エツチ過ぎたみたいです 一部削除 (11/21)

6 お迎えが来るようです。

それから二日間、食事をする時とスンが気絶した時を除いて、ありとあらゆる男のロマンを叶えて貰った。スンには、何がロマンなのか分からなかったみたいだが。

お陰さまで、インターバルでの会話を通じて、いろいろな事が分かった。と云っても、世界の成り立ちやら、基本ルールとかは、神様から直接ご教授頂いていたので、主に、スンやその仲間達の情報の方だった。

「じゃあ、スンは剣士で前衛なんですね？」

「・・・シヨウ。少し気になるのだが、どうして私を「さん」付けで呼ぶのだ？「スン」と呼び捨ててくれて構わないのだが？」

少し拗ねたように問いかけるところの、このスンだが、エッチな気分の時は女の子言葉なんだが、何故か、それ以外では凛々しい男言葉で話す。まあ、そのギャップに萌えるうえに「して!？」のサインになっているから非常に分かり易くて、大変よろしい。

「スンさんがそう言ってくれるなら、呼び捨てにしますよ?・・・スン・・・」

「シヨウ・・・私はいいい歳だからな。迷惑かも知れんが・・・だが、私はシヨウを縛ったりしないぞ?」

「そんなことはないよ。スンは本当に綺麗だ。スンみたいに綺麗な人と・・・なんて、夢みたいだよ。」

そう云って、スンの頬を撫でると、うれしそうに微笑んだ。ちなみに、上の会話は全て、二人とも全裸でなされている。

実際、スンは美しい。そして、とても可愛らしくもある。

で、このとき気が付いたのだが、本人曰く、28歳だそうだが、年の割に肌ツヤが異常に良くはないだろうか？まるで10代の娘のような。

女性は性的に満たされると、肌ツヤが良くなるとは云われているが、スンのそれはちょっと異常では？と思われた。

私の守備範囲は異常に広いので、30代だろうと、40代だろうと、その時々 of 美しさを愛でるから年齢は全く気にしないのだが、今のスンを見て、30歳前後と判断する男は、恐らくいないだろう。なんなんだ？まあ、悪いことではないからいいけど。

そんなこんなで、二日間を過ごし、神様の教えてくれた時間が迫ってきた。

ええまあ、・・・なんだ・・・あれだな・・・。

神様がおっしゃるには、あと数時間後にはスンの仲間の魔術師が隣に転移してくるので、その人にくっついて、一度、迷宮を出るように云われている。なんでも、私がこちらの世界から消えている間に、「私が事故死する因果律に手を加える」のだそう。

幸い、スンを迎えにくる魔術師に頼めば、転移魔法陣に手を加えて迷宮の外から直接お隣の部屋に戻ってこられるそうなので、最低三日間ばかり遊んで来いと。

遊んで来いと云われても、先立つ物が無い分けて・・・と思っていたら、ピンときた。

スンからの情報で分かったことだが、あちらには碌な鏡が無いらしい。というより、そもそもガラス自体が非常に貴重で、基本的に王侯貴族の持ち物。

鏡に至っては、ガラスを完全に透明にする技術や板状にする技術が未発達で、どうしても気泡が混じるし透明にならないので、ガラス

鏡の発想がない。

一般的には、そのまま水鏡か銅鏡が使用されているそうで、貴族やお金持ちになると、映像を直接映し出す魔術具を使用するらしい。どおりで、洗面台にある縦横1メートルちょいの鏡に、スンの食い付きが良かったわけだ。

しばらく、固まっていたからなあ・・・

ちなみに、こちらの世界で、昔、使用されていた銅鏡も、腕のいい職人さんが磨くとかかなり美しい映像を結ぶのだが、大きなものを作ると、どんなに手を尽くしても素材の重量や温度変化などで歪むため、一定の大きさ以上のものは作られなかったらしい。

まあ、銅鏡自体が財力や権威の象徴だった太古の時代を除けばだが。

なにはともあれ、当座の収入源として鏡を持っていこうと思う。近くのコンビニに行けば、一つ300円〜500円位で売っているだろうし、大小取り混ぜて、リュックに入れておこうと思う。

「何を考えているの？ シュン」

はい、きましたよ、女の子言葉。

さっきまで窓の外を「観察」していたはずのスンが、窓辺に立ってこちらを見ている。

金色の髪が陽光を浴びてキラキラと輝いている。

もう夏用パジャマの上着がデフォルトになりつつあるのに、その姿に異常な劣情を催すのは・・・しかし当然だと思う。

スンは、それ以外何も身に着けておらず、しかも、ボタンさえ閉めていないのだから。

「こっちにおいで、スン」

云い忘れていたが、スンと交わるようになってから、自分自身も不思議に思うことがある。

私は体力には自信が無い。子供のころから短距離は得意な方だったが長距離になると全く駄目だったのに、今は、全然、疲れない。

心地よい疲労感はあるが、すぐに回復する。

エッチは別腹とか？んなことああない。

それなのに、なぜか、スンが気絶するまでやってしまう。（かわいいから！）

もしかして守護者を引き受けた影響なんだろうか？

そんなふうに、私はいろいろ考えを巡らしていたが、いつもどおり、次第にスンの体に溺れていき、スンは私の下で、もう何度目かの甘い嬌声を上げている。

結局、私の思考の終着点は「ま、いいかッ！」だったのだが・・・思考が外に漏れていたらしい。

「良くありません！」

「キャッ！」

「おうッ？」

まだ、時間はあると思っていたのに、やり過ぎました。

スンとイチャイチャしている間にも時間は等速で流れていき、インシュタインさんの相対性理論は適用されず、いや適用されたのか？兎に角、気が付けば予定の時間。

本当ならそれとなくスンに服を着せて、お茶でも飲みながら「その時」を待つ予定だったのだが、いつの間にか、押し入れの扉の向こう側に、可愛らしいお嬢さんが真っ赤な顔で立っていて、スンを押し倒している私を睨みつけている。

彼女の足元にある、亀甲縛りされた本さんと雑誌さんがシユールだ。唯一の救いは、私とスンの腰から下が毛布で隠されていたことだけだろう。

しかし、まあ、あれだねえ。

異世界の女性てえのは、ナニかい？

初めて会う異世界の男に対しては、おっかない顔で殺気を放つものなのかい？

いえ、違うと思います。
すみません。

6 お迎えが来るようです。(後書き)

ううん。エッチな思考が止まらない。

7 ようやく旅立つようです。

大晦日の夜ともなれば、ある人は2年参りに神社へと向かい、ある人と小動物は炬燵で丸くなって紅白でも見ながら「平和に」過ごすところ。

私はというと、殺気の漏れる我が家から、一路、コンビニを目指して、盗んだバイクで走り出したところだ。いや盗んではないけどね、原付だし。

ああ、逃げたさ！

私より若干大きな体でありながら、必死に「行かないで」と目で訴えるスンを残して。

あそこで、私が着ていたシャツの袖口をチョコンと掴まれたら、逃走を断念せざるを得なかったことだろう。スンにそういったスキルが無かったことが幸いした。

ええ、私は卑怯者です、ヘタレですとも！

一応、状況説明はしたのだが、アリスさんというらしい少女の怒りは収まらず、仲間達がこの三日間、どれほど心配したかとか、姿を消したスンの居場所を探るために、アリス自身がどれほど気力と魔力を振り絞ったかとか、漸く見つけたスンの気配を頼りに転移するにしても、初めての場所への転移がどれほどの恐怖だったかとか、それなのに・・・と、目に涙を溜めながらトクトクと小一時間、お説教をされました。正座でね。

まあ、私も悪かったとは思っているんだ。

アリスさんが怒りに震えながら異世界の扉を超えようと、トテトテと踏み出したとき、彼女の下に、頼んでもいないのに神様が舞い降りてきた。主に笑いの神様が。

で、亀甲縛りの本さんの方に躓いて、「ペキヨ」って感じでこけてしまったのだ。

幸い怪我は無かったが、私とスンは我慢できなかった。

「「プッ！」」

フローリングの上にカーペットを敷いていても、正座する人間にとっては「焼け石に水」であることを、身を持って体験できたことを喜ぶべきだろうか？

かくして、スンは単独でアリスさんを宥めることに全力を尽くし、私は理由を付けてコンビニにお泊まりセットと鏡を買いに走り、大晦日の夜は夜更け過ぎに雪へと変わるどころか雨さえ降らず、沁みるような寒さだけが私の体を締め付けるのであった、まる。

ということがあって、私が30分程でコンビニから戻る頃には、アリスさんはどうにか落ち着き、それどころか、我が家の内部をダンジョンよろしく探索し、各種の「財宝」をせっせと、どこから出したのか袋に詰めていた。

「シュンさん、これも良いですか？」

「ああ、いいですよ。そんな物で宜しければ」

アリスさんが示していたのは、プリンター用紙の分厚い束（未開封）だった。その他にも鉛筆と消しゴムとか。愛用の0.28ミリの赤のボールペンや半透明の物差しを、机の中から発見した時はえらい騒ぎになった。

魔術師だからそういったものに目がいくのだろうか？ものすごくうれしそうで、駄目とは云えない。まあ、買い置きもあるし。

それにしてもちっちゃいなあ、と、私は嬉々として袋詰めする少女を見守った。

アリスさんは茶髪のセミロングに黒い瞳、身長は140センチ前後と小柄で、お人形さんのように可愛らしい少女だ。推定14歳とみた。

私は、ロリ「も」好きだが、この場合はあくまで「愛でる」対象としてであって、青少年保護育成条例に違反するようなマネはしない。まあ、条例は基本的に属地主義をとっているから、異世界でナニをしようと・・・て、無駄知識が・・・orz

スンの方は、しきりにグラスや鏡を持ち帰りがったが、取り外しが異常に面倒だし、割れる可能性が高いため諦めたようだ。可哀想なので、買ってきたばかりの黒のコンパクトを進呈したら凛々しいお顔が赤くなった。いまさらですか？

その他には1リットルのペットボトル（中身入り）を2本と、子供の頃に何かの懸賞であたって、筆筒の中に仕舞い込まれていた安物の天体望遠鏡。

そして最後に、恥ずかしそうに「パジャマが欲しい」といった彼女に激しく萌えた。

ちなみに、我が家にある電子機器全般については、向こうでは何の役にも立たないガラクタだからと説明したら二人ともすんなり納得してくれた。必要なら何時でも取りに来れば良いしね。

ちなみに、これらのお宝は、私の異世界探訪の一步として、三日間の護衛兼ガイドの報酬と、私が異世界人であることや我が家の押し入れの秘密についての口止め料だ。

スンにプレゼントしたコンパクトとパジャマは別として。

随分安いな、とは思ったが、スンによると、私の用意したコンビン鏡一枚で十分な報酬に成り得るそうだ。アリスさんも同意見だったのでそうなのだろうと思う。

アリスさんによると、恐らく、一枚あたり金貨10枚は下らないとか。
貨幣価値が良く分からなかったが、いろいろ聞いて、貨幣価値をこちら側のレートに換算すると約一千万円?・・・後、6枚あるんですが。

私が向こうに行きたい理由は、単に旅がしたいというより「冒険者になりたい」と力説したら、溜息交じりに納得してくれた。三日間だけだしね。

アリスさんによると、あちらでも、お貴族さんのボンボンとか、いくらでも贅沢に平穩に暮せるのに、わざわざ冒険者を志す若い子は多いのだとか。私は若くはないですよ?

この時、スンが微妙な顔をしていたのには気が付かなかった。

さて、私の持ち物だが・・・

以前、出張したときにボストンで購入したリュックサックに詰め込んだのは、コンビニで購入したお泊まりセットとコンビニ鏡。その他には、非常持ち出し袋の中にあつた食料と、手動と太陽光で充電できるLEDライトに使い捨てカイロ、下着数枚に、台所にあつた袋麺は紙袋に入れて大量に持っていくことにした。

武器?なにそれ、おいしいの?・・・スンが予備の剣を貸してくれるそうだ。

「じゃ、そろそろ行くわよ?」

アリスさんは意気揚々とお宝?の詰まった袋を担ぐと、足取り軽く、でも慎重に、押し入れの扉を固定する亀甲縛り(↑しつこいけど、ここ重要)された本さんと雑誌さんを跨いで、転移魔法陣の前に進んだ。

その際、全身を覆う黒いローブがちよっと引っかかった。裾をズリ

ズリ引き摺るから。

うううむ。もし、仮に、本さんがドSだったなら、この三日間で亀甲縛りされるは、耽美な魔女っ子に蹴られるは、跨がれるは……
・・やめよう。

「ん？みんな一度に転移できるんですか？」

「当たり前じゃない！私を誰だと思ってるのよ？『イスファアーナの天才』とは私のことよ？！」

「うむ。アリスは大陸きつての優秀な魔術師だからな」

スンがそう云うのなら大丈夫だろう。「しらんがな！！」というアリスさんへの突っ込みはしないでおいた。必殺のボケ潰し……なのだが、分かってももらえない。

それより、スニーカー忘れたし。いかんいかん、と頭を掻きつつ取りに行く。

そして、アリスさんがどこから取り出した杖を頭上にかざして、何やら呪文を唱えると、魔法陣が……て、テンプレなので以下省略。

「シギやあああああああ！！！」

はいはい。

7 ようやく旅立つようです。(後書き)

しんどいゾ ストックがキレてきたぞ
今頃気が付いたサブタイトルの間違い (11月15日)
ん? ルビが付いてる? なんで? どうして?

8 イベントが発生したようです。

蜥蜴だな。

全体の形は、そのまんま蜥蜴なんだが、黒をベースの銀の縞模様がヌラリと光り、ショッキングピンクの尻尾がクネクネしている。なぜピンク？これで体長7〜8メートルでなければ、私的には「可愛い奴」で済むのだが、オツカナイ顔で威嚇されちゃあ台無し？

「おお！スン、アリス！無事だったか？すまんがちょっと手伝え！」

転移の余韻も収まらないうちに遠くから声を掛けられた二人は、「シュンは此処にいろ！」と言い残し、アリスさんは担いでいた袋を投げ出して杖を振り上げ、スンは腰に差した剣を引き抜き、蜥蜴に向かって走り出した。

私はというと、投げ出された袋を回収して、広大といってよい部屋の隅に逃げ出した。

プロフェッショナルの仕事に素人が口出ししても、良い事など一つもない。

「なんでこんな所にシルバードが？！あいつは20階層の魔獣じゃない！」

「さあなあ・・・まあ、出てきちゃったもんは、しょうがあんめえ」

最初に声を掛けた髭面の男は、壮年の大男で全身甲冑に身を包み、巨大な盾で尻尾の一撃を撥ね退け、それと同時に右手に持った斧を叩きつけている。が、ギン！という鈍い音がするだけで攻撃の効果は薄いようだ。

相当固い鱗に覆われているのか、直ぐにスンも駆け寄り、頭部に近い部分に剣を叩きつけて牽制するが、明らかに剣筋が流れている。

他にもスンの仲間が槍や弓といった得物でヒットアンドウェイを繰り返している。

効果が薄いとはいえ、大した連携だが、魔獣の方も尻尾と巨大な顎で攻撃を蹴散らし、隙あらば一気に齧り付くべく機会を狙っている。

しかし、もっとも驚くべきことは、スンの動き。

あれが内力系魔術「身体強化」だろうか？目で追えない程ではないが、人間の出せる速度を遥かに超えて移動を繰り返している。

「みんなあ！お待たせ！離れて！！！」

一人だけ距離をとってアリスさんが、ひと際大きな声で叫ぶと、それまで、蜥蜴を囲んでいたスンと3人の男たちが、あっという間にアリスさんの周りに集まり、防護壁を築く。

なるほど、牽制だけでなく、足止めの効果もあったわけか。

「我が前に現れ出でよ、其は殲滅の炎、嘆きの風と共に、ファイヤーーストーム！」

詠唱のたびにアリスさんの構える杖の正面に、直径1メートル程の魔法陣が浮かび上がり、最後のキーワードと共に、そこから巨大な炎が渦を巻いて吹き出される。

炎の渦は蜥蜴を押し包むように広がり、一気に燃やし尽くした。すげえええ！！！！

「GUGYALALALALALALA・・・」

蜥蜴は最後の力を振り絞って、2・3歩、こちらに向かってきたが、すぐに力尽きて地に這った。

「ふいい・・・あつぶねえあぶねえ。やっぱシルバーリザード相手に魔術師無しはキツイわな！がははははあ！」

「そうですか？その割には楽しそうでしたか？」

「そうそう！『アリスとスンの帰還とどっちが早いかな？』なんて、云ってなかったっすか？」

最初が大男、次が弓使い、最後が槍使いの少年だった。年齢も概ねその順のようだが、真ん中の弓使いが一番のイケメン。しかも、イメージどおりの丁寧語。

イケメン死すべし！

それは兎も角、なんだが、私、忘れられていませんか？仲間の再会と今の戦闘のことで盛り上がってますが？「やっぱ嬢ちゃんの魔法はすごいな！」とか「スンさんのアクセルも大したものです。」とか・

フンフン、ぐしゅんぐしゅん・・・

私は大人だ。小さなことに目くじらを立てたり・・・しないもん。ホントだお？

目くじらは立てないが幼児退行はする・・・というか、した。

その後、私のことを思い出してくれたスンによってメンバーに紹介され、改めて三日間の護衛とガイドを依頼した。

リーダーの大男ダークさんには「スンが世話になった」と握手しながら礼を云われ、依頼を快く引き受けてくれた。私の手が壊れるのでヤメテ！

槍使いのチャックさんは明らかに私より年下（17歳くらい？）にも関わらず「ようよう！あんたシュンだっけか？スンの姐さんと三日も何してた？姐さん何かテッカテカだけど？」とニヤニヤされたが適当に誤魔化した。

私とスンの関係は『大人の関係』だったと理解している。所謂、『吊り橋効果』の結果に過ぎないので、アリスさんにも口止めしてある。

弓使いのグスタフさんは爽やか且つスマートに「よろしく、依頼人殿」とだけ云った。

その後、手分けしてシルバーザードの爪20本を回収して『神魔獣の間』を後にした。

なんでも、神魔獣の間からは転移魔法が使えないらしい。アリスさんが設置した魔法陣はその部屋にあった魔法陣をアレンジしたもので、例の部屋との行き来専用には使えない。

理屈は良く分からなかったが、神様の事前説明どおりということか。

神魔獣の間の前室には、パーティーの荷物が置かれていた。

どこの迷宮も、おおよそ10階層ごとに大魔獣の部屋があり、その前室は安全地帯と考えられている。通称、『決断の部屋』

その他にも、幾つかの安全地帯が存在するが、それはランダムに存在しているため、余程、踏破率の高い迷宮で無い限り、その位置はそれぞれのパーティーの秘密とされる。

パーティーメンバー以外は全て競争相手、性質の悪い冒険者の場合は敵にさえ成り得るのだから、当然と云えるか。

「んじゃあ、一服するべ。腹も減ったしな」

ダークさんの指示で、一休みすることになった。

荷物に異常がないか調べ、チャックさんが火を起こす。神魔獣の間に侵入する前にも此処で野営でもしたのか、石を集めて作られた釜戸がある。

枯れ木など無いからどうするのかと思ったら、荷物の中から蠟の塊

のようなものを出して少しずつ削りながら釜戸にくべていく。
結構な火力だった。

「でもダーク。食料は殆どありませんよ。白湯で我慢です」

「えええ？マジッすか！」

「あ、あの・・・これよかったら、詰まらないものですが、どうぞ
！」

私は、持って来ていた袋麺（日本の誇るチ○ンラーメン）を差し出した。

初対面の人との円滑なコミュニケーションを図るには、贈り物が効果的。

賄賂？何それ、おいしいの？・・・この場合は美味しいです！

だって、私は『大人な社会人』だから。

8 イベントが発生したようです。(後書き)

だんだん、つじつまがあ・・・でも突っ走ります。

9 第一階層はピクニック気分のようにです。

私たちは現在、『深奥の迷宮』50階層のうちの第1階層に來ている。一番上だ。

見渡す限りの草原が広がり、起伏に跳んだ地形に所々ブッシュが広がっている。何処から風さえ吹いているのに、明らかに屋内の雰囲気がある。空が無い。かなりの高さに天井があつて、例の部屋の天井と同じく、薄く光っている。

私たちは、その奇妙な草原の中を、そこだけは踏み固められたと思しき道を歩く。

最下層域で食べたラーメンについては、鍋が無かつたのでそれぞれのメンバーの鉄製カップにアリスさんが水を作り、それを釜戸で温め、沸騰したところでラーメンを半分ずつ投入。ざっと3分待つてから「飲む」ことにしたのだが・・・

みんなが「これいけますね」とか「おいしい」とかそれぞれ発言するなか、一杯目を飲みほしたダークさんが、無言で残りの欠片を見つめるので、慌てて「もう一つどうですか」と、大人の対応をした私。

結果、私が持っていた某デパートの紙袋は、現在、ダークさんのふつとい腕の中に大事そうに抱えられている。二つとも。

大盾と斧は一緒にたにされて背中に担がれている。それでいいのか？ダークさん！？

一服しながらアリスさんが披露目した我が家の「お宝」の数々より、そっちですか？

帰還用の転移魔法陣に現れた私たちを、若い冒険者グループが遠くから眺めていたが、特に近寄ってくることはなかった。

ただ、「おいあれ！鉄壁のダークじゃないか？」とか「風の旅団！来てたのか！」みたいな声は聞こえていたが、みんな気にした風もなく、スタスタと出口と思しき方向に歩いていく。有名人なんですねダークさん。

そして、あちら此方で、複数の冒険者が得物を追っている様子が目に留まる。珍しそうに眺めていると、小遣い稼ぎと経験のために、小物の魔獣を狩っているのだと、後ろを歩くグスタフさんが教えてくれた。

「チャック、右前方20。ブレードラビット3だよ」

唐突にアリスさんが呼び掛けると。「あいよ」と、緊張した風もなくチャックさんが小走りに前に出る。

そして道の脇にあったブッシュが揺れたと思った時には、何かチャックさんに飛び掛かったが、シュンシュンと槍が鳴って、ぽとりと地面にウサギが転がった。

「すごいですね、チャックさん！あの一瞬で、眉間を一撃なんて！」

チャックさんの早技に称賛の言葉を贈ると「へえ、良く見えたな」と逆に感心された。

いや、確かに早くて正確で見事な攻撃だったが「見えない」という程ではなかったので、「そうですか？あはは」と曖昧に答えた。ビバ！日本人！

ブレードラビットは油断さえしなければ、一般人でも狩ることができる最下級の魔獣の一種で、前足の中指の爪が異常に発達して刃になっている。このブレードが良く切れるため、剃刀の代わりに理容や美容に需要があるのだそうだ。

ただし、非常に繊細で、狩りのときに下手に攻撃を受けると傷付いてしまい、売り物にならなくなる。そのため、先制攻撃で、一撃で仕留める技量が必要になる。

「まあ、ブレードラビットを上手に狩れるようになったら、次の階にいつてもいいかなってところだな・・・うまく狩れなくても、肉は売れるしな。第1階層なんて、俺達にとっちゃ、ピクニックみたいなもんさ」

「へええ」と感心する私。うむ！チャックさんは褒めたら伸びる子と見ました。今後も、どんどん褒めよう。

それにしても気になるのがスンだ。転移前に私をみんなに紹介した時以来、まったく私と会話をしてくれない。短い夢だったかあ・・・まあ、しょうがない。諦めは良い方だ！

私の容姿は中の中、最屑して中の上。背も低い。明らかにもてるタイプではないから、スンとの寝物語を真に受けるほど自惚れたりもしないし、一度そういう関係になったからといって、しつこく迫るのも性に合わない。スンもそうだろう。

「どうだい、ちょっとやってみないか？なに、俺がサポートしてやるよ」

「へ？」

「へ？じゃねえよ・・・いくら俺達が護衛に付くからって、やっぱ、一応護身くらいはできて貰わなきゃ。あぶなっかしすぎるぜ？」

「そうですね。ショウさんの力量をみるためにも、いいかもしれないませんね？どうです？」

そう云われまして・・・そんな期待に満ちた目で見ないでえ！私はそういったプレッシャーに弱いんです。困った顔でダークさんを見ると、我関せずの表情で紙袋を覗き込んでいる。駄目だ、この

人。

ラーメン見てトリップしてやがるな？くおのおお、スットコドツコイツ！

「やってみれば良いじゃないか？“ ショウさん”。武器はわたしのショートソードを貸そう」

あれれえ・・・“ スンさん” 君まで？もしかして、イジメデスカ？ナゼ？ドウシテ？

なし崩しに弱い私。ああ、良くも悪くも日本人。しかし、できなくても頑張ってみるのも日本人。

良いでしょう。剣道初段の腕前。お見せしようじゃありませんか！スンからショートソードを受け取って前衛に立つと「俺はあくまでサポートってことで」と左側にチャックさんが並んでくれた。

ちなみに、生き物を殺すことに対しての精神的負担は、私にはあまりない。

どんな方法であれ、生きるために必要なら、私はそれを肯定する。私の父はかつて漁師だったからか、少しばかり知恵が付いた頃には自分が生きるために、多くの生き物を殺しているのだということに気が付いていた。

そのおかげで、自分が生きていること、生活ができていることに。

「正面20。ブレードラビット2」

アリスさんの声で私の足が止まる。2匹のブレードラビットはブッシュを飛び出し、一目散に此方に走り寄ると、助走を付けてジャンプした。

私から見て、左手の一匹が先に、続いて右。2匹の間隔は1メートル弱。

私は、腰に構えたショートソードを、右足を斜め前に一步踏み出しながら抜き打ち、そのまま左のブレードラビットの右をすり抜けながら正面から水平に首を狙う。

しかし、ブレードが邪魔になることに気が付いて、咄嗟に剣筋を跳ね上げ、すれ違いざまに上から首に落とし、そのまま振り向きざまに、今度は下から右側のブレードラビットの首を刎ね上げた。

「はいッ？」

「・・・！」

「あれえ？」

最初がチャックさんで、次がスン。最後は私。道端に転がる2匹の魔獣と、首を傾げる私に、みんなが驚きの視線を送ってくる。

ハッと気が付いて、ショートソードの血を振り飛ばして、カッコよく鞆に納めようとして落つことしたのは御愛嬌。

ピクニックは危険がいっぱい、というお話し。

9 第一階層はピクニック気分のようにです。(後書き)

ほかの人ってどうやって書いてるんだろう。

私は書きたいという気力だけ。

なんか、読んでくれる人もいるみたいなので、せめてちゃんと物語的に盛り上げて終わらせたい。

10 気が付けば最強のようです。

「やるじゃあねえか・・・がはははあ！」

と笑うのは髭面のダークさん。

ラーメン見ながらトリップしていた分けではなかったらしい。

私の剣技にあきれたように見つめる他のメンバー。

「兄ちゃんよ？あんた素人じゃなかったのかよ？おれの出る幕ないじゃん」

「そうね？ちよつとはやるみたいね。アクセルも、まあまあ見事だったわ」

「本当に、お見事です。しかし・・・」

「・・・」

いえ、いえ、私は素人ですよ？高校の部活で剣道はしてましたけど。その程度じゃ、実戦には物の役に立たないくらい分かりますよ？ていうか、例外はあっても実戦に役に立たないことが分かったから、一時期、本気で辞めようと思ったくらいですから。

それと、アリスさん？アクセルってなんですか？

ん？まさか、私が守護者だからですか？神様！あなたナニしてくれちゃってるんですか？

ぷるぷるぷる・・・ぷるぷるぷる・・・

ジャパニーズスキル「曖昧笑顔」で誤魔化していたら、Gパンの左前に入れてあった携帯がぷるぷると振動した。通話はムリだろうと思っていたが、なんとなく癖で持って来ていた携帯電話。時計や写真なんか其れなりには使えるし。

しかし、友達の少ない私のこと。携帯がぶるっても、電話だと思うことはない。メールも登録したビデオ屋さんや本屋さんの「お知らせ」程度。思い当たるのは何かで自分で設定したアラームか？

ぶるぶるぶる・・・

三度ぶるぶるした時、私は異常に気が付いて慌てて携帯を取り出して開いてみると、画面表示は「555ー××××・・・」の電話番号が・・・

みんなに「ちょっとすみません」と断ってから携帯を耳に当てる。視線が痛い。

身に付いた礼儀はおそろしい。

「うむ・・・神じゃ」

予想通りだった。予想通りすぎて全く驚けない。555から始まる電話番号はハリウッド映画で使用される架空の電話番号だ。芸の細かい神様だ。

だが、今はそれは置いて。私の守護者としての能力について聞かなければならない。

この微妙なタイミングでの電話も意図があるに違いない。

しかし、質問を投げかける前に神様は応えてくれた。

「お主の体は守護者を引き受けてくれた時に、神竜にしておいた。まあ、人の身に少々強引に押し込んだでな。入りきらなんだ部分は魔力にしておいたがの」

「・・・あのおくもひもひイ？」（by ふじやまかんび様）

「まあ、それでも十分とは云えんでな。1年ほどかけて少しずつ変化していくで」

「・・・結局。わたしって、人間じゃない・・・？・・・とか？」

「今は、まだ、人じゃよ」

“今は”って・・・“まだ”って・・・なに？・・・私の前任者って神竜だったの？

幸い、鱗とかは生えてこないらしいが、いつの間にか私は、人間では無くなりつつあるらしい。ふと気になって聞いてみた。

「あの。もしかして、神竜の能力の中に、若返りってありません？」

「・・・そうじゃの、まだ、効力は弱いじやろうが、そなた自身も含めて、そなたの血肉は他種族にとっては再生（若返り）と身体強化の霊薬になるの。まあ、そもそも、この世界にそなたを傷つけることのできる者など、殆どおらんがの。ふわははは」

ちよつと話し込んでしまったが、纏めると、私は人の姿をした神竜で、いずれ完全な不老不死に至るらしいが、人の身に入りきらなかった神力は、魔力に変えて与えられているのだそうだ。

そして、私の精を受けた者に神竜の加護を与え、若返りと身体強化の恩恵を与える。スンの若返りが微妙なのは・・・ちゃんとコンちゃん使ってたから！（男の責任だぞ？）

なお、若返りは詰まる所、究極の再生能力だが、赤ちゃんにまで遡ることは無く、もっとも身体能力が高まる年齢までとのことだった。

「・・・普通、こう云う場合、少しずつ訓練とか試練とかを乗り越えて強くなるものだと思うたのですが？」

「人はそうじゃな。じゃが、考えても見よ。そなたの世界における虎は、ライオンは訓練したから強いのかの？今のそなたも同じじゃ。神竜として“存在する”ただそれだけで、この世に存在するありとあらゆる存在の中で最強なのじゃ。ま、（仮）じゃがな」

なんだか深いのか深くないのか分からない御高説を賜って電話は切

れた。

必要があれば携帯で連絡できるらしいから良いけど。

このことはスンに話すべきだろうか？このまま、黙っていても、肌を重ねることがなければ彼女の若返り効果は、お肌スベスベの強力版程度で収まる。

“ 僕、神竜になっちゃいました。で、エッチすれば若返るよ！
テヘツ☆”

キ、キモッ！・・・黙ってしよう！

「話しは終わったのか？では、さっさと行くぞ！」

声を掛けてきたのはスンだった。彼女には携帯電話の機能について話してあったから、誰かと連絡を取っていたことが分かっている。相手が神様だとは思っていないだろうけど。

改めてスンを見ると、やっぱり、綺麗だ。若返りの効果だけでなく、いや、そう知らされた後だからだろうか？前にも増して綺麗に見える。

スンの10代の頃とか、見てみたい気もするが・・・

スンがみんなに説明しておいてくれたおかげで、携帯電話は私の世界の魔道具であると理解されていた。それでもチャックさんとアリスさんは興味津津だったが、こちらの世界には、魔術師限定ではあるが念話の魔法もあるので、機能としては珍しいものではない。

まあ、これはアリスさんがちょっと負けず嫌いを発揮したというところで。

それにしても、スンの態度が冷たい。

恋人になってくれなくてもかまわないから、もう少し普通の関係でありたいものだ。

三日間とはいえ、ツライ。美人さんの精神攻撃はきついですよ？

そう思いつつも、私の前を歩くスンの後ろ姿に、我が家での痴態が重なる。

歩くたびにお尻が・・・上だけパジャマで隠されていたお尻が・・・あ、ところで、スンの鎧はフルアーマーとは云わないらしい。胸部から腹部にかけてはシヨルダーカバー付きの金属装甲が覆っているが、腰から下は、何というか・・・昔流行った巻きスカート？に金属のプレートを張り付けている感じ？

その下にズボンを履いているが腿には装甲は無く、膝までの金属製のブーツ。肘から手首までは外側が金属プレート、内側は皮のようだ。

どれも内張りに皮が使用されていて、カチャカチャと不用意な音を立てない。

「おう！見えてきたぜ！あれが深奥の迷宮の出入り口だ！」

10 気が付けば最強のようです。(後書き)

ねむい・・・

11 馬車の旅はツライようです。

迷宮の長いトンネルを抜けるとそこは雪国だった。・・・いや、冗談抜きで。

聞いてないですよ。私、Gパンに厚手のシャツと、大学生の時に購入して以来、手放せなくなった黒のロングコートしか着てませんよ。積雪は10センチ程だけど、雪ですよ？家の方では数年に一度積めるかどうか。

「おや、おはようさん。今回の迷宮はどうじゃったね？」

出入口は、ほんとにトンネル状になっていて、100メートル程歩いて漸く外に出たが、そこには、軽装の鎧を着たお爺さんが槍を持って立っていた。

こんなお年寄りで大丈夫なんだろうか？

お爺さんはギルドに雇われた見張り番だそうで、他に二人いて交代で此処にいるらしい。

「今回はちょっとしたトラブルがあってなあ。食料が尽きたところで帰って来たよ」

「そーいやあ、あんた方が潜ったのは5日も前だったかな。風の旅団も深奥の神魔獣には嫌われたか！？ふおおおお・・・」

えっと・・・此処にいます・・・神魔獣。・・・なんか、ごめんなさい。

「まあ、そういうことにしておいてやるぜ。十分稼がせて貰ったしな。それより爺さん。俺達の馬車はどんな按配だい？プル達は元気か？」

「あああ、もちろんじゃ！大事に納屋で休んでいるさ。少し寂しがつて泣いておったが」

迷宮の入り口には大抵の場合、ギルドの派遣した番人がいるそうだがくまで見張りであつて、数年から数十年に一度、魔獣が溢れる現象、『狂騒』を監視するために、冒険者たちにサービスを提供するために居る訳ではない。

しかし、“個人的に”便宜を図り、その範囲で小銭を稼ぐことは禁止されていないので、ダークさん達「風の旅団」は馬と馬車を預けていたらしい。

見張りのお爺さんに見送られ、雪に足を取られながら近くの納屋に向かうと、チャックさんとグスタフさんが、さつさと巨大な馬車を引き出し、二頭の馬を馬車に繋いだ。馬は普通のサラブレッドに見えたが、プルと呼ばれる馬種らしい。明らかにサラブレッドなのに馬体が通常の1.5倍あり、道産子のように巨大だった。まあ、この位でないと、あの馬車は引けないだろうけど。

「ショウさん、乗ってください。これで取り敢えず森を抜けます。半日ほどでしょうか？そこからは転移魔法が使えますから、馬車ごとクブスリーの町に跳びます。今日はそこで一泊します。クブスリーの町も結構大きな町ですし、楽しめますよ」

私の旅には目的がない。強いて言うなら見て回るだけ。よって、極力、護衛である彼らの都合に合わせてことができるが、一応、賑やかな所に行きたいと希望はいつてある。

取り敢えずの目的地はやっぱり王都だが、彼らが迷宮で得た財宝はクブスリーの町のギルドでも換金できるので、王都に向かう必要はないのだ。

「じゃあ、クブスリーから王都に転移ですか？」

女性陣に続き馬車に乗り込みながらグスタフさんに尋ねると。

「いや、王都に転移魔法で近づくことは禁止されていますから。どうしても王都に行きたければクブスリーから馬車ですね。まあ、シヨウさんは雇い主ですから何処へなりとご案内しますが、たしか三日以内に此処にもどるのでは？クブスリーから王都までは馬車でも二日はかかりますよ」

ダメじゃん。

まあ、王都まで運んでもらって、後は一人でブラブラしても良いが、戻ってきててもアリスさんに転移魔法で『神魔獣の間』まで送ってもらわないと、我が家に帰れない。それまでに転移魔法をマスターする自信はないし、それに余りタイトなスケジュールはどうも好きになれない。世の中、何が起きるか分からないものなのだ。シミジミそれに、考えてみれば、スンを除いてみんなは五日間も迷宮に潜っていた分けだし、彼らにも少しはのんびりして貰いたいと思う。

チャックさんが御者台に上り、他のメンバーが馬車に収まると、さっそく動き出した。

思ったほど揺れないし、何より温かい。流石に匂いがキツイが、みんな気にしていないようだし、これが普通なのだろうと、空気を読んでおとなしく座席に座る。

座席の位置は、電車と同じで進行方向に向かって縦に並んでいる。入口は後部に一か所。

そこから見ると、左奥にスン、向かいが私、スンの隣がアリスさんでその向かいがダークさん、ダークさんの隣がグスタフさんとなっている。

「私たちを「風の旅団」と知って襲うような山賊はこの辺りには居ないと思いますが、念のためです」

なるほど、そう云われてみれば、私が一番安全な位置にいて、何かあればみんなが直ぐに跳び出せる位置取りとなっている。大きな荷物は天井や床下に収納されているらしく、車内は思ったほど狭くない。ダークさんの大盾は流石に天井に乘せられたが、各自の武器はみな手の届く範囲に置いてある。

しかし、私の正面がスンですか？その気も無いのに、にらめっこ状態。

二秒で私の負け！笑ったわけではないのに負けです。視線が痛すぎるので、あらぬ方向を見てしまう。うう、気まずい。

こんな私でも、女性とお付き合いした経験はある。それも、自分では信じられないことだが、結構な美人さん達だった。スンには比べようもないが。腕を組んで町を歩く時、周りの視線が気になって仕方がなかったのを覚えている。

別れた理由は、大概「私の気持ちを分かってくれない」というもので、全てのケースで一方的に好かれて、一方的に別れを切り出された。

という分けで、今でも彼女達の気持ちはわからん。が、別れはツライ。だから、恋人になっても余り深く（精神的に）関わらなくなつた。悪循環か？

そんなことを考えながら馬車の旅は続く。小ぶりの窓も風が吹き込むのを避けるため、今は閉められている。降り積もった雪のお陰で、ゴトゴトとした振動は少ないが、それでも馬車の速度は随分抑えられているらしい。

グスタフさんが、これから行く町のことや王都のことギルドのシス

テムについて色々話してくれたが、彼らも疲れているだろうから、質問は控えた。

私は「気配りのできる大人」だから。

ギシっという軋みがあつて馬車が停止した。いつの間にか、私は睡魔に誘われてうつらうつらしていたらしい。寒い御者台でチャックさんが頑張っているのに最低だなあ。

周りにはアリスさん以外は誰もいなくて、私には毛布が掛けられていた。

「休憩よ。トイレは済ませておいて」

アリスさんがそっけなくいった。

「それから、毛布を掛けてくれたスンにお礼を云っておきなさいね。私はその必要があると思うのよ!？」

車内なのに、妙に冷たい風が吹いた・・・ような気がする。

12 仲直りするようです。

馬車道の脇に少し広くなった場所があり、その隅に粗末な小屋が建てられている。昔は誰かが住んでいたのだろうか？

どんよりとした雲が、今にも雪を降らせそうだ。まだ、森の中だが、木々も枯れ草も雪で覆われているお陰で、意外と視界は悪くない。

チャックさんは小屋に飛び込み用を足し、グスタフさんとダークさんはプルの所で何やら話し込んでいる。私はスンを探して森に入った。

スンは小屋の裏側の森に入ったところで剣を振っていた。白い息と剣が空気を裂く音だけが森に響く。

「スンさん、さっきは毛布をありがとう。お陰で風邪を引かずに済みました」

私が声を掛けると、スンは剣を振るのを止めて振り向いた。寒さの中で剣を振ったせいか頬が赤くなっているが、白と黒のコントラストの中で見るスンは本当に女神様のように美しかった。まあ、女神様って見たこと無いけどね。今度、神様に聞いてみよう。

「どうして・・・」

「ん？」

「・・・どうして・・・。やっぱり、私のことなど唯の遊びだったのだな？」

「はい？」

私としては毛布のお礼方々、差し障りのない会話をして、それから“何か”でスンを怒らせてしまったことを謝ろうと思っていた。（

ちなみに、此処で理由を聞いてはいけない！)

私の数少ない恋愛経験からの教訓『彼女が不機嫌なときは、取り敢えず誠心誠意謝っとけ！』を実施する予定だったのだが・・・スンは・・・、そうだった・・・彼女は、「すごい美人さん」なのに「男前さん」なんだった。

つまり、単刀直入？質実剛健？真実一路？

今までは、周りに人が居たから黙っていたらしい。

「確かに、会ったばかりのシュンと・・・その・・・“した”ことは、ハシタナイことだったかもしれないが、私は！私は・・・誰とでも・・・その・・・“する”ようなフシダラな女ではない！シュンにそんな風に思われていたなんて思うと・・・」

綺麗な顔が悔しそうに歪む。朱の指す顔は、寒さばかりが原因ではなかったみたいだ。

うむ、なかなか熱い告白？です。こう云う時、普通の男はどんな反応をするのだろうか？

私の場合は、「萌え尽きたぜ！」の一言だった。

なに？この可愛い生き物は？

だが、ここで真っ白な灰になるわけにはいかない。断じて！

で、私は、雪の下に隠れていた石を急いで引っ張り出し、それをスンの足元に“よいしょ”と置いた。スンは私が何を始めたのか分からずぽかんと眺めていた。

石は、30センチ程でひっくり返すと実に都合よく平らで、私が乗るのに十分だった。

これで、目線が背の高いスンよりわずかに上になると、私は逃げられないようにスンの首筋から両の頬にかけて手でガッチリと固定して、少々強引に、ディープなキスをした。

「スンのことを、そんな風に思ったことは無い」

少し長いキスだったせいかな、二人の吐く息は真っ白で、柄にもなくカッコつけた私の心臓が猛烈な抗議をしているのが分かる。

しかしだ、男には、自分の外見とか度外視してでも、カッコつけなきゃいけないときがあるものなのさ！誰に云ってんだ？

「スンのことを、そんな風に思ったことは無い」

「・・・ホントに？・・・じゃあ、どうして・・・」

結論からいうと、全ては私の思い込みと説明不足。ほんと、ごめんなさい！

私はスンとのことを吊橋効果の結果と思い込み、スンが此方の世界に戻って、これで関係はリセットされると思っていた。そのことで戻ってきたスンが此方の世界で気まずい思い（だって彼氏とかいるかも？）をしないよう、仲間達にも内緒にした。

言訳だが、アリスさんが乱入したために、此処の所が説明不足だったのだ。

しかし、スンからすれば、体を許した男が異世界に来た途端に、自分に丁寧語で話し、“さん”付けで呼び、明らかに距離を取り始めたわけで、自分は都合のいい女でもう捨てられたのだと思い込むのに十分だったため、迷宮を出て以来、ずっと悩んでいたのだ。

ああもう、何というか。結局、もてない男が美人過ぎる彼女を持つてしまい、それが信じられなくて余計なことをあれこれ勝手に考えた結果、ただ純粹に愛してくれた恋人を、むやみに傷つけたと。そういうことらしい。

だれだ！そのドアホオは？・・・俺か？死ねばいいのに！

誤解が解けたところで、えっと・・・誠に遺憾ながら、エッチはできませんでした。

流石に、こんな寒いところでスンを裸にはできないし、この胸部装甲がじゃまなこと！

というわけで、今回は何度もキスをしながら、お尻を触りまくりました。

幸い、腹部からお尻の装甲は皮メインで巻きスカート系。つまり、簡単に手は入る。

うううむ、ズボンの上からだけだね。

でも、何度も堪能した引きしまった腰とお尻の弾力と曲線の、なんと心地よい事よ。

スンはちよつと困った顔をしながら、それでも応じてくれたが、その笑顔の破壊力は凄まじいものがあつた、とだけ云っておこう。

はぁ・・・私はつくづく“二の線”は向かないらしい。

しばらくして、私とスンは、手をつないで馬車に戻った。

アリスさんは不機嫌そうに、チャックさんは目が点に、グスタフさんは笑顔で、ダークさんは左の眉をピクリとさせた。

めっさッ恥ずかしい！

さて、全てのわだかまりが解けて、改めて馬車を走らせる。今度はグスタフさんが御者台に上がった。

アリスさんの話しでは、こちらの世界に戻ってきてから、スンの様子がおかしいことは直ぐにみんなにバレタらしい。チャックさんを除いて。

私が原因であることは確かだが、男女の關係に疎いおっさんとガキはほつといて、アリスさんとグスタフさんが何気に気を回してくれたらしい。

感謝に堪えない。

こうして、私は・・・私たちの旅は、気まずさから解放された・・・
筈だったのだが・・・いや、確かに・・・だが、この気まずさは・・・
・なんだ？

「シュン、寒くないか？もう少しこっちに・・・」

「シュン、このパトの実は、凍らせると美味しんだ」

「シュン、町についたら・・・」

馬車の中で、ベタベタはしてないが、恋人繋ぎした手はそのままに、
甲斐甲斐しく私の世話をするスンを、こめかみに青筋立てた美少女、
生温かい視線のおっさん、キョトンとしてどうして良いのか分から
ずオロオロするガキ、が見守る。

気まずい・・・

13 目的地に着いたようです。

それから暫くして森を抜けた所で、アリスさんが転送魔法を使って馬車ごとクブスリーの町の近くに転移した。

森を抜けた所で、驚いたのは、雪が無い事。迷宮の周辺は魔素の影響で天候さえ不順になり、極端な場合は真夏でも雪が降ることがあるそう。

今は冬だけど、何となく・・・すみません。

少しは走って小高い丘を越えると、遠くにクブスリーの町が見えていた。盆地のような地形に固まるように、大きな建物が幾つも見える。なかなか立派な町のように。

近づいてみると、馬車道は大きな防壁に向かって続いていた。ポツカリと開いた部分が門に成っているらしく、数人の兵隊らしき人が立っていた。

グスタフさんが彼らとの短い遣り取りをして、直ぐに中に入れてもらうことができた。

「あの。税金とか・・・？」

気に成っていたことを口にする。ほんの少しの旅だったが、私はみんなを、数少ない友達だと思っている。だからこそ、お金のことはしっかりしておきたい。

お金は怖いよ？私は友人同士の金の貸し借りは絶対にしない、どうしても貸すときは返ってこないものと考えている。

「ああ、此処では必要ないのだ。国内だからというのものもあるし、私たちが冒険者ということもあるが、クブスリーは自力生産力のない中継拠点だからというのが一番の理由らしい。人の出入りに制限を

すれば、あっという間に廃れてしまうからな」

あれから機嫌のなおったスンが、澄ました顔で説明してくれるが、スンの左手と私の右手は未だにガッチリ恋人繋ぎ。離してくれません。ちよつとでも離そうとすると、途端に悲しそうな顔をするから、どうしようもありません。

表情と言動が合っていないよ？

鬱陶しいか？ぜんぜん！むしろその顔が見たくてときどきやってますけど、なにか？

思い出して頂きたい。私は微Sだ。

「このままギルドに向かいますよ。今回はちよつと荷物が多いですからね」

「そうだな。がはははは！」

「ショウさんのも此処で換金したら？無一文って落ち着かないですよ？」

と云う分けて、幾つもの町並みを超えて、やってきました冒険者ギルド。

レンガ造りの立派な建物だった。町で一番立派なんじゃないだろうか？と思っていたら、なんでも、此処に町があるのはギルドが此処にあるからで、町の名の由来も、ここの初代ギルドマスターの名前をそのまま付けたとのこと。

200年前、人が集まり、町ができると、領主がこのこやってきて他より高い課税をしようとしたところ「んじゃ移転する」の一言で撤回させたという剛の者だったとか。

扉を開けると予想通りの作りであることが分かった。広いロビーに幾つかの椅子。カウンターに座る綺麗なお嬢さん達と、そうでないお嬢さん達。（差別はいけない）

窓口の幾つかでは換金や依頼の授受といった交渉が行われているようだった。

ダークさんを先頭にズンズン進むと、ロビーにいた冒険者たちが噂話をしながら此方を見る。視線は二つ。ダークさんの担いだでつかい袋と、私の手を引っ張るスンだ。

私は恥ずかしさで悶死しそうだ。

ちなみに、私達三人以外は馬車で待機中。

「あら、おかえりなさい。ダークさん。今日は換金ですよね？」

「おう！よろしくたのまあ！・・・あ、それと、こいつの登録も。

換金の方は時間が掛るだろうから、明日の昼にでも引き取りに来るから、それまでに頼む」

「畏まりました」

キューピーン！

その昔、どこかの賢者が云ったそうだ『リアルねこ耳を知らずして、ねこ耳を語るなかれ』と・・・けだし、名言である。

そして今ここに、リアルねこ耳が・・・iiiiiiiiかん！厨二病が再発しそうだ。

私は分別を弁えた大人だから、彼女の耳をガン見することはなかったが、ふとした時にピクリと方向を変えるモフモフの耳は確認した。尻尾は未確認だが・・・

間違いぬあい！

「では、そちらの方？登録の手続きをしますから、此方の用紙に必要事項を記入してください」

「は、はい。・・・あ、でも字が・・・」

「心配ない。私が書こう」

「ありがとう。スン」

スンが用紙を受け取り、適当に記入していく。

何が書かれているのか分からないが、途中でスンに尋ねられたのは年齢だけで「33歳」と普通に答えたら、スンとねこ耳受付嬢に引かれた。

スンは自分と同じか若しくは下だと思っていたらしい。

「あ、はい、シュン・ムラカミ様ですね。それでは最後に、このカードに血を垂らしてください。それで登録は終了です」

スンが前に見せてくれた銀色のカードと同じものを渡された。違いは、何も記入されていないまっさらであること。

ねこ耳のお嬢さんに云われた通り、指先をちよつとだけ斬って血を垂らす。(よかった。まだ血は出る見たい) 血液は、銀色のカードに吸い込まれるように消えていき、代わりに幾つかの文字が浮かび上がった。

このカードは云ってみれば究極の身分証明書になる。良く分からないが、DNA情報でも読み取っているのか？本人以外では情報の表示も不可。当然、偽造もできないそうだ。

さらに、受けた依頼の数、その達成率、その難易度などから、その冒険者のランクを自動記録するらしい。あっちの世界より進んでない？

残念なことに、私には文字も数字も分からない。

「スン。なんて書いてあるの？」

「えっと・・・名前、生年月日、種族、性別、ランク(F)、職種

(無し)、経験年数(0)、

討伐記録^{なし}、賞罰^{なし}こんなところか・・・ん？」

幸い、種族とかに神竜とか、職業に守護者とか自宅警備員とは表示されなかったみたいだ。ちなみに職業とは、剣士とか魔術師とかのことらしい。なんでも、経験を重ねるうちに、最も適正のある職業が表示されるようになるのだとか。

いずれにしても、いきなり変に高レベルとか表示され、悪目立ちするのは、御容赦願いたいところだ。

ほっと一安心、基本は人畜無害な旅行者でお願いします。普通が一番。

流石は神様、良く分かっていらっしゃる。

「シヨウ。体内魔素レベルが『∞』なんだが、これはどう意味なんだろうな？」

「・・・」

神様のあほ
— — — — — or z
— — — — —

13 目的地に着いたようです。(後書き)

いやあ・・・私が書きたいのはエッチと無双なんだが・・・
なかなか、無双まで行かなくて・・・

- ・ 全体を短くして、強引に無双に持っていこうかと・・・でもなあ・・・

14 小金持ちになったようです。

残念ながら至近距離でリアルねこ耳を愛でるより、スンを連れてカウンターを離れることを優先せざるを得ない状況になってしまった。幸いなことに、こちらの世界には『∞』の記号が無く、カードのエラーではないかと云われたが・・・無いなら表示すんなよ！なに？この無駄な高性能？

ことの真偽はさておき、ねこ耳受付嬢に失礼にならない程度にお礼をいってから、素早くカウンターを離れた私たち。怪訝な顔をするスンに「後で」と云い含めて口を封じた。どう説明するかなんて決めてませんがね！

次に向かったのはお宝の買い取りカウンター。

前例のない物なのでいくらになるか？まずは、私の持ち込んだコンビニ鏡（小）。

ロマンスグレーの髪に手入れされた口髭の「鑑定士」のおじさんが唸り始めた。

鏡の表面を覗き込み、裏返し、青いプラスチックを突つつき、改めて、手袋を取り出してもう一度。表面についた指紋を綺麗に布でふき取ると、腕を組んで真っ赤な顔で、また、唸りだした。

「これを・・・どちらで？」

「深奥の迷宮の最下層域で」

嘘は云っていない。私は正直に答えた。深奥の迷宮の最下層域のさらに先の、“私んち”から持ってきたものだから・・・

「あそこで、このような物が・・・うううん」

結局、金貨4枚と銀貨100枚を受け取った。おじさん曰く、間違
いなく金貨10枚前後の価値があるが、正直なところ正確な金額が
分からない、よって妥協案としてギルド主催のオークションに出品
して、その一割をギルドの手数料とし、残額を私に支払う、という
ことになった。

金貨4枚銀貨100枚は、鑑定歴30年の誇りに賭けて“先払い”
だそうだが、それでも、ざっと500万円相当の収入になるから、
私に異論はなかった。

ちなみに、支払いは何処のギルドでもカウンターでギルドカードを
提示すれば、引き出しができるようにしておく、とのことだったが、
小さな革袋に金貨と銀貨を詰めて渡され、私はホクホク顔でギルド
を後にした。

残念なのは「鑑定士」だけに“例の名台詞が！”とちょっと期待し
ただけどなあ・・・
何か似ていたし？無理か？

ギルドの外に出ると、もう町に夕闇が迫っていた。
何処から、酔っ払いが騒ぐ声が聞こえて来るなか、ダークさんが馬
車の前で待っていた。

少し待たせたようなので、断りを入れてから馬車に乗り込むと、ア
リスさんが興味津々でギルドでの成果を聞いたがった。

「じゃあ、今日はシュンの奢りで大宴会ね!？」

奢りますよお、今日のおじさんは、ちょっと違うよお!

と、思ったが今日は疲れているので、明日にしてほしいと断った。
馬車の窓から流れる町並みは、あちらの世界に比べるべくもなく薄
暗いが、それぞれの窓の明かりは何故か、とても暖かそうに感じた。

馬車は通りを少し進んで右手に曲がると、暫く進んで留まった。

「着いたな。『春の風花亭』ここが今日の宿だ。食いもんと、酒がうまい」

ダークさんがそう云って紹介したのは、ギルドと同じレンガ造りの3階建ての建物。

建物自体はギルドより小さいが、小奇麗な白い柱が印象的だ。

玄関前のランプには既に明りが灯っていて、恐らく、向こうの世界でもこんなホテルがあればきっと人気がでるだろうと思わせるものがあつた。

ちよつと重めのドアを押し開けると、そこはホールになっていて、幾つものテーブルと椅子があり、既に何組もの人が料理を囲んで歓談していた。中にはスンのような女性冒険者もいるようだが、男性客に大酒を飲んで騒いでいる者はいないようだった。

「ここは町一番の宿で、女性冒険者御用達の宿でもある」

スンの説明によれば、やはり女性が安心して泊まれる宿は少なく、こう云った宿は貴重なのだそうだ。かといって、女性冒険者にスンやアリスさんのような高ランク冒険者は少ないので、値段も控えめで赤字すれすれ。

それでも経営が成り立つのは、実は女性冒険者保護のためにギルドが経営に参加しているからだとか。

よって“紳士”と認められないような客は、ただちに放り出されて、以後出入り禁止を食らうので、みんなハメを外すようなマネはしないのだ。

入口入って直ぐの所に受付があり、カードを提示して部屋を割り

振る。

ダークさん以下3人は二人部屋に簡易ベッドを持ち込んで1部屋に、スンとアリスさんが二人で1部屋、私は三階の角部屋を一人で使うことになった。

なんせ、“お金持ち”なもんで！

グスタフさんとチャックさんは馬車を預けるため、一旦、宿を出たが、私たちは荷物を抱えてそれぞれの部屋に向かう。この後、すぐに、食事だ。

ところでダークさん、あなたの荷物はその紙袋だけですか？

確かに食事はうまかった。食材が何なのか分からないのが不安だが、食事にラーメンが出てくるかもと心配していたが、流石にそれはなく、普通の食事をみんなと一緒に食べた。酒も出たが、酒量は兎も角、悪い飲み方をする者はなく、迷宮探査の成功？と新しい出会いに6人で乾杯した。

ちなみに、チャックさん！酒は二十歳を過ぎてから！

食事が終わり、今後の予定について話し合ったが、時間的に、やはり王都はムリ、ということで、クブスリーの町でのんびり過ごすことにした。

さっそく、その場で、全員分の二日分の宿代を支払って、ささやかな宴は終了となった。

もちろん、ダークさんとグスタフさんはもう少し飲んでからということだったが、こちらの世界では夜の楽しみといったら、飲むか、打つか、買うか、しかない。

チャックさんがどうするのか、については聞かないでおこうと思う。

さて、私は当然、だれからも誘われなかったので、一人で部屋に戻った。

私の部屋は、一番良い部屋の一つらしい。濃いグレーのカーペットがシックだが、流石に明かりは洒落たランプが三つだけで薄暗い。しかし、部屋の中にあるソファ―セットにはお酒が用意されていて、チーズのような摘みまであった。

ベッドはキングサイズのふかふかで満足できるものだったし、続きの間か？と思ったら、全く期待していなかったお風呂であった。これが贅沢というものか？

まあ、魔道具式らしいので、使い方がわからんが。

荷物を整理して・・・といってもリュックだけなので、空のクロ―ゼットに放り込むだけで片づいてしまった。

やることも無くなって、手持無沙汰にお酒を少し飲んでいたら、ノックの音。

「シュン。起きてる？入ってもいい？」

15 太陽が黄色いようです。

私の携帯電話の時計は、現在1月1日午後9時15分。

実は、お正月の夜なのだが、いろいろあって忘れていた。まあ、此方とあちらの時間軸が異なるだろうことは覚悟していたので、私的にはお正月でも、此方でありふれた日常の一日に過ぎない。

しかあゝし！私は拘りたい。断固として！此方の世界ではお正月らしいことが、何一つ出来ないことは分かったが、唯一つ、たった一つだけ、出来ることがある。

はい、そのあなた（だれ？）正解ですよ！

そう！それは、我が国古来より連綿と続き、決して一人ではできない神聖かつ欠くべからざるところの“姫始め”という伝統儀式だあああ！

はあはあ・・・

そのために夕食の宴会を早めに済ませるよう根回（日本人ですから？）し、食後の別れ際に、スンに視線でサインを送り、荷物を片付け、ベッドにも入らずに彼女を待ち侘びていたわけば・・・じゃなくて“よ”お客さん。（だからだれ？）

と云う分けて、スンが部屋にやって来た時、私は直ぐにスンをベッドに押し倒した。

その時、彼女が私のプレゼントした夏用パジャマを着ていたこととか、枕を抱えていた姿に異常に萌えたとか、ノックの後の声が既に女の子言葉だったとか、私の頭はいろいろすごい事になってしまっていた。

所謂、野獣状態。

とつてもお高い部屋で、ちよつと余裕を持つて彼女を迎え入れ、お酒を少し飲んで、摘みを口にし、楽しい会話で盛り上げて・・・知るかあああ！

スンは可愛い、すごい美人で、すごく健気で、なにより、私なんかを好きだと云ってくれる最高の彼女なんだ。

一気に押し倒す以外に何をするって？バカ！バカ！

・・・・・・都合により一部削除・・・・・・

それでも忌々しいことに朝はやってくる。

私は神竜の体を持つために、体力が異常に増強されているらしい。その私にスンを付き合わせるのは無謀かもしれない。ついさっきまで嬌声を上げていたスンは、キングサイズのベッドの上で、うつ伏せの状態のまま力尽きたように眠っている。

風邪を引かないよう、美しい裸体をシートで包みながら、男の悲しい性だろうか、スンが満足してくれたか？喜んでくれているか？とても気になった。

これが、賢者モードというやつか？

それから、昨晚、自分がやらかした何から何までもが、恥ずかしくなってきた。

夜が早い分、異世界の朝は早い。まだ薄暗いのに、窓の隙間から見える町の通りには既に人の姿があった。

私は、外が明るくなり始めるとスンが部屋に戻りづらくなることを思い出して、断腸の思いでスンを起こすことにした。また、「あと、5年」とか云いださなければ良いが・・・

「スン、起きて。朝だよ。早く自分の部屋に戻らないと、まずいんじゃない？」

「ん、ん〜ん・・・おはようシュン」

薄く眼を開けて気だるげにスンが朝の挨拶をする。

駄目だから・・・そういうの。可愛すぎる。しかし、ぐっと我慢する。

そして、スンがシーツを巻き付けたままベッドに起き上がり、目を擦りながら此方を向く。

空気を入れ替えようと少しだけ開けておいた部屋の窓から、ちょうど朝日が差し込んできてスンの顔を照らす・・・て、えッ？

しまったあああああ！

私は慌ててスンをベッドから抱き上げると、小さな悲鳴を上げるスンを無視して、ベッドの脇に立たせる。そして、巻き付けていたシートも剥ぎとると、スンが明るくなった部屋で恥ずかしがるのも無視して“気を付け”の姿勢を取らせた。顔が真っ赤。

それから、近くによったり、離れてみたり、後ろから、前から、何度も確認した。

スンはその間、恥ずかしそうにしていたが、だが、私の様子がおかしいことに気が付いて、怪訝な表情を見せた。

若返っている！

もう、“お肌スベスベの強力版”では済まされない。

もともとスンは若々しくて、綺麗だし、可愛いが、それでも年齢に見合った美しさであり、成長が止まったような美しさではなかった。そういう人は最初から『永遠の美少女』とか表現するべきだろう。

そして、その場合、その人が実際に歳をとると、大概、何処かに不自然な違和感を生むものなのだ。

だが、今のスンはどう見ても、青春真っ盛りの10代に“しか”見えない。

やってしまった・・・

すっかり、自分の能力を忘れていた。でも、今回も、コンちゃんは使用したのに。

あああああ！・・・この場合、避妊だけじゃ駄目なんじゃ？

もしか・・・しなくても・・・“あれ”が原因だな。

15 太陽が黄色いようです。(後書き)

エッチが止まらない

エッチ過ぎたみたいです (11/21)

16 屁理屈全開のようです。

朝日が完全に顔を出すころ、私はスンに直ぐ部屋に戻って着替えてから、もう一度私の部屋にくるように云った。

スンには、私のリュックサックから鏡（大）を取り出して、自分の状況を理解してもらった。まあ、暫くは、鏡を見つめ頬に手を当ててニコニコしていたが・・・女の子だねえ・・・

暫くして、遅いなあと思った頃、ノックの音がしてスンが戻って来た。

ただし、アリスさんを連れて。

こっそり部屋に戻ったが、その時は既にアリスさんが起きていて、予想通り、一発で若返りに気が付かれ、強引に同行を求められたそうだ。

「何をしたのよ？ シュンさん」

「いえ・・・あの・・・ナニをしただけです・・・けど」

私の言葉にビシッという擬音つきで、アリスさんの表情がきつくなる。実際のところ、少し激しかったかもしれないが、ナニをしたただけで・・・はい！すみません。

私達は正座させられ・・・床はカーペットを敷いただけで・・・あれ？ デジャブ？

だが、本当のことは云えない。神様との約束があるから。だから、スンが部屋に戻っている間に、考えを整理して辻褄の合う言訳を考えた。

実は私、こういうの得意なんです。昔そういう仕事してたから。簡単に云えば、起きてしまった現実には整合性の付く原因と理由を後

付けし、今後について納得のいく方向性を示す。決して真実ではないが、かといって嘘でもない。

そして、嘘と証明することは誰にもできない。で、後は、ひたすら謝り倒す。

大人ってきたないよねえ・・・

と云う分けて、私の屁理屈は次のようになった。

まったく理由は分からない。しかし、推測に過ぎないが、私が異世界人であることに大きな原因があるのではないか？私のいた世界と此方の世界の人間は、全く同じに見えるが、そもそも、向こう側の世界には、魔法やその素になる魔素は存在しない。

もし、存在すれば、向こう側の科学技術で検出されないはずはない。確かに、歴史的には魔女が居たとされるが、それは当時の宗教的な云いがかりに過ぎないことが確認されている。考えられるのは、私がこの世界に入り込んだ時に、魔素を体内に取り込んでしまったのではないか？ということ。

その結果、もともと空っぽだった私の体が大量の魔素を吸収、蓄積したうえ“体液の交換”によって、魔素がスンの体に入り込み、更に活性化された結果、若がえりが起きた。

というものだった。

へえええ・・・そうなんだああ・・・

まあ、どれもこれも推測とこじつけで、要するに、異世界人の不思議パワーということになるのだが、真偽の程は、少なくとも今は確認できないので良しとしよう。

それから、私のギルドカードの体内魔素レベル『∞』が、彼女達には意味が分からなくても、見たこともない記号であることから、この出鱈目に信憑性を与えた。

「スン。あなたはどうかの？体に異常はない？」

「いや？むしろ以前より体が軽くなったような気はするが、これといって異常はないな」

「悪いけど、そのベッドに・・・いえ、ソファーに横になって頂戴。私は治療師じゃないけど、少しでも調べさせてほしいの。見る限り、大丈夫だとは思うけど」

「ああ、構わない。やってくれ」

言訳を考えるのに必死だった私は、汗と体液とで汚れたベッドを整えることを忘れていたので、仕方なくスンはソファーの長椅子に横になった。（そこでもしましたが・・・）
ちなみに、今のスンはちゃんと服を着ているが、装甲は付けていない。

アリスは、暫くの間、スンの体に手をかざして目を閉じていたが、やがて眼を開けると呟いた。

「異常なし・・・ね。体内魔素にも生命力にも異常なしよ。むしろが強くなっているみたいね。驚いたわ・・・魔法を使って若返ることとはできないことではないけど、その場合、急激な体内魔素の減少で衰弱するか、最悪、死んでしまうことだってあるのに・・・」

「へえ、魔法で若返ることってできるんですかぁ・・・」

「何度も云わせないで！出来ることはできるけど、其れをすれば殆ど死ぬか寝たきりの状態になるのよ」

「でも、スンには問題ない・・・？」

そこが一番重要だ。

まあ、神様によると私の血肉は若返りの霊薬になるらしいから、害があるとは思えないが、恋人の体を心配するのは、ある意味、私にとって、権利であり、義務でもある。

まして、スンを今更失うことは私には耐えられないことだ。
もちろん、スンに問題は無い、とうことだった。

「じゃ、次。シュンさん、あなたの番よ」

「へ？」

「異世界人にそんな能力があったとして、急激に吸収された魔素が、あなたの中でどうなっているのか気にならない？そもそも、体外魔素は魔術師がその体内魔素でコントロールすることで、大きな力を得るものなのよ？それを、一時的に体内に吸収するだけならともかく、完全に蓄積して活性化させるなんて、普通ありえないことなの」

と云う分けで、アリスさんに体を調べられました。

結論から云えば『解らない』だった。治療師が使用する診断魔法が、私の体内に吸い込まれて反応しなくなるそうさ。

うううん、私の体にはレーザー波吸収塗料（魔法版）でも塗ってあるのだろうか？

スンは少しだけ心配そうな顔をしたが、兎に角、私は気にしない。
大丈夫なのは知っているから。

「さてと・・・じゃあ、私、他のみんなを呼んでくるわ」

まあ、ここにきてメンバーに隠すのは不可能だし、私が異世界人であるという秘密を守るためにも、メンバーには事情を説明しておく必要があるだろう。

そして、宿のロビー辺りで初めて顔を合わせて驚かせるよりは、今のうちに私の部屋で驚いてもらおう、ということになった。

結果、思ったほどの混乱は起きなかった。

ダークさんは“どっか変わったのか？”で終わったし、グスタフさんは“なるほど”だったし・・・唯一、変わった反応を示したのは

チャックさんだろうか、もつとも、“驚く”という反応ではなかったが・・・チャックさんは、スンを見るなり、ソバカスの散った顔を赤らめて、明らかにモジモジした。

おじさんには分かるぞ、少年！

昨日までの“姐さん”が、どう見ても自分と同じ年か、ちょっと下位の美少女に大変身したのだからな。今のスンは君ぐらいの男子が、一番意識する年齢の女の子だものな！

だが、云っておく。

あげないよ？

ていうか、ちよっかい出したら殺すよ？

決して負けられない戦いがここにある！！！！

16 屁理屈全開のようです。(後書き)

なんか、読んでくれる人が急に増えました。
ありがとうございます。

17 昔話をするようです。

スンと男子諸君との顔合わせが済み、幾つかの打ち合わせを行った後、メンバー公認（肉体関係含む）の仲となった私たちは、スンが私の部屋に引っ越すことになった。

何処となくうれしそうに荷物を運ぶスンを見て、何とも云えないうれしさが込み上げたのは、昔、同棲していた彼女が、私の暮していたアパートに初めてやって来たときと同じ感覚だったかもしれない。あの頃は、若かったなあ・・・

私はソファアに座ってぼんやりスンを眺めていたのだが、そもそも、スンの荷物といっても大したものはない。大きな荷物の中身は着替えの服と、私には良く分からない細々とした品々。女性だからね。一番の大物はやはり、甲冑と長剣だった。

スンは剣士としてはBランクにあって、女性としてはかなり珍しい部類らしい。

もうすぐAランクに上がるらしいが、殆どの女性冒険者は魔術師か斥候のような体力と云うよりは技術職が多く、殆どが最終的にBランクになるかどうかで引退するらしい。体力的には仕方がないのだとか。

しかし、類まれな才能のあったスンはもうすぐAランクに昇格する。

「私は剣を握ったのが随分遅くてな。それから、幾人かの良い師匠に出会えたお陰で此処まで強くなることができた。それに、今のメンバーにも感謝している。今のメンバーとはもう3年になるが、冒険者として独り立ちできるまでになったのは、間違いなくみんなのお陰だと思っている」

人の強さと、ギルドランクの高さとは必ずしも一致しない。

実際、王宮騎士団の団長クラスになれば、ギルドに所属していなくてもAクラスか、或いはそれ以上の実力を持っていると云われている。しかし、その強さは冒険者としてのそれではなく、職業柄、対人戦闘に特化している。

無論、王命による魔獣討伐もあるから、魔獣に対して無力という分けてはないが、経験の差はどうしようもない。

結局、それ程の強さがあっても冒険者として大成するかどうかとは別物なのだ。

「私は運が良かった。なにせ、『鉄壁のダーク』に『鷹の目グスタフ』の二人に出会えたのだからな」

なんででしょうか？その厨二病的なお名前は？

ちょっとだけ、聞いてはいましたが、グスタフさんにも二つ名があったんですね？

ダークさんはある魔獣討伐において、超重量級の一撃を例の大盾をもって受け止めて見せたことから付けられ、グスタフさんは広範囲に毒霧を振り撒くことで、だれも近寄れなかった魔獣を、超遠距離射撃で仕留めたことで名付けられたらしい。

「二人ともとうの昔にAクラス入りしている。多分、Sクラスも夢ではない」

Sクラス。

世に多くの冒険者があれど、Aクラスになれるのは1000人に一人と云われ、そのAクラスの1000人に一人がSクラスに至る。冒険者にとっての遥かな頂き。

そして誰もが一度は挑み、そして諦める至高の存在。

だからこそ、現役のSクラス冒険者は大陸に7人だけ。

「その人たちって、何してSクラスになったの？」

「何でも、神魔獣を倒したパーティーのリーダーだったらしい」

「ゲロゲロ」

「？」

スンやみんなは、そんなことしないうけど、私が神魔獣（守護者）だってばれたら超やばくない？

「いや、何でもない。じゃあ、もしかしてみんなが『深奥の迷宮』に潜ったのって、神魔獣を倒すことが目的だった・・・とか？」

「まあ・・・しかし、ダークが望んでいる分けではないし、迷宮探索で無理はできない。パーティーとしてはAクラス二人に、実力的にはAクラスのアリスと、Bクラスの私に、Cクラスのチャック。十分勝算が望めるメンバーではあるが・・・後は運だな」

云われてみれば、確かに豪華なメンバーだ。

「もっとも、今まで一度も討伐されたことのない『深奥の守護者』に勝てるかどうかは、流石に分からないから、今回は、まあ、様子見だな」

・・・いえ、多分、楽勝かと・・・

ていうか、『深奥の守護者』ってなに？ また、ややこしい名前付けちゃって。

それって私の前任者のことだよな？ 私じゃないよね？

違うと云って！

「どうしてスンは剣を握るのが遅かったの？」

「・・・私は、・・・私は、ある王家に剣を持って仕える一族の出

だ。本来は直ぐにでも剣術を仕込まれる筈だった。しかし、お爺様が亡くなり、父が家を継ぐようになると、父は家名に胡坐をかいて権勢に走った。私はそのための道具だから剣を学ぶ必要はない。実際、直ぐに婚約者をあてがわれたからな」

私は、慌てて、辛いなら話さなくても良いと云ったが、スンは話したいといった。

「私には父を非難することはできません。その当時16歳だった私は、それが当然だと思っていたし、婚約者の男は家柄も見ても良かったし・・・私は・・・その男に身も心も捧げたのだ」

スンは目を閉じて、折り畳む途中の服を握り締めていた。

「だが、父に政治の才能など無かったのだ。すぐに罠に嵌められ失脚。家は没落して父は母と共に命を絶った。私は何も知らず、婚約者に囲われて過ごしていたが、父が失脚すると直ぐに殺されかけた。と云うより、その男も父を罠に嵌めた一派だった訳だが」

それからなんとか逃げ出した所を、家に仕えていた家臣が国外に逃がしてくれ、各地を放浪しつつ、剣を学んだのだそうだ。ただし、ただの冒険者として、あくまで生き延びる糧として。

私は、付きあった女性の過去を尋ねたことがない。

過去は変えられないし、過去も含めて今のその人を作っていると思うからだ。今のその人を愛しているのなら、聞く必要のないことだと思う。

だが、勿論、聞いて欲しいと云われて、聞きたくないと耳を塞ぐこともない。

スンにとっては、話すことが必要だったのだろう。
一つのけじめ・・・

「シュン。私は・・・私の初めてをシュンに捧げられなくて、すまないと思う」

私は黙って、泣きべそをかいているスンを抱きしめた。

18 町を散策するようです。

暫くして、私はスンを町に連れ出した。若返りがどうか、私の素性がどうか、どうでも良かった。宿のカウンターで一番の服屋を尋ねてから、手を繋いだまま宿を飛び出すと、一目散に服屋に飛び込み“この子に似合うとびきりの服を”と注文した。

服屋のおかみさんは、ちょっと驚いた顔をしたが、直ぐに可愛い服や靴、小物まで、店じゅうを引っかき回し、更に、私の趣味のデザインを幾つか出してくれた。

私に服のセンスを求めてはいけない。

私に任せるとこうなる。

時間は掛ったが、白いフード付きのハーフコートに、紺のセーター、赤いチェックのミニスカート、白のニーハイ、茶色の編み上げハーフブーツ。

ん？JK？知らんがな。

スンは足を出すのをとても恥ずかしがっていたが、出来上がった姿を店のおかみさんに見てもらいOKを貰った。

少し、奇抜ではあるものの「若いんだから冒險しなくちゃ！」と云われたスンは、何か言いたげだったが、ここは“無視”が正解。

銀貨20枚？を支払い、店を出ると、スンは私の陰に隠れるように寄り添った。

その頃になると、もう昼が近く、公園近くまで来た私たちは、目に付いたレストランらしき店に入り、食事を頼んだ。

偶然とび込んだにしては、なかなか良いレストランだったようだ。清潔なテーブルクロスに薄いピンク色の花（恐らく造花）が活けられていて、ウェイターの態度も悪くない。

食事の間中、私はスンの着る服が、あちら側でどんな女の子がきるのか？他のファッションにはどんなものがあるのか？とか、詳しくもないのに、兎に角、話し続けた。

デートで嫌われるパターンだということは、重々承知の上で。

不思議と、周りの視線は気にならなかった。

食事の後は、手を繋いでぶらぶらと町を歩いた。

相変わらずスンは私の陰に隠れようとするが、武器屋と鍛冶屋には自ら入ろうとするので困った。ちなみに、スンの服装で長剣を腰に差すのは余りに味気ないので、私の右腰に提げ、スンが右手で何時でも抜けるようにした。

左腰には私がスンから借りたショートソードが差してある。コートで隠れて殆ど分からないと思うけど。

「足がスースーして落ち着かないのだ」

スンはずっとそんなことを云って、しきりにスカートの裾を下に引っ張るのが、ミニスカートよりハーフコートの方が、少しだけ丈が長い。

結果、絶対領域はコートに隠れてしまうのだが・・・私の良心が咎めたが、ここは我慢して貰おう。

それに、スンの表情が随分明るくなったような気がしたので、私は満足してる。

いつの間にか町を一周したらしく、公園に戻ってきていた。

私は、公園のベンチに腰掛け、スンを横に座らせてから、剣を鞘ごと抱きかかえ、スンが抵抗する暇も与えず、ゴロンと横になった。男のロマン初級編であるところの膝枕である。

まあ、膝枕の場合ニーハイが邪魔なのだが、足の長いスンなら十分

生足を堪能できる。

「シュ、シュン！」

スンは驚いたように私の頭を抑えるが、この体制になってしまえばどうにもできまい。

スンは周りを見渡して赤面しているが、当然、無視。

ということ、後頭部で生足を堪能しながら上を見上げると、セーターの巨大な膨らみの向こうで、スンが困った顔をしている。微S万歳！

スンが諦めたように、私の頬や耳をいたずらし始めた頃に、唐突に横向きになり、今度は頬で生足を堪能する。

無論、私のお顔はスンのお腹の方を向いている。そのままグイグイとお腹の方に近づいて行くようにしながら頬でスリスリ。

「シュン、あのな、シュン・・・」

何故か必死に私の頭を遠ざけようと、両手で押さえるスンが、今までになく、困った声で話しかけて来るので、ちよっと見上げてみると、スンが私に屈みこんでくるようにして口元を耳に寄せた。

ムグ！胸で顔が・・・幸せ。

「シュン、忘れていないか？私は、その・・・穿いていないのだが・・・」

「あ」

此方の世界には常に下着を付けるという習慣がないそうだ。

無論、下穿き自体は存在するが、それは所謂、女の子の日に身に着けるものだとか。

考えてみれば、ヨーロッパでも下着文化は中世後半から漸く定着し

始め、日本では、近代でも下着文化は大幅に遅れていたそうだが、デパート火災かなにかで、それが原因で多くの女性が亡くなってから、爆発的に広がったのではなかったか？

いずれにしても、私は微SどころかドSの羞恥プレイをスンに強要していたことになる。

だが・・・やってしまったものは仕方がない。

それに、今、とても気持ちがいいし・・・当初の目的、スンを“元気づける”を忘れた私は更に暴走することにした。
うむ！確信犯である！

「まっいっか！」

と、そのままの姿勢でスンに云った。

・・・自主規制・・・

そして、夕食まで部屋に籠った。

何をしていたかは、想像に任せる。

それより、スンに下着をプレゼントしなければ・・・今日は特別としても、女性は下半身を冷やしてはいけないらしい。

向こうで買ってくるか？30過ぎのおっさんが女性用の下着を？
むりむりむりむりむり・・・絶対むり！

いっそ、スンを向こうに連れて行って・・・あ、今のスンは・・・
駄目だ・・・
フツ・・・確実に捕まるな。

19 見られていたようです。

私達の宿屋「春の風花亭」では、スンの若返りが評判に……は成らなかった。

冷静に考えてみれば、昨夜のスンと今のスンを同一人物と見るよりは、身内、具体的には良く似た姉妹の方が納得しやすい。

まして、私がスンを連れ出した時を除いて、戻って来た時は完全に少女の装いであったため、口を開かなければ同一人物と見られる恐れは殆どなかったのだ。

「打ち合わせと随分違うようですが、それにしても、無茶をしましたね」

笑顔でそう云ったのは夕食の時のグスタフさんだった。

グスタフさんによると、スンの若返りを誤魔化すことはできたし、気付かれる恐れの高い宿のスタッフも姉妹と誤認しているが、昼間の行動は、逆に、街中で非常に目立っていたらしい。覚悟はしていたが……

黒髪黒目で黒のロングコートをまとった風采の上がない小男が、超絶美少女と手を繋いで町を練り歩いた訳だから……て、あれ？なんで知ってるの？

「お忘れですか？ 私たちはあなたの護衛なんですよ？」

そうでした。

と云うことは……

「公衆の面前で随分大胆なことをなさるのですね？ あれが異世界流ですか？」

「・・・だ、だから止めてくれと、何度も云ったのだ」

「あらそう？それにしては随分と楽しそうだったじゃない？服なんか買ってもらって」

こう云う場合、ダークさんは首を傾げ“何の話しだ？”状態で、チャックさんはモジモジして会話に入ってこられない。

夕食も二人で食べたかったが、宿賃に夕食代が含まれるし、時間帯が同じなので結局みんなと顔を合わせることになる。その結果が現状。

ちなみに、スンは着替えた。流石にノーパンと分かっているあのミニは無いわあああ！

外側は兎も角「お宝」は、私にだけ見せてくれればよいのです！

「ま、良いわ。スンを大事にしてくれるなら」

「そこは同意できますね。問題はこれからですが、さて・・・」

「いっそのこと、暫く町を離れるのも手よね？」

「ええ。今日一日だけとはいえ、それでも二人に注目していた連中もいましたからね」

「それは私も気が付いていた。嫌な視線だったが、近づいてこなかったからね」

「覗きではないみたいでしたが・・・寧ろ、その方が安心なんですよがね」

私は全く気が付かなかったが、そうだったらしい。

グスタフさんによれば、此方の世界では美しい娘の誘拐は珍しくなく、行先はお決まりの奴隷商人。

クブスリーの町では奴隷を“禁止”はしていないが、奴隷の“持ち込み”を禁止しているため、今日、町で私が目にすることは無かった。

そもそも、王国が禁止していない中で、遠まわしな方法とはいえ奴

隷の禁止を実施しているこの町のギルドは大したものなのだ。

奴隷が発見された場合は、罰としてギルドが“没収”するらしいが、あくまで“奴隷だから”ではなく“奴隷を持ち込んだから”である所がミソで、奴隷本人は罰せられない。

また、禁止はしていないから、飼い主無しの拾得物扱いで、ギルドの保護下で、一定期間、労働に従事して解呪の費用を捻出すれば解放される。

奴隷商に対しては、確たる証拠がなければ「それは俺のじゃない」と云われたら罰金もとれないが、奴隷だけは取り上げることができるとし、その証言を契約書（誓約書）とすることで、解呪の儀式がスムーズに行える。茶番だな。

兎も角、奴隷商を“奴隷商であるから”罰すれば、王国の法と齟齬を生じ、敵も作る。とくに奴隷商は嫌われ者でありながら、金だけは持っていて裏にも顔が利く。

つまりは、そういうことのようにだ。

「昨日までのスンと今のスンが、別人だと認識されているのは良い事なのですが、その所為で、余計な者に目を付けられたようです。風の旅団所属のBクラスのスンなら、あんなゴロツキは近寄ってこないのですが・・・」

「蹴散らすまで。この体はシュンだけのものだ。シュン以外には誰にも触れさせん！」

「はいはい、御馳走様」

豊満な胸を突き出し、凛々しく、男らしく宣言したスンだったが、アリスさんの言葉で思いつき惚気たことに気が付いて真っ赤になった。

が、スンさん。それは私が云うべき内容のセリフでは？

どちらにしても、これからはスンの身の回りに気を付けなければならない。

弱い異世界人の私がどうするのか？

あらあら・・・

私は確かに強くないし、寧ろ、弱い人間だろう。喧嘩も殆どしたことがない。

だけど、相手が倒すべき敵であるなら、そう認識したなら、私はどんな卑怯な手を使おうと、相手を潰すだろう。いや、寧ろ進んで使おうだろう。

ほら、よく云うでしょ？おとなしい人ほど、キレると怖いって。

私は今までそこまでキレた事が無いのだが、多分、キレたら何でもやるだろう。

その場合、例えば、私自身は、土下座して小便を漏らし、涙を流しながら許しを請い、殺す価値もないと思わせるほど情けない姿を見せておいて、後ろから確実に猛毒を塗った武器で刺すとか？

・・・とにかく、思いつきり、”冷静にキレる”だろうな。それは断言できる。

正々堂々？何その可愛い生き物？

私の思考がちよっとだけ暗黒面に落ちていた。

だが、構わない。スンに危害を加える輩は、みんな、始末してしまえばいい。

取り敢えず、一人。スンを殺そうとした前の婚約者。

10年以上前のことだし、こちらから出向くつもりはないが、今後、余計な手出しをしてきたら容赦はしない。

・・・ピストルって何処で売ってるんだろう？

「どうしたの？シユン。そんな怖い顔で・・・笑って？」

「は？・・・いえ、何でもありませんよ？」

私は怖い顔でクスクスと笑っていたらしい。

チャックさんが引いている。

まあ、なんだ。この世界にはあちら程の厳格な法はない。というか、私に云わせれば無法状態なのだが、今はそれがありがたい。

そうか・・・私は、倫理ではなく、法に縛られていたと、そういうことなのか。

私のせいで妙な雰囲気になってしまった。

食後のコーヒー（らしきもの）をウエイトレスが運んできたところで、”それ”を受け取りながら、おもむろにダークさんが云った。

「こう云う時は、これが一番だ！」

陶器製のカップにはチキンラーメンが入っていた。

20 「非常事態は突然に」のようです。

今日は、私が異世界にやってきて三日目、の朝。

初日1月1日は、殆ど旅路。但し、スンとのうれしいはずかし”姫始め”をやり。

二日目1月2日は、スンを連れて町を散策しながら”羞恥プレイ”をやった。

うむ！基本、エッチな事しかしてない！

が、敢えて云おう！「満足である！」と。

今日も肌寒いが、風はなく、天気は良い。

宿の前にパーティーの馬車が停めてあり、チャックさんがこの町で買い込んだ食料などの荷物を積み込んでいく。

朝の挨拶をしてから私も自分の荷物を馬車に積み込み、他のメンバーを待つことにした。

グスタフさんは、武器屋に頼んでいた矢の受け取りに、ダークさんは昨日、魔獣から得た財宝の換金報酬を受け取った後、個人依頼を受けたことを報告し忘れたため、改めて、届け出に赴いている。

女性陣については、いわずもがな。

スンは昨夜から私が帰ることに愚図っている。

しかし、私は部屋を殆どそのままにして出てきている。正月三日日だから、私が居なかったとしても、ご近所は誰も気にはしないが、流石に一度帰った方が良さだろう。

直ぐに来るから、といっても納得せず、むこうに恋人でもいるのではないかと勘繰ったスンは「前にも云ったけど、私はシュンを縛ったりしないよ？私は妾でいいの。その代わり・・・お願い・・・」と、その夜は、基本受身のスンが・・・ゲフンゲフン。

だめだめ・・・朝からエロに走るところだった。

思い出せ！私は「大人」だ。やりたい盛りの学生ではない・・・て、今更か？

兎に角、何とかスンを宥め、今朝の出発となった分けだが、何時でも向こうと行き来できるようにと、アリスさんから転移魔法とその練習方法だけでも教えて貰うことを約束させられた。

アリスさんによれば、転移魔法にも幾つかあり、魔法陣を使用して術者一人だけの転移は初級レベルで誰でもできるとのこと。難しいのは荷物や人数が増えた場合で、これは中級とは言えないが、かなりの魔力を消費するので使える者が限られる。

後は、距離。遠くへ転移しようとすればするほど、魔力を消費する。もつとも難しいのは魔法陣なしで転移することで、これは中級魔法に属し、単独の転移でもかなりの魔力を消費するため、敢えて使用する者はいないとか。

方法そのものは簡単で、魔法陣を思い浮かべて、そのイメージに体内魔力を流す。次に目的地をイメージして呪文を唱えるだけ。

この時、魔法陣の内部にあるものは目的に転移するのだが、魔法陣自体の大きさは大して問題にならないらしい。

まあ、私の場合は、魔力そのものが感知できていないので、要練習といったところ。

ちなみに、呪文は「彼の地に運べ。雷鳴の如く、風の如く。ムーブ」だった。

守護者なのにな？

車はね。エンジンと燃料タンクだけでは走れないの。

今の私は、膨大な燃料タンクと使い方の分からない大排気量エンジンを、別々に持っているだけで繋がってもいない。

スンは単独での転移魔法は使えるらしいが、パーティーとしての依

頼が数日後に受けてあり、私と一緒にあちらの世界に行くことはできないらしい。

まあ、私が役立たずでなければ彼らに付いて行くこともできるのだが、それはムリ。

この町で護衛を雇ってスン達が戻ってくるのを待つのも、費用的には可能だが、下手に他者と接触すれば、異世界人であることがバレる恐れがあるので、やっぱりムリ。

結局、当初の予定どおりに私は帰ることになった分けだが、例の部屋を常時開けておくことは約束させられた。（暖房費がバカにならないのですが・・・）

これについては、話を聞いたダークさんも強く推奨していた。魂胆が見え見えですよ、ダークさん！？

そうこうしている間にダークさんと、グスタフさんが戻って来た。が、少し、浮かない顔をしている。

「パドとか云う村が、魔獣に襲われて消滅したらしいな」

「ええ。私も聞きました。『狂騒』ではないかと。しかし、その村の方々には申し訳ありませんが、パド村がセニエ領なら、一般人にこれ以上の被害はないでしょう」

ダークさんはギルドで、グスタフさんは武器屋で、それぞれ同じ情報を得ていた。

パド村はクブスリーの町から、中継地を二つ隔てたセニエ領の北にある村らしい。

セニエ領はロイド・フォン・セニエ侯爵の納める領地で、領内に『火炎の迷宮』を抱えている。その迷宮が狂騒を起こしたのではないか？というのが専らの噂。

しかし、セニエ侯爵は賢明にも独自に騎士を城下町に集めており、

避難民の収容が既に始まっているらしいとのことだった。

「ギルドの待機命令はまだ出ていないのですね？」

「ああ、実際、狂騒が起きたとしても、セニエ領なら単独で撃退できるだろうし、それに、あそこの騎士団はつええって噂だったしな」
「確か、高位の冒険者と単独契約もしていましたね」

セニエ侯爵は、狂騒に備えて十分な備えをしていたらしい。

どっかの国の政治家のみなさんにも見習ってほしいものだ。元気の良い“やり手”と噂される若手の議員さんが「数百年に一度の洪水に備えるために、こんな堤防を作る必要なんてあるんですか？」なんて質問していたが・・・

私が気に入らないのは『質問』であることだ。今度どんな事が起きようと「質問しただけで不要とは云ってない」って答えようとしているのが見え見え。自分は責任とらないことを前提に質問しているのだから呆れる。

それに比べれば・・・

《カカーン！カン・・・カカーン！カン・・・》

突然、ギルドの建物のある方から、特徴的な金の音が聞こえてくる。道端を歩いていたおじさんやお使い途中の少年が立ち止まり、不安そうな顔で振り返っている。

すぐに、宿の中からスンとアリスさんが飛び出してきて、同じようにギルドの方を眺める。

「悪いな、シュン。あれはギルドの“非常招集”ってやつだ。思ったより、やべえことになっちまってるらしい・・・」

何の事だか良く分からなかったが、かなり“拙い”事態になっている事だけは分かったので、私もみんなに付いてギルド前に同行した。ギルドの中に入りきれないからか、建物前に木箱が置かれ、その上に壮年の男が立っていた。

「よう、ギルドマスター！セニエだろ・・・『火炎の迷宮』の狂騒か？いくらだ？」

「救援要請の依頼か？いいぜ、俺達がいきやあ、楽勝だぜ！？」

群衆の中から幾人かの冒険者が、勇ましく景気のよい声を上げた。

「ああ、狂騒だ。セニエ領の『火炎の迷宮』・・・そして『業火の迷宮』二つ同時にだ。セニエの城塞都市が魔獣に包囲されたらしい」

21 練習が必要のようです。

ギルドマスターからの情報は、多くの冒険者の心を戦慄させたようだった。

さっきまで、威勢の良かった者たちも口を噤んだ。『業火の迷宮』はオーランド伯爵領にある迷宮で、地理的にはオーランド領の町より、セニエの城塞都市の方が距離的に近い。

二つの迷宮の同時狂騒。歴史的に無かった重大事件が、よりによって私がこの世界にいるときに起きた。

私達は一泊に帰ることになった。もう、風の旅団は私を護衛して「深奥の迷宮」に戻ることはできなくなったのだ。

ギルドマスターの依頼は「明後日正午までに各冒険者は装備を整えてギルド前に集合し、その場で部隊を編成して、随時、全面解放されたセニエ城塞都市の転移拠点に転移する」というものだった。

幸い、セニエの城壁自体は持ち堪えているが、飛行タイプの魔獣に侵入を許している状況で、被害は時間と共に増加しているらしい。

「そういう分けて、シュンさんには此处で待っていてほしいのです」

グスタフさんが申し訳なさそうに云った。

冒険者は幾つもの特権があるが、それらは国やギルドの緊急事態には協力する義務を負うからなのだろう。まあ、特権を既得権と勘違いするような阿呆よりはましかな？

で、私が参加しないでいい理由は、ランクがFだから。召集の対象はDランクまでで、要するに足手まといのEやFランクを連れていく余裕は無いということ。

納得です。

「魔獣が溢れるって、具体的にはどう云う状態になるんですか？」

取り敢えず、私のことはどうでもいい。多くの人の命が掛っているらしいし、自分で云うのもなんだが、私はこう云う場合は、ジタバタしない性格のようなのだ。寧ろ、極端に冷静になる。

だが、私は参加できないが、Bランクのスンは行かなければならない。

みんなもだ。

「そうですねえ、迷宮中の魔獣が地表に出てきた挙句、周辺の魔獣を巻き込んで暴走する、と云えばいいでしょうか？兎に角、大魔獣数匹を中心に中級魔獣や下級魔獣まで、一つの迷宮の魔獣全てが出てきて、人を襲います。数は・・・2000～3000でしょうか・

・・・」

「それが、今回は二か所で同時に起き、しかも一つの都市を襲っている。セニエは準備していたらしいが、二つ同時とは考えていなかった筈だ。飛行タイプの魔獣もいるそうだから、かなり酷い状態だろうな」

グスタフさんとスンの話を纏めると・・・

本来は狂騒が起きると、騎士団を中心に攻撃し、足の速い先頭集団を撃破しながら城塞都市まで後退。その頃には下級魔獣はかなり数を減らしている筈なので、予備兵力の豊富な城壁付近まで引っ張ってきて、余裕を持って、中級・大魔獣を仕留める。

どこの都市でも概ねこのような方法が取られるのだが、今回は、二か所から侵攻されたため、出撃した騎士団が、まず大打撃を受けてしまい。城塞都市周辺までかなりの数の魔獣に侵入されてしまった。

幸い、セニエ侯爵が単独契約を結んでいた高位の冒険者たちを中心

に、城壁付近で、一応、撃退に成功したが、殲滅には及ばず、城壁外周を徘徊している状況で、しかも、飛行タイプの魔獣まで手が回らず、防衛側を含め都市内部に被害が出ている。

私は下級魔獣はブレードラビットしか知らないが、それでも、あんなのに包囲されたら高位の冒険者でも、安心して戦えないだろう。小さくても殺傷力を持つ魔獣なのだから。

そして、それらを先に片付けるにしても、城壁の上に不用意に姿を晒せば、飛行タイプの魔獣が寄ってきて攻撃を受ける。

これを何とかするには、対空戦闘能力の高い魔術師や弓使いを大量に城壁に上げて、数で圧倒するしかないのだが、想定より倍以上に膨れ上がった魔獣のために、数が足りない。

そこで、セニエ侯爵は緊急依頼をギルドに提出したということのようだ。

もちろん、都市内部に侵入した魔獣を討伐するために、剣士や重戦士など必要だ。

「心配しないでください。みなさんのお帰りをお待ちしています」

話を聞き終えた私には、そう云うしかなかった。冷静に見て私に今できることは無い。

最強が聞いて呆れる。

風の旅団は、今朝、深奥の迷宮に赴くための用意を終えていたから、必要な武器や食料が既に揃っていた。だから、私の様な素人に説明してくれているが、他の冒険者たちは今頃、物資を求めて街中を走り回っているだろう。

「本当に・・・すまないと思う」

ピクッ！どっかで聞いたようなセリフ・・・
今のスンのセリフは・・・お茶らけている場合じゃあないし、自重
しようか。

改めて契約して、元の部屋に戻った私は、それでも何かできないか
考えた。何処までできるかわからない身体能力か？習ってもいない
魔法か？

そう考えると、冒険者のスキルの高さに改めて驚かされる。考えて
みれば、彼らは魔獣の種類ごとに、武器や手段を変えて効果的に倒
しているのだ。魔法だけでも駄目、身体能力だけでも駄目なのだ。

なら、戦いでない部分でならどうだろうか？

私がアリスさんに教えて貰った魔法は、転移魔術。まだ、出来ない
が！？

でも、一応、まともに教えて貰ったのはこれだけだし、できるよう
になればギルドで物資輸送の手伝いくらいできるかもしれない。

練習しよう・・・もしかしたらその物資がスンを救うことだってあ
るかもしれない。

「シュン、考えことか？」

いつの間にか、スンが部屋に戻ってきていた。

ロビー兼食堂での話し合いの後、風の旅団としての話し合いがあっ
て、スンは当然に参加したため、私とは別々になっていた。

「いや・・・ちょっとアリスさんに相談があったんだけど・・・」

残念ながら、アリスさんは高位の魔術師としてギルドに呼ばれてい
ないそうだ。アリスさんのランクはCなのだが、それ以外の職種と
違って、体内魔素の保有量が物を云う魔術師にランクはあまり意味

が無いそうだ。

できれば、アリスさんにもう一度よく聞いておきたかったが・・・

「アリスになんの相談だ？私では駄目なのか？」

あれ？なんでしょうか？今、私の微S心を猛烈に刺激したものは・・・？

ううむ、スンには、過去の事情からトラウマがあるようだ。実際、例のことがあって以後“他の男に抱かれたことはない”と必死に訴えていた。気にしないのに。

「スンじゃ、だめ」

22 やってみるようです。

まあ、なんというか、この後、スンを言葉攻めでいじめ倒して、泣かせた上で、エッチな要求をする妄想が脳裏をよぎったわけだが、“今は”止めておいた。

分別をわきまえた大人に、俺はなる!!!

「転移魔法のやり方を教えて貰おうとおもってね」

何処かホッとしたようなスンに先程までの考えを話すと、それ位なら自分が教えられると云い始めた。何でも、スンはアリスさんから転移魔法を習ったらしい。

それに、最初の一步である体内魔力のコントロールは、スンの方がうまいくらいだとか。

と云うことで、部屋の中で練習を開始。

座禅の要領で精神を集中して、体内魔力を感じる・・・だめ！
もう一回・・・やっぱり、だめ！

なんか違うような気がする。スンによると意識を集中してお腹の辺りにある（様な気がする）魔力の塊に触れ、そこから魔力を腕や足に伸ばしていく。

転移魔術の場合は、それを足先から魔法陣に伸ばし、体外魔術を取り込みながら魔法陣全体を満たすと魔術が起動し、次に目的地をイメージすると転移するらしい。

しかし、私にはどんなに頑張ってみてもそんな魔力の塊は認識できないのだ。

結局、二時間程、スンが付き合ってくれて、体内魔力の認識さえ出来ずに終わってしまった。初めてなのだから、焦ることは無いとス

ンは云ってくれたが、実は、結構、凹んだ。
一応、神竜で守護者らしいから、もうちょっとこう、なんとかならんもんですかいね？

「まあ、明日にでも、もう一度やってみれば良いだろう・・・ね？」

スンはそう云って部屋の備え付けのお風呂に向かった。

今、“ね”って云った。間違いなく云った。

ちよっと落ち込んでいたけど、これは聞き逃さないよ？

でもね、ちよっと待って欲しい。そして、私は携帯電話を取り出して、例の番号に電話を掛けた。

「夜分、誠に恐れ入りますが、神様はいらっしゃいますでしょうか？あ、神様ですか？いつもお世話になっております。村上俊です。お忙しいところ恐縮なのですが、ちよっとお伺いしたいことがございまして・・・はい、ええ、ええ、そうなんです・・・」

まさに、“神頼み”を実際にやってみた。

で、神様によると“そりゃ、無理じゃわい”の一言だった。私に魔術が使えないということだけでなく、人間とは使い方が多少、異なるのだとか。

そもそも、神竜が魔法陣なんか書けるか？と云われてみればそのとおり。

魔法陣は、人間が魔法を使えるように長い年月を掛けて、工夫に工夫を重ねて、比較的魔力が少ない者でも効率よく使えるようにしたもの。

神竜には必要がなく、寧ろ、邪魔にしかない。

「しかし、ですね、神様？私、自分の魔力も全く感じないんです」「お主の体は見た目はともかく神竜で、頭の手から爪の手まで魔力

で満たされておるのじゃから、そこから“特定の魔力を”などと、無理な相談じゃな。いってみれば、水の中で水を探すようなもんじやで。まあ、後は、自分で何とかせい」

と云うことで、神様とのお話が終わった私は、改めて、精神を集中し転移魔法をためして・・・みたりはしないよ？
急いで服を脱いで、スンの待つお風呂へ向かいました。

それから私はスンの白くてスベスベの体をゴシゴシ（布とか束子とかは断固として使用を拒否する！）しながら考えた。

魔力に問題が無いのなら、次は魔力の放出さえできれば魔法陣は起動するのだから、後はイメージの問題か???
などと考えたところで、考えるのを止めた。

昔々、それこそ、小学校低学年位の時のこと。

超能力が欲しいかった私は、スプーンを曲げようとしてみたり、時計の針を止めようとしてみたり、いろいろやってみた。

でも、出来る筈もなく、アホな私は“きっと、集中力が足りないんだ！”とか、いろいろ考えた分け。でだ、トイレでウンコしている時に一番集中していることに気が付いて、私の超能力研究は終わりを迎えたわけだ。

ん？意味がわからんと？

ウンコしてるときに、もし、レポートとかできちゃったら？

まあ、ウンコしながらじゃないと超能力が使えないのなら、無くても同じかなあ、とそこは何故か合理的に、そして、すんなりと諦めたと云うお話し。

考えてみれば、妙に、冷めた子供だったのだな。

そんなわけで、現在、ここで、転移魔術なんぞ発動したら、うれし

い以前に、恥ずかしすぎる。まして、転移魔術は、今の私にとっては“マジもの”なのだから。

転移魔術のことは明日考えよう。

朝になってから、みんなはギルドでの打ち合わせのために、早くから宿を出た。

出発は明日だが、それ以前に調整しなければならないことが山ほどあった。

まして、風の旅団は有名な冒険者パーティーで、派遣される者たちの中でも高位に位置する。自然と中心的役割を担わなければならなかった。

その日、少し疲れた様子でスンが帰って来たのは、もう日付が変わる頃で、私は、ただ、スンをベッドに運び、静かに寝かせてやることしかできなかった。

そして、出発の日の朝、いつも通り朝食をとり、身支度を整えた風の旅団は、厳しい顔つきで宿を立った。

私は見送りのため、彼らと共に、以前、スンと行った公園に向かった。

公園には、スンと座ったベンチはなく、ただ広い空間があるだけで、その中央には大きな転移魔法陣が設置されていた。

その魔法陣の脇に小さなテーブルが置かれ、私の冒険者登録をしてくれたねこ耳受付嬢が真剣な面持ちで、書類を捲り、一つ一つの名前を確認しながら読み上げていった。

そして、魔術師らしき数人の男たちが呪文を唱え、転移魔法陣が輝くと同時に、その中に立っていた20人程の冒険者たちが、次々にセニエの城塞都市に転移して消えてく。

「次、風の旅団。鉄壁のダーク以下5名。お願いします!」

名前を呼ばれたみんなは魔法陣に向かい。スンは私と繋いでいた手を離れた。

「ショウ。じゃあ、行ってくる」

「ああ。みんな、どうか無事で!」

手を振って見送ると、ダークさんはニヤリと笑い、グスタフさんは微笑んで頷き、アリスさんはフンと云い、チャックさんはへへへと笑い、スンは、ちょっと恥ずかしそうに笑って手をふってくれた。

「目標はセニエ城塞都市3番魔法陣です。転移開始!」

23 無双するようです。

風の旅団が、他の冒険者とともに転移して姿を消した後も、私は30分程の間、公園で次々と送り出される冒険者たちを見送っていた。周りに集まっていた町の人たちも声援を送っていたから、なんとなく、同じ気持ちになれたような気がしていた。しかし、それから間もなく・・・

「なんだ！？魔法陣が・・・誰か転移してくるぞ?!」

「なんだと？誰か避難してくるのかもしれない。さがれ！」

ざわめきの中、転移してきたのは二人の騎士のようだった。

かつては白銀に輝いていたであろう甲冑は、薄汚れ、あちこちにへこみを作っている。酷い怪我を負っているのか、一人は穂先の折れた槍に体を預け、一人は魔法陣の中で倒れ伏していた。

「怪我人だ！・・・治療術師を呼べ!!!!」

「出血が酷い。急げ！」

ここに設置された魔法陣は特殊なもので、現在は、セニエ城塞都市内にある複数の転移魔法陣とクブスリーの往還のみができるようになっていて。つまり、彼らは間違いなくセニエからの帰還者なのだが、伝令にしては様子がおかしかった。

「だ・・・応援を・・・では・・・めだ・・・」

「何を云っている！救援の部隊ならたった今送ったぞ！もう大丈夫だッ」

すると、両腕を抱えられていた騎士が、驚きに息を止め、絶望した

ように叫んだ。

「応援を・・・送っては駄目・・・だ！今朝・・・セニエの城壁は・・・中央広場の全開・・・魔法陣が・・・魔獣に・・・。今、・・・すれば、魔獣どものド真ん中に・・・転移することに・・・」

私は、息を飲んで見つめる群衆のなかから跳び出していた。

目の前が真っ暗になった。

ついさっきまで、笑顔だったみんなの、スンの笑顔が、脳裏に蘇ってくる。

そしてそれは、直ぐに、見たこともない、残酷な想像に切り替わる。私は、だれかの制止を振り切って、魔法陣に跳び込むと一気に転移していた。

昨日まで、いや、ついさっきまで出来なかった転移を、私は単独で無詠唱で行って、次の瞬間にはセニエ城塞都市の転移魔法陣に立っていた。

第3魔法陣は、何かで赤く塗装された中央広場にあった。

そこは、見たこともない魔獣たちが我が物顔で闊歩し、人を食らっている地獄だった。

だが、私の転移には気が付かなかったのか、魔獣たちは直ぐにはやっつけてこなかった。

「どこだ！スン！みんなあ！」

魔獣たちに気付かれるのも構わず、私は大声で叫んだ。

どこからか、かすかに檄剣の音が聞こえ、それに倍する悲鳴がそこら中から聞こえる。

まるで、ゴミのように転がる遺体の数々の中に、風の旅団の姿は無かったが、スンと同じ組で転移した見覚えのある男たちの顔があっ

た。

「どこだあああああああ！！！！」

一瞬の後、私はスンを見つけていた。

中央広場の片隅で、未だ戦い続けている一団がある。

巨大な魔獣が数匹、その一団に必要な突進し、或いは、炎を吹き付け、そして、隙を見せた男が一人、弾き飛ばされて、固い石畳に叩きつけられ“グシャリ”と音を立てた。

そして、その男の直ぐ脇に、倒れ伏すスンの姿があった。

ブォンンンン・・・

次の瞬間、私は、ピクリとも動かないスンを抱き上げていた。

スンの顔は苦痛に歪み、顔色は蒼白になっていた。

当り前だ。右腕の肘から先が千切れかかっていた。

先程の男と同じように地面に叩きつけられたのだろうか、意識もない。

「スン？ スン？ しっかりしてくれ・・・」

私は、無意識に、腰に提げたショートソードを引き抜き、自分の左腕に当てると一気に引き裂いた。流れ出る血をスンの唇に押し当て、無理やり飲ませる。

ゴクリ。とスンの喉が動いたのを確認して安心すると、私はショートソードを投げ捨て、自分のシャツを引き裂いてスンの腕に巻き、千切れかけている腕を固定した。

ドスッドスッ！、ドスッドスッ！

スンを抱える私の後ろから、何か大きな物が近づいてくるのがわかった。

「シュン！スンを連れて逃げろッ！」

何処かで、聞いたことのあるような声が聞こえたが、私は逃げなかった。

頭の中に云いようなない、ドロドロとした怒りがあった。

どいつがやった？誰がスンを傷つけた？

「おまえかああああ！？」

左手を無造作に振った瞬間。“パンッ”と音がして近づいてきていた何の頭が消し飛んだ。

首から上を失った魔獣が血しぶきを上げ、地響きを当てて倒れ伏す。私はその返り血からスンを守るようにコートを広げ、スンを包み込むようにして両手で抱き上げた。

しぎややややや！

前に深奥の迷宮で見たのと同じ魔獣だ。こいつには打撃や斬撃は通用しない。だが・・・

「おまえかああああ！？」

ゴスっつっつっ！！！

私に齧り付こうとするその頭の、構わず下から蹴り上げた。前足が宙に浮き、そして、そのまま落ちてきた所を足で思いつきり踏みつけると、その頭の頭は“パクンッ”と音を立ててザクロのよ

うに割れ、血を飛び散らせて動かなくなった。

美しい公園の石畳に放射線状のヒビが走り、地面が僅かに陥没したが、まあ、いいさ。

でも・・・まだ、足りない・・・

その時、私の前に黒く巨大で禍々しい殺意を持った“何か”が現れた。

体長は5〜6メートル、最初に殺った魔獣よりは小さいが、遥かに強大な魔力を持った四足の“何か”・・・

「あれは・・・まさか、モラニスのブラックサーベル・・・凶王！
！！」

23 無双するようです。(後書き)

おお、無双を描くと、文字数が減るなあ

24 おとなしい人が怒ると怖いようです。

その魔獣は虎に似ていた。

ただ、全身が闇のように黒く、たてがみのように首のまわりを覆うのは、どれも鋭い刃で、これに触れたものを細切れにするのだろう。その半面、漆黒の胴体はそれだけで、名剣の斬撃をも弾き返し、その下の鋼鉄の筋肉から生まれるパワーは他の大魔獣を凌駕するのだろう。

太い四肢にある20センチ程も突き出た爪は、騎士の持つ盾をあつさり引き裂く力を持ち、その牙にかかれば、城門の扉さえ噛み砕かれるのだろう。

それがどうした・・・

私にはどうでも良い事だ。私の遣るべきことは・・・遣りたいことは決まっている。

スンを傷つけたものを・・・すり潰す!!!!

実際、スンを傷つけたのが凶王であるかどうかは分からないが、それもどうでもいい事だった。此処にいる全部の魔獣を殺せば済む話しだから・・・

凶王と呼ばれたそれが、獲物と認識した私に向かって一瞬で襲いかかった時、私もまた、凶王に襲いかかっていた。

「私は、あなたの獲物じゃありません。あなたが！私の獲物なんですよ!!!!!!」

ブオオオオオン！

そして、私はいつの間にか凶王の側面に立ち、その横腹を蹴り上げていた。ガスっ！という音と共に、凶王が真横にズレた。だが、四肢の爪で地面を掴み、踏み止まって見せ、そして、私に向かって、大きく開けた口から炎を吹き付けてきた。頑丈な体だ。

それはかつて、アリスさんが見せた炎の中級魔法に匹敵する火力を見せた。

ブオオオオオン！

「何処を向いてるんです？ 私はこっちですよ」

私は、また、同じように凶王の側面に移動し、横腹を蹴りつける。何度も、何度も・・・何度も、何度も・・・

今私が使っている魔法は、転移魔術ではない。実際、スンやアリスさんに教えられた魔術の使用法など、何一つ踏襲していないのだから。

無論、身体強化魔術のアクセルでもない。そんなものを使ったら抱きかかえたスンに負担がかかってしまう。

私はただ、あそこに行きたい、次はここ、とそう思っているだけ。まるで、息をするように、呼吸するように、自然に転移を繰り返している。

そうか・・・これは、転移といよりは、いっそ、テレポート？・・・なら・・・

少し冷静になってきた私は、昔読んだ小説の主人公が使っていた戦い方を真似てみることにした。凶王は、頑健な体で私の蹴りに堪えている、といより、まるで痛みを感じていないかのようにふるまっている。

正直、面倒くさくなってきた。だから、さっさと片付けよう、まだ、沢山いるのだから。

ブオンンンン！パシッ！ブオンンンン！

次の瞬間、私は凶王の後方に立っていた。

それまでと違う動きに凶王は、咄嗟に振り向こうとして地面に倒れた。

「あ、できた。これは・・・何というか・・・チートってやつですか」

グギヤアアアア、ゴギヤアアアアア！

振り返ると凶王は、地面をのたうち回っていた。

それは痛いだろう。さっきまで大地をしっかりと掴んでいた、強靱な前足が一本。無くなっているのだから。

私のしたことは、ごく簡単。一瞬で凶王の前に転移して凶王の前足に蹴りを入れ、それと同時に、その触れた部分と一緒に転移したのだ。

私の足元に、凶王の左前脚が転がっていた。

「ちょっと五月蠅いですよ？もう結構ですから・・・死んでください」

ビクッ！

凶王の目に、初めて怯えが走った。

もっとも、その目は、既に切断され地面に転がった首にあって、光を失っていたが・・・

「・・・シュン・・・シュン？」

小さな声が直ぐ近くで私を呼んだ。

「だめ・・・よ・・・シュンは、そんな・・・目をしては・・・だめ・・・なの」

私の腕の中で、スンが薄く眼を開けていた。

慌ててスンを下すと、スンは動かない筈の右手を挙げて私の頬に当たった。

「スン！もう大丈夫だよ、今、みんなの所に・・・」

「あな・・・たの・・・目が・・・好き・・・優しい・・・暖かい・・・」

「シュン！スンは無事か！？クソツタレがあああ！！！！」

「シュン！スンをこっちに！直ぐに治療術を・・・」

私のそばに風の旅団のみんなが集まっていた。グスタフさんはその大盾でスンを隠し、アリスはさんはその陰でスンに治療術を施した。私が大魔獣を三体片付けたことで、戦力的に余裕が出来たのだろう。公園の各所で冒険者たちが攻勢に出ていた。

「かかってこいやあああ！！」

チャックさんも健在らしい。

見れば、厳しい表情のグスタフさんが、一度に三本の矢をつがえて上空に向けて打ち放っていた。

「野郎ども、押し返せ！転移魔法陣を確保するんだあ！」

ダークさんのどなり声が公園中に響き渡る。

そして、第3転移魔法陣が輝き、その中から盾を全方位に巡らせ、槍を立てた30名程の騎士たちが現れると、冒険者たちの勢いは更に加速した。転移魔法陣が魔獣に占拠されているのを承知の上で、決死の覚悟で転移してきたことが窺える陣容だった。

「我々は、王国騎士団である。魔獣はどこだ！」

セニエ侯爵領を襲った“二重狂騒”が、終息を始めた瞬間だった。

25 懐かしいお家に帰るようです。

あの日から三日が経った。

セニエ領を襲った“二重狂騒”は、国軍の出動で急速に終息して行った。

クブスリーから出発した援軍のうち半数が帰らぬ人となったが、生き残った冒険者たちはその後、セニエの残存兵力、国軍の騎士団と協力して、次々に転移魔法陣を奪還し、援軍を呼びいれることに成功した。

セニエの全開放魔法陣は、もともと城塞都市の各所に五つ用意されていた。

この魔法陣は何処からでも相応の魔力さえあれば、予め指定された都市や町の魔法陣からなら、中継地を無視して転移を受け入れることができるようにしてあった。

クブスリーもその一つで、総勢73名が援軍に向かったのだ。

風の旅団が第3魔法陣に転移した時、先に転移していた部隊が既に戦闘に突入していたそうだ。しかし、三体の大魔獣に加え、中級魔獣や多数の低級魔獣に襲われ、防御力の弱い者から次々に倒された。このことは、城塞が持ち堪えていることを前提に、先に軽装の冒険者を大量に転移させたことが裏目に出たと云っていいだろう。

セニエの魔法陣が魔獣に占拠されたことをもっと早く知らせてくれていたら。

とは、誰もが思うことだが、重症を負いながら知らせに来た騎士たちを責めることは、誰にもできなかった。

彼らは、救援を中止するよう、唯それだけのために魔獣に占拠されていた第2魔法陣に突撃し、多くの戦友を失っていた。

実際、彼らの小隊は、突入時、15人だったそうだ。

最終的に、セニエに駆け付けた援軍は国軍、冒険者を含め2000名に達し、多くの犠牲者を出しながら城塞内に侵入した魔獣達を駆逐して城門を奪還。城塞内部の掃討戦を行いながら、城門外にも進出、殆ど全ての魔獣の討伐に成功した。

この中で風の旅団は、スンを欠いた状態であるにも拘らず、獅子奮迅の戦いを見せ、王国騎士団をして瞠目させた。

「鉄壁」ことダークさんは、またしても巨獣の突進を微動だにせず受け止め、その斧でイノシシに似たその魔獣を一撃で仕留めて見せた。

「鷹の目」ことグスタフさんは、空を舞うワイバーンの群れを瞬く間に打ち落とし、落下してきた所を、チャックさんが突き、アリスさんが燃やし尽くした。

その間、私は、素人よろしく、スンを抱いたまま、あっちへウロウロ、こっちへウロウロとみんなの後を付いて回った。

無双？なにそれ、何語？英語かなにか？

でも、そんな素人丸出しの私に、セニエの騎士団や、国軍の騎士団は兎も角、クブスリーからの救援部隊は、何故か護衛を3人も付けてくれた。

私のせいで、戦力が落ちてしまうにも拘わらずだ。

申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

僅かな休息の際、国軍の騎士に「素人が病人つれて、こんな所で何をしている。じゃまだ！」と怒鳴られたときには、私が謝る前に、生き残ったクブスリーの冒険者たちが、その騎士を睨みつけて「もっぺん云って見ろ？凶王の腹ん中に突っ込むぞ？こら！！！」と、

怒鳴り返して大騒ぎになるところだった。

うれしかったけど、正直、云い返した冒険者の方が怖かった。

その騒ぎは、私が“恋人なんです。すみません”と頭を下げたことで事なきを得た。

新たに云っておこう。私は事なかれ主義だ！

そして、多くの犠牲を出しながら討伐終結宣言がセニエ侯爵よりだされ、それぞれの町に撤収が始まった。

一般市民の死者行方不明者は総勢5000人を数え、勝利したとはいえ、決して喜べる勝利ではなかったが、生き残ったものには、死者の分まで生きる義務があると思うし、喜ぶべき時は喜ぶべきなのだ、私は思う。

スンは、あの日から丸一日眠り続けたが、情勢が好転した二日目には目を覚ました。

城塞都市内部であるにも関わらず、当時は、安全な場所など何処にもなく、体力を失っていたスンは、ずっと私の腕の中にいた。

スンの腕は、目を覚ました後、包帯に取り換えようとしたときは、完全に再生していたが、これが、私の血を飲んだせいなのか、それともアリスさんの治療術のおかげなのかは、分からないままだったので、アリスさんに尋ねたところ“あなたバカなの？死ぬの？”と、分けも分らず罵倒された。

「風の旅団、鉄壁のダーク以下6名。第3転移魔法陣からクブスリーへ！」

「転移開始！」

クブスリーでゆっくりできる。そう思っていた私は甘かった。

思えばかなりの無茶をした。

私が、無詠唱で転移魔法陣を起動させ、あまつさえ、セニエでは、一瞬のうちに三体の大魔獣を倒し、しかも、そのうちの一体が所謂“名前持ち”の『凶王』だったことから、冒険者の間では“黒髪の魔術師”として噂になっていた。

家に帰ったら髪を染めようと思う。

しかし、「んまあ・・・ご覧になりました奥さん！村上さん宅の俊君。随分長いことお家にいらっしゃるけど、今度、髪を茶髪になさって、どうされたのかしら・・・？」という、ご近所の奥様方の噂の種になりそうで怖い。

更に、緊急事態だったとはいえ、戦いの前、スンは自分がBクラスのスンスール・オードランだとギルドで名乗っていたので、若返ったことがバレていたし、その原因が、恐らく私だろうという噂も立っていた。

幸い、スンは私の部屋で休ませていたから、直接、何らかの接触を図る輩はいなかったが、私の方は、グスタフさんやチャックさんの護衛が無ければ表に出られなくなっていた。

まあ、スンの世話で殆ど外に出る必要もなかったが・・・

帰って来てから二日、怪我をしてから五日程で、スンはほぼ全快したが、私はベッドから出ることを許さなかった。
なぜかって？

決まっている！全快したなら・・・ここからが真の“お医者さんごっこ”の時間だああ！

まあ・・・異世界の診察と称して全身検査とか、リハビリと称して全身マッサージとか、最後はお風呂に入れたりとか・・・いろいろ・

・・した。

そして・・・・・・・・

私は、今、馬車の中にいる。

風の旅団は莫大な報償を受け取り、ダークさんとグスタフさんは各国の騎士団から誘いが来ているそうだが、私を「深奥の迷宮」に連れていくという最後の依頼を果たしてくれている。

スンは、どうしても私に付いてくると言い張り、私の隣で、幸せそうに眠っている。

ああ・・・・・・・・近所になんて、説明しよう・・・

25 懐かしいお家に帰るようです。(後書き)

あながき？

つたない文章、稚拙なストーリーに長らくお付き合いくださり、誠にありがとうございます。

ここまでが、書き始めた時のゴールです。

感想やレビューをカットしたのは、御想像のとおり、私がチキンだからです。

でも、沢山の評価を頂き、最後まで書いてほんとに良かったと思います。

それから、シュンの無双時に使った戦闘方法は、菊池秀行さんの小説からヒントを頂きました。ごめんなさい。

結局、小説の難しさを痛感するとともに、他の投稿者のみなさんの凄さを改めて実感しました。

実は、この作品に盛り込もうと考えていたアイデアが幾つも宙に浮いています。でも、早く無双が書きたくて仕方なく全部カットしました。

それから、管理者様の指摘により作品中のエッチシーンを一部削除しましたが、本作品のストーリーとはあまり関係ないところなので、そのまま読めます。すみませんでした。

さて、この後ですが、どうしようか・・・(11/21)

26 新生活は大変ですか？（前書き）

ええっと、解析データを見たらえらいことに・・・
読んでくれている多くの方に感謝です。

26 新生活は大変ですか？

異世界から戻ってからはとにかく大変だった。

スンが暫くの間、こちらにいたことになったから、まず、気になっていた下着を揃えることから始まって、次に洋服、靴と、その他もろもろが必要になった。

更に、こちらの社会常識をある程度教えておかなければ、危険すぎて私が一緒でもスンを表に出すことが躊躇われた。

勘違いしないでほしい。

スンの身が危険のではなく、スンにちょっかいを出す者の身が危険なのだ。

此方の世界には魔素が存在しないが、体内魔素はそのままなのでスンの身体強化魔術は健在。ナンパ目的で下手に近づけば、ヘビー級ボクサーだろうが、プロレスラーだろうが瞬殺できてしまうのだ。

まあ、それ以前に、私は此方の世界がパラダイスだとも思えないから、スンを失望させたくなかったのかも知れない。

と言う分けて、私としては、スンを此方で生活させることに消極的だったが、向こうでの噂が、ある程度終息するまでは、むしろ、いない方が良くだろうというのが、「風の旅団」の総合的意見だったので従うことにしたのだ。

人の噂も75日というが、つまり、一月程経った今頃は、まさに最盛期と云った所だろうから、私も異世界には近づいていない。

スンはといえば、ある程度、こちらに慣れてきて一人でコンビニに買い物に行けるようになっていた。スンにとっては、24時間営業で見たこともない品々の並ぶコンビニは驚異の存在だったようだ。そして最近のスンのお気に入り、そこで売られている洋菓子の数

々と、何故か下着と靴下のようで、異常な関心を示している。
昨日も大量のシュークリームを大人買いして帰って来た。

さて、私の方は・・・

ご近所対策として、正月は、親戚の娘を預かるために、外国に旅行に出かけていたことにした。親戚の娘とは勿論、スンのことだが、出身は中東の某国ということにした。

あの辺りは、面白い事に、見た目が日本人そっくりな人の国もあり、一方で金髪碧眼の人が暮らしていたりと、人種的には誤魔化しやすいし、言葉も聞いたことがないようなものが多いから、最適だった。

そうして、どうにかこうにかスンのいる生活に慣れ、私の新生活も落ち着きを取り戻し始めたある日のこと、スンの何気ない一言から、私は男として一大決心を迫られることになった。

「シュン。月のモノが来ないのだが・・・」

ビクウウウウウウツ！

そ、その言葉は、お付き合いしている男女の間では、云って良い場合と、云ってはいけない場合がある・・・と、思う。

スンと私は、私が云うのも何だが、ラブラブだ。

私を試すためにそんなことを云うとは思えないから、単なる事実だろう。

男子諸君！このような場合、決して「うそ！降ろせよ！」などと口が裂けても云ってはならない。相手が、スンでなくとも、地獄をみることを請け合いだ。

なので・・・

「あ、そうなの？じゃあ、ちょっと、妊娠検査薬買ってきてりゅ」

・・・かみまみた。

まあ、動揺するなと云う方が無理なので許してほしい。いろんな意味で。

そして、私は盗んでいない自宅のバイクで再び走りだし、ドラッグストアへGO!した分けたが。結論から云えば「陰性」で、妊娠ではなかった。

思えば、殆ど常に「男の責任」コンちゃんを使用していた分けたから、可能性は低かった分けたが、紳士淑女のみなさん?あれも決して100%とは云えないことを肝に銘じておいてほしい・・・と、大人な私は声を大にしてみる!

決して、自分だけ死ぬほどビビったからではぬあい!

しかし、実際のところ定期的に来るはずの物が来ないというのは、スンの体に異常があるかもしれないわけで、しかも、その原因について思い当たる節があり過ぎて困ってしまった。
ところで・・・我が国にはこんな言葉がある。

『困った時の神頼み』

良い言葉だぁ・・・と云うことで、実際に神様に知り合いがいて、しかも、電話で話せる私はスンの隙をみて、早速、お伺いを立ててみた。

その結果、やっぱり、スンが若返ったことに原因があることが分かった。

「そうじゃのお・・・お主と、その娘の子が出来るとしても、恐らく200年から300年後くらいじゃなあ。そもそも、お主が繁殖期を迎えておらぬで」

「は、繁殖期・・・ですか?」

「そうじゃ。神竜の基になった個体は、概ねその位の周期で繁殖期を迎えるでな。じゃが、それでは、伴侶がそこまで生きておるか分かるまい？じゃから、神竜の加護を与えられたおなごは、その神竜に合わせて繁殖期を迎えるわけじゃな」

神様のお話しによれば、スンの体は、いつか来る私の繁殖期に備えて、体機能の一部が一時停止した状態にあるらしい。

しかしだ。世の中、絶対はないので神竜がその氣を無くすと、その時点から相手はその種族本来の寿命を取り戻し、そこからはゆっくり歳を取るのだそうだ。

勿論、神竜の相手がその氣を無くした場合も同様の安心設計。

結局、スンと私にその氣がある限り、スンは不死ではないが不老だということのようだ。

ちなみに、一度でも私と交わった女性は、間違いなく若返りを起こすが、それだけでは不老ではなく、若返った状態から徐々に歳をとり、やがては死ぬ。

まあ、それでも数十年程度の寿命の延長と、一時的な若返りは得られるわけだが。

そして、スンの方は、妊娠ではないことに若干、残念そうな顔をしたものの、その夜から、私がコンちゃんを使用しなくなったので、満足しているみたいだった。

女性の心理は微妙なもので、スンはコンちゃんの使用＝私が子供を欲しがっていない、と思っていきたいらしい。いつか、ちゃんと本当のことを話してあげたいと思う。

「スン、お風呂湧いたよ」

「うむ。すまない」

相変わらず「男前さん」のスンが、その言葉通りに、その場でパッと服を脱ぐと、そこからはグレーの小さな布地に包まれた見事な体が飛び出してくる。私は女性の下着に異常に興奮する性癖は持ち合わせていないが、下着姿には普通に興奮する。

そしてスンは、その事に気が付いていて、下着の研究に余念がない。スンの胸はF確定。それが固すぎず、柔らかすぎず絶妙のバランスを取っているのだが、ブラジャーを購入する前は、歩くたびにタユンタユンと・・・それはそれでOKなのだが、表はとてもではないが歩けない。

「あなた達！なんて格好してるのよ！」

26 新生活は大変ですか？（後書き）

た、たまに、自主規制が入るとおもいますが、そこは”てけとう”に妄想してください。

27 お風呂に入りますか？

ああ、前にも似たようなことがあったなあ・・・と、遠い目をし
てしまった私。

私の右手は仁王立ちしたスンの豊満な胸に向かって伸びており、も
うちょっとの所で止まっていた。ああ、この遣り場のない怒りを、
劣情を・・・何処に・・・

私の部屋の例の押し入れの前に、アリスさんがいつかのように顔を
赤くして立っていた。

これは、真剣に転移魔法陣にチャイムを付ける方法を、考えなけれ
ばならないかもしれない。セ○コムじゃ無理だろうしなあ・・・い
や！もしかしたら・・・

あれ？自宅警備員の私が居るのに、セ○コムはないわあああ！

「いい加減に、その厭らしい手を降ろしなさい！」

現実から別の精神世界に逃避することで固まっていた私は、スンの
豊満な胸に向かった手を下すことも無く、その寸前で空中をニギニ
ギしていた。

すぐく、嫌だったが、結構な精神力を消費して手を降ろすことに成
功した私は、何食わぬ笑顔でアリスさんに挨拶することにした。

「やあ、アリスさんじゃありませんか。ご無沙汰しています。その
後、如何ですか？」

「なあああに、無かったことにしようとしてるのよ！・・・まあ良
いわ」

大人はね？都合の悪いことは、無かったことにするの！

アリスさんは、スンの下着姿に多少の興味を引かれたようだが、直ぐに、これまた何時かのようにズカズカと私の部屋に入り込み、ちよっと考えてから机の前の椅子に座った。

ベッドは嫌だったらしい。ちゃんと毎日シーツは洗濯してますよ？

「あなた達ときたら・・・いつもそんな格好で、そんなことばかりしてるんじゃないでしょうね？」

「うむ。大体、こんな感じだ」

スンさん？そこはこう、もう少しオブラートに包むと云うか・・・まあ、見た目16歳のスンが、下着姿で男前な態度を取ると、異常に萌えますが、現状では、どんなに萌えても手が出せない分けで・・・いかん、いかん、いかんよお！

なんだか、テンパってしまつて、表面上は兎も角、内面の立て直しに時間がかかりそうだ。

アリスさんが怖い顔で見てるし、ここはひとつ・・・

「あ、アリスさん、お疲れでしょうから、スンと二人でお風呂でもどうです？」

まあ、なんだ・・・あれだな。私はテンパルト、異世界の女性にお風呂をお勧めする、という奇妙な性癖があることが判明したわけだな・・・あれ？なんか目から汁が・・・

ところが、勧められたアリスさんというと、何故かスンをチラ見してから、すんなりとお風呂に入ることに同意した。

私ですか？・・・覗かないよ？

そして、二人がお風呂に入っている時間を利用して、私は台所で夕食の準備を始めた。

材料は、ベーコン、玉葱、ピーマン、マッシュルーム、などなどの

野菜を適当な大きさに刻み、麺をゆでる。今日は、スパゲッティのナポリタン。

ちなみに、イタリア人に云わせると“これはスパゲッティじゃない！”のだそうだが、私は美味ければ良し、とする性格なので悪しからず。

お風呂場で二人が出てきた気配があったので、さっそく最後の仕上げに入り、皿に盛り付けていく・・・いくって、何処へ？

何故か、それから時間がかった二人。漸く台所に現れたが、なぜかアリスさんの顔がほんのりと赤い。長風呂で湯当たりでもしたのかと思ったが、そうではなかった。

アリスさんは、私がスンのために購入した冬用パジャマを着ていたのだ。

スンは何時かの夏用パジャマだが、アリスさんにはスンのパジャマが大き過ぎたらしく、裾と袖を折り曲げて着ていた。

GJ！スン。まさに、眼福である！！！！

私は、そんな心の暗黒面をおくびにも出さず、にっこり笑って“似合いますよ”とだけ云ったが、アリスさんは更に赤くなって、モジモジしていた。

「お、お、お風呂は、き、気に入ったわ！良い匂いがするし、石鹸もよかった」

「シュン。実はアリスには私の下着を付けて貰ったのだ」

「スン！」

アリスさんは耳まで真っ赤になって、下を向いてしまった。

スンの話しでは、アリスさんは、スンの身に着けていた下着が気になり、風呂の中でスンを質問攻めにしたらしいのだが、結局、付け

てみなければ良さは分からないということで、脱衣所でスンの下着を借りて穿いているのだそうだ。

流石に、サイズが違いすぎて、下だけだが・・・

「シュン。すまないが、明日、アリスを連れて下着を買いに行きたいのだ」

「いいいいよおお！」

即答およびサムズアップ！

以前にも云ってあるが、私はロリも好きだが「愛でる」の専門。実際、14歳の女の子が初めての下着を買いに行くというのに、協力しない男が居るだろうか？いいや！居はしまい！（反語？）何というか、初々しくて、何だか一気に“お父さん気分”だ。お赤飯でも炊くか？ん？

まあ、もっとも現実的にはこの位の子が、お父さんに下着を買いに行くのを手伝って貰ったりはしないけどね。

アリスさんは食事にも満足してくれたようで、私の作ったスパゲツティを残らず平らげてくれた。

食事中は、スンが積極的に此方の世界の事について話していたが、やはり、私がいるとは云ってもやはり、向こうの世界に帰りたいのではないだろうか？

いつもより、テンションが高いような気がした。

夕食後もガールズトークは続き、私は食器を洗い、風呂に入り、客間にエアコンを入れ、加湿器を増設し、布団圧縮袋からお客様用の布団一式を引きずり出して、客間に敷き、寝る体制が完全に整ってもまだ、楽しい笑い声が続いていた。

私は、二人が風邪を引かないよう、話しは布団に入ってからするようには伝えると、二人はうれしそうに一つの布団に潜り込んだ。

アリスさんもスンも畳の部屋で寝るのは初めてだった筈だが、意外と気に入ってくれたようだった。

まあ、あんなに何を話しているのか解らないが、スンが嬉しそうなので、私としては問題ないし、ガールズトークに参加する気概は、おじさんにはない。

私は、突然の来客と、明日の買い物のことでいっぱいだった。たので、漸く訪れたゆとりの時間にホッとしていた。

若い子のパワーには叶わないなあ、ははは！などと苦笑しながら、自分のベッドに潜り込み、電気を消して、さあ、寝ようとした時に思い出した。

「あれ？そもそも、アリスさん、何しに来たんだっけ？」

28 そろそろ本題に行きませんか？

翌日は予定通り買い物に行き、アリスさんと何故かスンの下着も含めて、かなりの買い物をした。私の僅かな蓄えも、そろそろ危険水域に突入しそうな気配だが、二人の笑顔を見ていると何も言えなかった。

電車や車などに対するオーソドックスな驚きは、スンで経験済みだったが、考えてみれば、アリスさんは此方にくるのは二度目。それでも、街中を歩くことは無かったから、三歩歩く度に、立ち止まりそうになるので困った。

結果、私がスンとアリスさんの手を引いて歩くことになり、周囲の視線が……

買い物は、今日が平日ということもあり、午前中にデパートに向かい、午後には我が家に戻って来た。出来るだけ、人との接触を避けたかったのだ。

正直、もう二度と行きたくない。買い物は多少時間が掛ってもネット通販にしようと心に決めた。そして、二人の会話が私以外の人には聞いたことのない外国語に聞こえたことに神様に深く感謝しようと思う。

今日、アリスさんに声を掛けて布教活動に勤しんでいた外国の方！？ そうあなたです。

「ちょっとまったあ！」と絶叫した私を、キョトンとした顔で見るのは止めてください。

あなたの行動は、アリスさんには、魔導書を手にした魔術師の攻撃に見えていましたからね。あなた、今、普通に死にかけましたよ？ 私が傍にいたことを、あなたの神に感謝してください。

「とても面白かったわ」

「そうですか・・・」

我が家に戻ったアリスさんの感想は、短かったが感動に満ちていた。我が家に戻った私の感想は、短かったが疲労に満ちていた。

だが！ひとしきり、買い物成果を広げ、続いて母の三面鏡のある部屋でファッションショーが行われ、私は、たった一人の観客として二人の美少女を心行くまで堪能した。

スンに至っては、黒だったり、白だったりのレースのスケスケ下着で何度も登場し、アリスさんの手前、目のやり場に困った。

正直、16歳の少女が着る下着としては、けしからん！と思うものばかりなのだが、スンは所謂、合法ロリなので、良しと思うと思う。（ホントに良いのか？）

騒ぎも一段落して、私がコーヒーを入れ、いつもの部屋に戻ってきたから、漸く、私はアリスさんの今回の来訪について尋ねることにした。

「ロイド・フォン・セニエ侯爵って、覚えているかしら？」

個人的な知己ではないが、忘れる筈もない。一月前の“二重狂騒”の際に、セニエを守るために奔走したセニエの領主である。

「そのセニエ侯爵が、あなたに会いたがっているのよ。そのために、ダークとグスタフにも接触があったの」

「なぜ、セニエ侯爵が？ ショウの功績を認めると、却って報償の増額になるぞ？」

そうなのだ。

あの戦いでは、私は呼ばれもしないのに戦線に飛び込んだ素人なのだ。三体の大魔獣を倒したとはいえ、ギルドを介した契約をしていない、所謂、義勇兵の扱いで、報償はない。

グスタフさんを経由して、内密にロイド侯爵から礼の言葉を貰ったことは確かだが、直接会って話したことは無いし、公にすれば、勇敢な兵士に対して報償を与えなければならず、もし、報償を与えなければ侯爵としての彼の名誉にも傷が付く。

「まあ、実際にはセニエ侯爵が、シュンに会いたいのではないのよ。たぶんね」

「どういう意味です？」

先の戦いで、セニエ領は甚大な被害を被った。事前に莫大な費用を掛けて準備していたにも拘らず、セニエ城塞都市内部にまで魔獣に侵入され、多くの人命を失った。

しかし、事前の準備が無ければ、もっと酷い事になっていただろうと私は思し、戦闘終結後、直ぐに部隊を解散させ、帰郷させたのも、一部の兵士達の不満はあったが、納得できる措置だった。

戦が終われば、軍隊など、兵士など唯の無駄飯ぐらいになるのだ。

そして、予想外の被害を受けたセニエでは、それを負担する余裕はなく、住民の負担を軽くするためにも、軍隊を外に出し、物流を再開する必要があった。

人も含め魔獣の遺体処理は、セニエの残存常備兵で十分だと判断したのだろうし、その判断は恐らく正しい。そして、あれだけのことがありながら、冷静にその様な判断を下したセニエ侯爵を、私は評価している。

我が国の無能な政治家や無能なマスコミなら、住民の安全や今後のことより先に、まず自分以外の誰の責任かを追及するだろう。

「それを話すには、まず、あなた達の今の立場を説明する必要があるわね」

セニエの戦いは“二重狂騒”が始まったとされる日から討伐終結宣言出されるまで、およそ五日間だった。そして、公式には三日目に国軍が救援に投入された結果、速やかに終息したとされ、国軍の活躍が大きく発表された。

国家の体面と威信を満足させるもので、それ自体に誰も不満はなかった。

冒険者にとっては、国の威信より報酬の方が重要だからだ。

しかし、実際には、シュンの活躍による大魔獣三体の討伐と、「風の旅団」の活躍を契機に第3全開放転移魔法陣が奪還され、その後、他の魔法陣の奪還がクブスリーから派遣された冒険者達による功績であることは、戦いに参加した者達には明白だった。

そして、戦いの終結後、クブスリーに帰還した冒険者たちは報酬を受け取って、それぞれ各地に散って行くわけだが、激戦に参加して生き残った者にとっては、一つの武勇伝であり、酒の席などで自慢話に花が咲けば、当然、セニエの戦いの話も出る。そうなれば、少し声を潜めて彼は云うのだった。

「あの時、あの“黒髪の魔術師”が現れなければ、俺達は全滅していたかもしれない」

彼らにも矜持があるから“かもしれない”とは云うものの、ほぼ確実だったと知っている。

何も知らない聞き手は「そんなにすごい奴だったのか？」と更に尋ねる。

「魔法は使ってたさ。だがなあ、アクセルを使っても、大魔獣を素手で殴り殺したり、蹴り殺したりする魔術師なんか、おりゃあ知らねえなあ・・・しかもだ。その中には、あのモラニスの『凶王』も居たんだぜ？」

こうして、噂は噂を呼び、グランバル王国中に広がりを見せるのは時間の問題だった。

そして、やがてそれは国の中枢にある者達の耳にも届くことになり、それほどの魔術師が何処から来たのか？何者なのか？何処の国に所属しているのか？といった、理由の違いはともあれ、詮索が始まる。建前としては、国の安全保障の問題だから“内密に”ではあるが・

「そう云う分けて、シュン。あなたは今、グランバルでは賞金首も同然なの」

ゲロゲロ・・・

29 地雷ですが踏みますか？

風の旅団のメンバーは皆、私が異世界人であることを知っている。そして、その所為で、奇妙な力を持っていることも、セニエの戦いの以前から知らされている。しかし、その彼らでも、私がセニエで見せた戦闘能力は異常だったらしい。

スンの若返りの一件から、私の体内魔素保有量が異常であることを知っていたアリスさんは、私が使った力を魔術の一種と考えていたので、私は教えられた転移魔術を、短距離で連続して使用し、その応用として、わざと魔獣の一部を転移に巻き込み、魔獣の肉体を引き裂いたのだと説明した。

転移魔術を実際の戦闘に使用したのは、恐らく私が初めてだろうと、アリスさんは呆れていたし、疑ってもいたが、合理的な推論さえ構築できない状態だから納得するしかない。

他のみんなも同様だった。

「で、スンの方はどうなんです？ 噂になってませんか？」

「そうね、今のところシュンとシュンの使った魔術の方が、インパクトが強すぎて、スンの方は、まだ、何も・・・でも、あなた、裏では似顔絵まで出回ってるわよ」

私についての調査は、可及的速やかに行われているらしい。

といっても、クブスリーのギルドに王都のギルド本部からの調査依頼と、余所者らしき人物が『春の風花亭』に現れたり、といったものらしいのだが・・・

どちらにしても、私が姿を現わさなければ、どうと云うことの無い問題の筈だ。

実際に賞金首になっている分けではないのだから・・・

「そこで問題なのが、セニエ侯爵なのよ。あの方は確かにそこいらの貴族と違って立派な方だけど、今回ばかりはかなりの痛手だったみたいなの」

アリスさんの説明によると、セニエ侯爵は今回のことで莫大な借金を背負いこんだらしい。

それは、大貴族であるセニエ侯爵といえども、直ぐに返済できるものではなく、証文を書いて方々に借金を頼んだ。

無論、国王から見舞金などが送られ、また、討伐された多数の魔獣の部位もセニエ侯爵の損害賠償に充てられるのだが、特に魔獣の部位については、数が多すぎた。

それらを、一度に市場に放出すれば値崩れを起こし、王国の経済にもダメージが及ぶことを知っているのだろう。

切羽詰まっていたても、そこまでの経済観念を持つ貴族は珍しいのではないか？

「それでね、セニエ侯爵に多額の資金提供をした某貴族が、もし、その黒髪の魔術師を紹介してくれたら、借金をチャラにしてもいいって云ってるらしいの」

例え、そうであったとしても、セニエ侯爵のことは気の毒だとは思うが、正直なところ私には何の義理もない。

貴族などに拘わったら最後、どこに連れて行かれることか。

私は以前、政治に拘わったことがあるが、一言で言って非常に面倒くさい。

この案件を通したければ、あの案件に同意しろ、だとか、全く異なる案件が取引材料に使われ、その一方で、利権は少ないが重要な案件は、店晒しされて忘れられていくのだ。

そして、その殆どは、一部の有権者の票集めの為で、同じ口で政治改革を叫ぶのだから呆れるほかない。

「あら？ ショウって政治が嫌いなのね。ちょっと安心したわ」

「政治が嫌いなのではなくて、『政治屋』が嫌いなんですよ。どうせ、その某貴族とやらも政治的に強いポストにでも着いているんじゃないですか？」

「正解・・・クロード・フォン・コラン、伯爵にして王国宰相」

ところで、私は自分のことを、石橋を叩いて“壊しかねない”性格だと思っている。

お陰で、かつての上司からはお褒めの言葉を幾度となく頂戴したが、それでも世の中にはそこかしこに『地雷』が置かれている。

知らずに踏めば、いや、知っていながら踏まざるを得ない『地雷』もあり、どうやら私の場合は知らずにそれを踏んでいたらしい。

しかし、解せないのは、宰相閣下なら独自に私を探し出す方法など、幾らでもありそうなもののに、なぜ、セニエ侯爵にそのような話しを持ち込んだか？ である。

侯爵より一つ下の爵位ではあるが、宰相の地位があれば、王国の殆どの機関を自由に使える筈である。わざわざ、貸しを作った相手に、借りを返す機会まで用意するのはおかしい。

政治的には、もっと、有効な時に使用するものの筈だ。

それに、セニエ侯爵と私の繋がりなど、あって無いようなもので、そんな不確かな関係を見込んで莫大な借金をチャラにする条件にするとは、実におかしな・・・いや、怪しいとさえ思うのだ。

「此処からは私が話そう。シュン、実はセニエ侯爵と「風の旅団」は旧知の仲なのだ。具体的には、セニエ侯爵自身が「風の旅団」の

創立メンバーだ」

10年ほど前、既にBランクであったダークさんとグスタフさんの下に、ロイと名乗る青年がやって来た。

ロイは、冒険者を目指して単独で迷宮に潜り、そこその成果を上げていたが、単独では限界があることを知り、優秀な仲間を求めていた。幸いなことに、ロイには魔術師の才能があり、その時すでにCランクだった。

前衛にダークさん、中距離にロイ、長距離にグスタフさん、あまりバランスが良いとは云えないものの、必要な技能を持つ冒険者を臨時に仲間にするこゝで、一応「風の旅団」が結成された。

それから数年後、前衛としてスンが加わり、ほぼ現在の陣容が完成した。バランスも悪くない。

しかし、スンが加入してから直ぐに、ロイが脱退することになった。その頃には、ロイが貴族の跡取り息子だということを、ダークさんやグスタフさんも知っていたし、先代セニエ侯爵が急逝したことで、やむを得なかったらしい。

暫くは、魔術師が居ないことで活動に支障が出たが、すぐにアリスさんが加わり、チャックさんが押し掛けて活動が再開された。

この頃には、ダークさんとグスタフさんには二つ名が付いていて、

「風の旅団」の名前は一目置かれる存在になっていた。

「ああ、つまり、宰相閣下は、セニエ侯爵の過去を知っていて、一方で、風の旅団が黒髪の魔術師と関係があることが分かったから、セニエ侯爵に仲介を頼んだと？」

「そういうこと・・・のようだ」

「仕方ないわよ。シュンは、行きは兎も角、帰りは「風の旅団」と

帰って来たから」

そうだった。

怪我をして本調子でなかったスンを、私がずっと“お姫様だっこ”
していたため「風の旅団」がセニエからクブスリーに帰還する際は、
一緒に転移したのだった。

私の軽率な行動が今回の問題を招いたのだ。

まあ、誰が何と言おうと、あの時、他の誰かにスンを任せるつもり
はなかったが。

それにしても・・・

石橋が叩いて壊せない程頑丈でも、その橋が崖っぷちに向かって一
方通行だった場合は、どうにもならないのだなあと、今更、思った。

30 思い込みが激しく不是吗？

「他にも、シュンには話しておかなければならないことがあるのよ」

買い物から帰った夜、食後のコーヒーを飲みながら、アリスさんは少し、云い辛そうに話し始めた。

「シュンは、私の事どう思う？」

「・・・はい?・・・質問の意図が解りかねますが？」

「私のことを、人族だと思ってない？」

「違うんですか？」

「違うのよ」

「へえ・・・」

会話が終わってしまった。

アリスさんは不満そうにしていたが、スンはアリスさんの隣で真剣な表情で云った。

「アリス、前にも云ったと思うが、シュンは私達の世界の種族について、特殊な考えを持っているらしい。もう少しはつきり云わないと伝わらないぞ？」

私は実は驚いては居たのだが、アリスさんは見た目は完全に人族である。そうでなければ街中に買い物には出かけられない。

モフモフのねこ耳受付嬢は、連れていく場所によってはギリギリセーフっぽいけど、私のご近所における世間的には、明らかにアウトである。

それに比べれば、アリスさんは、連れていく場所によってはギリギ

るから」

「ふうん・・・」

「此方の世界には私の同族は居ないみたいだし、シュンが差別主義者だったらどうしようかと思っていたのに、なんだか拍子抜けだわ・・・」

「云っただろ。シュンはそんな人間じゃないって」

「まあ、あれだよ。何族だろうと、良い奴もいれば、悪い奴もいるだろうし、種族の違いで丸ごと判断するのはどうかと思う分けで。アリスさんに至っては間違いなく良い奴なわけで・・・」

「フン！たかが魔人族でした程度で・・・元厨二病患者の力をなめるなよ！」

と云う分けで、一通りのカミングアウトが終わり、二人は安心して、またしても二人でお風呂に向かったのだが、何だろう？この“娘が大人になって、一緒にお風呂に入ってくれなくなった”的な、微妙な寂しさは・・・そして私は、今日も独り寝することになった。

ん？私がスンとエッチすることばかり考えているとでも？

基本的に、そのとおりですが、何か？

その夜、私は、セニエに出向いた場合の緊急退避計画を練っていた。今の私なら、一人で、若しくはスンを連れて逃げるくらいは造作もないが、宰相が絡んでくるとなると話は別だ。

どんな能力があらうと、国家を相手に事を構えるのは得策ではない。一度、そういう関係になってしまえば、私に関する情報は何処までも拡散する恐れがある。

•
なんとか、正体と能力を隠したうえで、一定の距離を確保したい・・・

そもそも、クロード・フォン・コラン伯爵という宰相は、一体どんな人物なのか？

そして、なぜ、何の目的で、私を探しているのか？

この二つが解れば話し合いの余地があるが、これらが不明なまま話し合いに応じれば、どんな要求をされるか解ったものではない。

最悪、その場で“グランバル王国に仕えよ。嫌なら「風の旅団」のメンバーを・・・”なんてことに成りかねない。

実際、向こうは私と「風の旅団」の関係を知り、更に、私とコンタクトが取れ、それでいて引っ張り出すことが出来そうな、恐らく唯一の糸を的確に辿っている。

決して舐めてかかって良い相手ではない。

当然、スンとの関係についても調べ上げているだろう。

こちらはノーガードで、あちらは背中にナイフを隠し持っている。

こんなフルボッコ確定の交渉などするつもりは無いし、そうなったときは最早、交渉ですらないだろう。

でもなあ・・・

そんなことを考えながら、布団に潜り込んだ私だった。

少しだけウトウトし始めた頃、誰かが部屋に入ってくる気配があり、そして、衣擦れの音がしたかと思うと、誰かが、私のベッドに潜り込んできた。

「シュン。わたしの親友を受け入れてくれてありがとう。うれしかった・・・」

「そんなの当たり前だろう？アリスさんはスンの大事な仲間で、スンとのことではお世話になったこともある。今更、種族が違うくらいで・・・」

「そう？・・・じゃあ、もう一つだけ、お願い。別の意味でも、アリスを受け入れてほしいの。これは、わたしの願いであり、アリス自身の願いでもある」

「？」

気が付くと、私のベッドの脇に、スンより小さな影が立っていた。

「シュン。あなたがスンを救った時の恐ろしいまでの姿を見て、私は決めたの。私、アリス・ヘリクセン・バウ・グループは、あなたの伴侶の一人になると・・・」

アリスさんは、そう云って膨らみかけた小さな胸を隠していた両手を降ろし、私のベッドに滑り込んできたのだった。

31 出発しますか？

アリスがベッドに滑り込むと、

自主規制

「シヨウ。アリスはね、今日、シヨウのために下着を選んだのよ」

それは肌触りのよい真つ白なシルクの下着だった。

それから、全てが終わったあと、スンはベッドを抜け出して、気を失ったままのアリスを客間の布団に連れて行った。

私は思うのだ。

アリスの様な娘が、私の様な男を最初の男に選ぶと云うことの意味を。

実際、アリスは震えていたし、恐怖を感じていなかった筈は無い。それでも、私の前に、その体を晒して、それを望んだのだ。

初めてで快感など望むべくもなく、あるのは、ただ痛みだけ。

そして、実際、アリスは終わる頃に、極度の緊張と痛みで、気を失った。

生半な覚悟ではなかっただろう。

暫くして、スンは私のベッドに戻ってきた。

「シュン、ありがとう」

「へんなの・・・」

私にはそれしか云えなかった。

朝になり、私が起き出す頃、スンも目を覚まして朝食の準備を始めた。

いつもと同じ、トースト、目玉焼きにコーヒーだ。

私が食べている間に、スンは一度客間に行って様子を見てきたようだが、特に何も云わなかった。それから暫くして、アリスが恥ずかしそうに台所に現れた。

実は、私自身も死ぬほど恥ずかしいのだが、此処は・・・此処だけは、何気ないふうを装うのが“男のプライド”というものだ。

「おはよう、アリス」

「おはよう、あなた」

飲みかけのコーヒーが勢いよく逆流して“男のプライド”が粉碎されましたよ？

幼な妻ですか？

スンによると、アリスは随分早くに目を覚ましていたらしい。でも、

昨日の今日で、どんな顔で、私に会えばいいか解らず、布団の中で考えていたらしい。

更に、スンとの事もあり、スンと同じように“シヨウ”と呼び捨てにするのも躊躇われ、かといって“旦那様”もあり得ない。（よ、よかったあ）

さっき、スンが顔を出した時、それでは“あなた”で、どうか？ということで話しが纏まったそうだ。・・・いや、纏めないで欲しいのだが・・・

結局、私の呼び方は二人とも“シュン”になった。

その後、昨夜考えていた今後の対策について話し合い、概ね、私の計画どおりにすることが決まった。まあ、取り敢えずではあるが・

それから、朝食の後は、二人はシャワーを浴びると云ってお風呂に向かった。

考えて見れば、昨日は二人とも私に抱かれた後、そのまま眠ってしまったので、特にアリスについては、初めてだったこともあり、入浴を希望したのだ。

痛みや、出血については、自分で治癒魔術を使ったので大丈夫だそうだ。

だが、私としてはちょっと悔しかったので、微S心を発揮することにした。

「あ、アリス。昨日は、とてもよかったよ」

アリスはそのままお風呂場に逃げて行った。

ざまああああ！

大人気ないともいう・・・orz

それから数日間の事については、特に語ることが無いが・・・

昼間は大体、スンとアリスの指導のもと、私は例の部屋で二人を相手に剣術と魔術の訓練を行い、更に、こちらの科学知識を魔術に応用した体術を試していた。

その結果、驚いたことに、こちら側では空想でしかなかった技の幾つかが、実際に実現できてしまった。

まあ、なにかの役には立つかもしれない。

勿論、転移魔術については、アリスが来る以前から自主トレしていたが、アリスのお陰で随分自由に使えるようになった。

あの日以来、“息をするように”とは行かなかったが、キレた時だけ使える魔術なんで、私に云わせれば“ウンコしながらじゃないと使えない”のと同じだったから、これは重点的に頑張った。ほめて！えらい？

そうして暫くの間は、忙しく？動き回り、私は二人を置いて買い物に出かけ、なけなしのお金を叩いて、幾つかの物品を購入して“押し入れの異世界”に持ち込むことにし、購入した物品の一つを使つて、生まれて初めて髪をダークブラウンに染めた。

スンには、宰相閣下から呼ばれているのに、こんなにのんびりしていて良いのか？と聞かれたが“いいいいんです”と答えておいた。呼ばれたからと云ってホイホイ出て行つては、「風の旅団」と私の関係が親密であることを証明することになるし、お互いの立ち位置が上下に確定する事になりかねない。

交渉前から下手にすることはないのだ。
私のスタンスとしては、遠回しながら“呼ばれたから、仕方なく来てやった”位でちょうどいい筈だ。

そして、結構大量の荷物を持って、さあ行こうとした時、アリスが云った。

「あ、ラーメン買うの、忘れたわ・・・」

31 出発しますか？（後書き）

自主規制がはいつてしまった。
ごめんなさい。

32 スパイごっこですか？

以前やって来たときと、何ら変わりのないクブスリーの町にやって来た。

二度目となるとある程度の余裕が出るもので、私は行商人や農民と思しき人々に混ざって、さっさと“一人”で門をくぐり、クブスリーの町に入った。そして、アリスから教えられていたとおり、ギルド近くにある「太陽と月亭」という中程度の宿に部屋をとった。

ここは、町の入り口に近く、冒険者だけでなく、行商人が多いと云われる宿で、そこその人気があるそうだが、まだ冬季で農閑期であるから空いている。

「部屋はありますか？できれば一番広い部屋が良いのですが？」

「あいよ！うちで一番広い部屋だと二人部屋だけど？」

「じゃあ、それで。暫くしたら連れが来るかもしれませんがから」

私は女将に三日分の宿代を支払い、背中に担いだ大量の荷物を指定された部屋に運びこむと、窓を薄く開けてとおりを観察した。今のところ、私の尾行は無し。

頭から被っていたフード付きマントを脱ぎ、階下において茶を飲みながら待機していると、暫くして、明るいベージュのフード付きマントを被ったスンとアリスがやって来て、同じように二人部屋を頼んで部屋に上がって行った。

私は、ゆっくりお茶を飲んでから、何食わぬ顔で、自室に戻るように見せかけて、スンとアリスの部屋を訪れた。

決めてあった合図をしてから部屋に入ると、スンは私がしたように表通りの気配を探り、アリスはベッドに腰掛けて探查魔術をためしていた。

「大丈夫そうね。ここを見張っている人間はいないわ」

それから私の荷物の一部をスン達の部屋に運び込み、アリスはギルドへ、スンは図書館へ向かった。

アリスは私がこの町に来ていないかを聞きに、スンはコラン伯爵について調べるために。

まあ、ある程度の偽装をしつつ敵を知ろうと、そういうことだ。この世界にネットがあれば楽なんですがね・・・

「シュン。本当に此処まで警戒する必要があるのか？」

その夜、私の部屋に集まったスンは少しだけ、懐疑的な表情で私に訪ねてきた。

「さあ、どうだろうね？」

「まさか、シュンの云ってた“スパイごっこ”とかが遣りたかっただけとか？」

「ふ、ふはははは・・・そ、そんなことないよ？」

最近、というか、この二人は非常に息が合っている。

詳しく聞いたところでは、そもそも“見た目は子供、頭脳は大人”なアリスが、スンに懐き、勝手にお姉さんの役割を担ってきたのだとか。

それは、女同志で助け合う、支え合うと云う意味で、親友になるに十分な関係だった。

ところが、私との一件以来、立場が逆転とまではいえないが、対等に近づき、更に何でも話せる関係になったのだそうだ。

それまでは、スンには男に対するトラウマが、アリスには男に対す

る免疫がないとうことで、こと男に関しては話したり、相談したりすることはなかったらしい。

実際、スンとアリスは私の知らない所で、情報交換をしているようだ。

久々にいつとくかあああ！？

男子諸君！私の短い社会人生活での教訓に『給湯室には顔を出せ』とうのがあるのだが、これはすごいよ？全く異なる部署の女子が普通にお話しているのだが、お陰で私は当時、はあ！？という情報が、異常に早く入るようになっていた。

どのくらい役立ったか？投資としてゴ○イバのチョコレート10や20、ホワイトデー（義理）のお返しくらい安いもんだったね。

あんま関係なかったか？

まあ、女性の情報網を侮ってはいかんというお話した。

それは兎も角、その翌日、二人が情報収集のために外出している間に、私は一人で寂しく“自分の部屋”にいたわけだが・・・ちゃんと別の情報をキャッチしていた。

二人が部屋を出てから1時間経った頃、“二人の部屋”に侵入者があったのだ。

窓を閉めているため、薄暗い中を、中年の男と、それよりは下といった感じの行商人風の男が入って来たのだ。

いらっしやああああイ！待ってたよオ！

「魔術によるトラップは解除したか？」

「勿論だ。と云いたい所だが、トラップは無かったぜ。実力Aクラスの魔術師と聞いていたが、まあ、迷宮探査じゃねえしな」

「余計な事はしゃべるな・・・直ぐに荷物を調べろ、他の物には手を触れるなよ」

二人はスンとアリスの荷物を、音も立てず実に丁寧に漁って中身を調べると、チイツと舌打ちして、元通りに荷物を戻していった。お見事、プロだね！

「何か、手がかりに成りそうな物はあったか？」

「いや、ねえな・・・これはなんだ？・・・変なもんばかりだな」

男が手にしたのはアリスのレースの下着だったが、その正体が解らず男は元に戻した。

結局、成果なしで二人は部屋を出て行ったが、私の方は十分な成果を上げた分けて「パソコン」と暗視機能付きの「ハンディカメラ」の映像を消してから、先に“自分の部屋”を出て、階下に降りると二人が宿を出るのを待った。

後は戦果を拡大するだけ・・・

アリスによると、魔術師なら誰でもできると云う分けではないが、魔術師は他の魔術師の魔術師使用が探知できるらしい。だからこそ、逆にアリスにはトラップを仕掛けないように頼んでおいたのだ。

そして、探査魔術を使えば、この宿の中の人員配置も解るから安心して仕事ができる。

だから、忍び込んでくるなら魔術師と考えていた。

そこで、私は、魔術を使用しない純粋な科学技術で侵入者の姿と声を捉えた分けた。

ビバ！科学技術！

まあ、監視モニターなんて直ぐ気が付かれるかもしれないが、気付かれても何なのか解らないだろうという予測はたててあったので、カメラは窓の下に置かれた古ぼけた椅子の底に、ガムテープで止めておいた。

映像が横向きになったのは、ちよつと辛かったが・・・

「で、その二人の宿は何処だったんだ？」

「聞いてびっくり、春の風花亭」

「成るほど・・・ずっと網を張っていたのね。次はどうするの？ シュン」

二人には、私の機材について教えてあったが、流石にその性能に驚いていた。

「簡単なことだよ。遣られたら遣り返す。明日にでも二人には宿を変わって貰うよ？」

「解った。しかし、このカメラとは大した物だな。動く絵を記録するとは・・・向こうでは何を記録していたんだ？」

「おじさん。それはちよつと、云えないなあ・・・ははは！」

32 スパイごっこですか？（後書き）

PV100万アクセス・ユニーク13万アクセス 突破しました。
ありがとうございます。

33 何か出ましたか？

それから三日ばかりの間、例の二人組は、日中はスンとアリスの監視を続け、夜は宿で連絡役と思しき男と接触していた。勿論、二人組の部屋と、いつも夕食を食べる宿のロビー兼食堂のテーブルには盗聴器を仕掛けた。

監視していると思いついて入っている方が、実は監視されている分けだから、二人組を此方の思い通りにコントロールするのは実に簡単だった。

しかし、盗聴の結果わかったのは、あまり芳しくない情報だった。まず、彼らの目的は“黒髪の魔術師”を探し出すため、接触する可能性の高いアリスを監視すること。この分だと、ダークさんとグスタフさんにも監視がついていそう。

次に“黒髪の魔術師”と共に姿を消したスンスール・オードランの行方と、噂通りに、本当に若返ったのか、を確認すること。

これについては、アリスと行動を共にする少女がスンスールであることを確認するため、以前からスンを見知っている者が呼び寄せられて、確認されてしまった。

「やはり、目標に関する情報は無しか・・・しかし、スンスールに関して確認が取れたのは僥倖だったな」

「ああ、けどよお。俺達は何時まで女の尻追っかけてりゃいいんだ？」

「それについては、指示が来ている。明後日までに進展が無ければ、スンスールだけでも確保して帰還するように、とな。その為の人員は既に町に入っている」

「大丈夫なのか？ 相手は実力Aクラスの魔術師とBクラスの剣士だ

ぜ？」

「問題ない。来るのは死番隊から5人だ。それに俺達二人。十分だろ」

「うひゃあ、死番隊かよ？あのお嬢ちゃん達も可哀想に」

「宰相が動いている。殿下の命令は殺すのだが、多少、傷つけようと確保できればよい」

と云う会話があったので・・・積極的に手加減は無し、で行くことに決定。

その日のうちに、二人組と町に入っていた御大層な名前の5人組には、それぞれの宿で出される食事と酒に魔獣用のお薬を混ぜて、ぐっすりお休みして貰い、スンの用意した馬車で運び出した。

これが、彼らに直接アリスの魔術を掛けたのなら、直ぐに気付かれて対処されてしまったかもしれないが、アリスが軽い幻術を掛けたのは、それぞれの宿の従業員で、その従業員は何も知らずに、遅効性の薬が入った料理や酒を“勘違いして”運んだだけだ。

お休み中の男達を、運び出す時も同じ。

「魔術をこんなふうに使うなんて、考えても見なかったわ」

「見事な手並みだが、シュンは向こうでどんな仕事をしていたのだ？」

「科学至上主義も危険だけど、魔術至上主義も危険だってことだね」

スンは見事な手並みと褒めてくれたが、アリスから魔術師の特性とかをレクチャーして貰っていたし、これは麻薬の運び屋がよく使う手だ。

全く何も知らない観光客の荷物に、麻薬を忍び込ませて運び出させ、国内で適当な理由をつけて麻薬を回収。

観光客本人に悪意が全くないので、警察や入管で不審に思われるよ

うなことはなく、万が一ばれても、捜査官が麻薬の運び屋まで糸を辿るのが極めて難しい。

早朝、まだ、太陽が顔を出す前に、私達は馬車でクブスリーの町を出て、郊外の転移魔法陣に通じる道を進んだ。いつもの丘を越えた所で脇道にそれ、人目の付かない森の傍まできてから馬車を止めると、三人とも馬車を降りてトコトコと町に向かって歩き出した。

もう、そろそろ、かなあ、と思っていたら、案の定、私のヘッドホンに声が聞こえてきた。

「死んでいるのか？」

「・・・いいえ、隊長。眠らされているだけのようです。しかし、見事なものですね。我々ではこいつらを捕らえるのに、何人犠牲になることか・・・」

「まあ、いい。そいつらは伯爵様の下へ運ぶ。いろいろ聞きたい事もあるしな」

「ですが、どうしてこいつらを馬車ごと放置したんでしょう？」

「単にじゃまだから捨てたか？或いは、俺達がいるのを知っていて、くれたのか？」

「はは、まさか？でも、これで、さっきの男が“黒髪の魔術師”で間違いないですね」

「ああ、どんな魔法なのか、まさか、髪と目の色を変えていたとは思わなかったが、その件も含めて伯爵様に報告して来い。私は引き続き監視を続ける」

それきり、会話は途絶え、あとは馬車の動き出す音がして、男の独り言が聞こえてきた。

「しかし、何でこんな面倒な縛り方を・・・」

必要もないが云い分けしておこう・・・趣味だ！

むさい男連中を縛る際、ついつい、自宅に残してきた“本さんと雑誌さん”を思い出してしまったのだ。ちなみに、彼らは相変わらず、押し入れの扉を固定しており、かれこれ、2か月近く放置プレイに興じている。

喜んでくれているかどうかは、聴いてない！というより、聴かない！！

ちょっと事情説明。

連中が“殿下”と呼ばれる人物の命令で動き、そして、その目的は、もろもろの状況を勘案して“若返り”である可能性が高い、ことが解る。

更に、それと対抗？しているのか、宰相で伯爵のコランという人物。こちらにも、微妙に物騒な連中を使っている様子。

私が、スンとアリスを監視する者達が、例の二人以外にも居るかもしれないと考えたのは、その二人が云った“宰相が動いている”という言葉。

実際にいるのかどうか解らなかったのは、例の二人と違って能動的に活動せず、身体強化をつかって遠くから監視し、仲間との連絡も基本的に念話を使っていたためだろう。

しかし、これについては、最初の二人組の監視を外した時でも、スンが“鋭い視線を感じることがある”と主張したので、まあ、間違いないだろうと踏んだ。

馬車ごと放置したのは、別口の監視者をおびき出して何者か確認するためで、当然、盗聴器を馬車に付けておいたのだ。その目的も果たしたので、私達は町まで結構な距離の散歩を楽しんだ。

それにしても、かなり厄介なことになってしまった。

連中を縛りあげて捨てたことで、クブスリーには別の、もっと危険

な者達が派遣されてくる可能性がある。潮時かな？

私は明日にでも、クブスリーを離れる決心をして宿に戻ると、髪の色を金色に染め直し、カラーコンタクトを緑からブルーに変えた。もう、私が目や髪の色を変えられることはバレているから、今更、意味があるとは思えなかったが、まあ、嫌がらせかな。

私の歳で髪の色を虐めるのは自殺行為なんだが・・・

その夜は久しぶりに「春の風花亭」に移って、スンとアリスの二人を相手に爛れた一夜を過ごし、すっきりした所で、三人で朝食を食べてから荷物をまとめて宿を出ることにした。

しかし、まあ、世の中は“予定は未定”とか“計画は計画した時から崩れるもの”とは良く云ったもので・・・

その人は、私達が朝食を取っているそのテーブルに、堂々と姿を現して私の前に立ち、にっこりと微笑んで、声を掛けてきたのだ。

「・・・お食事中、恐れ入ります。シュン・ムラカミ様、で、いらっしやいますね？」

「いいえ、人違いです？」

34 王都に行きますか？

クロード・フォン・コラン伯爵。

グランバル王国の南方に位置する広大な領地を有する王国有数の名家、コラン伯爵家の現当主。伯爵家は従来国政に消極的で、中央政界に参加する意思を見せなかったが、今代の頭首に限っては、10代で積極的に国政に参加。

その聡明かつ鋭敏な政治資質を買われ、当時の宰相クリント・フォン・ウォーカー侯爵の推挙を得て宰相補佐に就任。更にその5年後、ウォーカー侯爵の引退の際に、王に請われて宰相に就任。42歳。妻と二人の子供あり。

以上が、ここ数日の間に、スンが調べたコラン伯爵に関する情報だ。一言で云って30代後半で王国宰相になるような、ある種の化け物だが、今、私の前に立っている人物はともうそうは思えない。当たり前だ、どこからどう見ても、その人は女性だったから・・・

「はじめまして、サリー・アン・ウッズと申します」

サリーと名乗った女性は丁寧にあやづした。

さあて、これは何が始まるのかなあ・・・

そう思っていたが、礼節には礼節をもって返すのが信条であり、交渉術の一步でもある。

「これはご丁寧に。私はシュン・ムラカミと申します。失礼ですが、サリー様とは何処かでお会いしたことがございましたでしょうか？」

ワンポイントアドバイス！

質問は早い者勝ち。これで、主導権を握ることができる・・・かも

しれない。

ちなみに、私があっさり本名を名乗ったのは、ズバリ聴かれたこと、だからだが、その他にも、この女性のいで立ちにも大きな原因がある。

グレーのロングヘアーに青い瞳、背は私と同じ位で、所々に白のレースをあしらったダークグリーンのドレスは、肩に少し余裕を持たせてあるが、手首までしっかりと包み、腰の辺りから僅かに膨らんだロングスカートが上品で、恐らく30代後半の年齢にぴったりの美女だった。

そしてなにより・・・モッフモフ!!!

尻尾は見えないが、頭の上にモッフモフの耳があ・・・!!!

「サリーとお呼びください。シュン様とは初めてお目にかかります。どうか、夫にお力をお貸し頂きたいのです」

「まあ、立ったままでは何ですから、どうぞお座りください。ああ、私のことはシュンで結構です。失礼ですが、ご主人？とおっしゃいましたが、それが何方なのか？検討が・・・」

「これは、失礼いたしました。夫の名はクロードと申します」

はい、きましたあ・・・

まあ、宰相って仕事は王都を離れられないだろうから、他の誰かが来るかも？とは思っていたけど、まさかこんなに早く、しかも奥さんとはね。相手の意表を突くのも交渉術の一つではあるけどさ！宰相閣下、恐るべし！

まさか、私の性癖まで把握してんじゃないでしょうね？

でも、まだまだ、これからだよ・・・本人かどうか何て解らないし。

「もしかして・・・剣狼妃サリー・ウツズ？」

あれ？

私の傍で黙っていたスンが唐突に会話に割り込んで来た。

スンがそう問いかけると、サリーさんは顔を僅かに赤く染めて頷いた。

え？ 剣狼妃？ ってなに？

知ってる人？

「剣狼妃サリー・ウッズ。かつて、セルブエ王国との戦いの際に、たった一人で百の首を取ったと云われる女傑だ。確か、その後、一介の騎士から近衛騎士になったと聴いていたが・・・宰相殿の奥方になっておられたとは・・・」

何と云うか、スンのお陰で交渉術云々では無くなってしまった。

どうも、スンはこの剣狼妃殿にいたく尊敬の念を抱いているらしく、私が主導権を取り戻す前に、ガツツリと事情を聴いてしまった。

詳しい事情を聴くかどうかにも交渉術の・・・もう、いいかあ・・・

「夫が申しておりました。シュン様のことを調べた結果、少なくとも、今回、クブスリーにおいてになってからの行動は、実に見事で、下手な交渉をするより、腹を割った上で、真摯にお願いする方が得策だと」

あゝあ。そういう情報もさあ・・・

なんか今回、珍しくサスペンス？ 路線で走ってたのに・・・ぼろぼろ・・・

結局、スンのお陰で全ての事情を知ってしまった私たちは、サリーさんと共に王都に向かうことになってしまった。

まあ、私達には変な疑いが掛っているらしいので、仕方なく？

「スパイごっこはおしまいね？ シュン」

アリスに笑われ、今夜は、スンを虐め倒すことに決定！

いや？ 寧ろ、スンを放置してアリスだけを可愛がるか？？？

最近、アリスも感じやすくなって来たみたいだし、一気に開発を進めるのもありか？

ぐふ、ぐふ、ぐふふふ・・・

その夜、実際に何が起きたかはさておき・・・おいちゃうんだあ・・・

・
出発は明日に延ばされ、新たに馬車を（眠ったまま目を覚まさない親切な7人の旅人がくれたお金で）購入して王都までの約三日間の旅を楽しむことにした私達。

何食わぬ顔で、美女3人に囲まれてワクテカしようと思ったら・・・
あんたら、だれ？

「王国近衛騎士団第13番隊所属、小隊長サイモン・ウオード」

「同じく小隊員、キャンベル・オコーナー」

馬車の前で待ち構えていたのは、厳ついおじさんと若いお兄ちゃんの二人。

よっぽど、無視してやろうかと思ったが、そこはそれ、私は大人だから。

この二人、本当は姿を現さないとはいったそうだが、サリーさんが現れて私達と行動を共にすることにしたため、護衛として仕方なく出てきたそうなの・・・

出てこなくて良いのに・・・

そう云えば、こっちの出入り口にくるのは初めてだなあと思いつつ門をくぐると、向こうと大して変わらない道が続いている。所々に

枯れた草むらがあるが、まだ、冬季だから茶色いままだ。

しかしだ、こう云う時は普通に何か起きるもんなんだよなあ・・・イベントが。

例えば、盗賊に襲われている美女とかを見つけて助けるとか、魔獣の群れに襲われて逃げ出すとか、野営中に川の畔とかで美女の水浴びを意図せず（ハイここ重要）見てしまうと、か、神様できれば、最後の辺りで・・・

「・・・が、何にも起きん・・・」

34 王都に行きますか？（後書き）

メール下さった方、ありがとうございます。
誤字の修正はしておきました。

35 お薬止めますか？

馬車の旅一日目、青い空が赤く色付く前に、私たちは野営の準備を始めた。場所は、だだっ広い野原の真ん中。

サイモンさん曰く、森などの近くで野営すれば魔獣の襲撃を受けやすくなるうえ、接敵に気が付くのが遅れるとのこと。それ位なら、ほぼ全員が腕に覚えのある者ばかりであるし、周囲が見渡せる場所の方が良いのだそうだ。

盗賊はどうか？と尋ねると、王都周辺にある各都市から外側には盗賊が跋扈するところもあるが、王都を囲む都市から内側なら、殆ど心配はないそうだ。

もともと、各都市が王都を守る防壁の役割を担うように配置されているし、その間なら、王都の護衛騎士団の巡回経路にもなっている。

キャンベルさんは、私より若いくらいなのに、手慣れた様子で瞬く間に馬車の脇に石で釜戸を組んで、そこらの枯れ草や枯枝を集めて火を起こし、湯を沸かし始めた。

もちろん、私も手伝った。こんな野原の真ん中で、一晩火を絶やさないでおける程の可燃物の確保がどれだけ大変か！真っ暗になつてから探しに行くのは、御免こうむる。

前に、チャックさんが蠟の塊のような燃料を使っていたが、あれは非常用として取っておくべきもので、少しの苦勞で代用品が揃えられるなら、使用しないのだそうだ。

激しく同意したい。こういうところで、手間を惜しんではいけない。お湯が沸いてお茶を入れた頃に、馬車の中で待機していた女性陣を呼んで、取り敢えず一服することにした。

「問題はソーマと呼ばれるある種の薬なのです」

サリーさんは今回の事件の発端を話してくれた。

およそ1年前から王国の貴族の間で密かに出回ったその薬は、その効能の素晴らしさから、瞬く間に王都の貴族を席卷した。

当初は、酩酊状態から高揚感、幸福感を生み出し、一方で、高い強壮作用によって、その状態で異性と交われば、この世の物とも思えない程の深い快感を得られるとあって、薬の奪い合いが起きるほどだった。

しかし、当然のことながら、そんな都合の良いだけの薬など有る訳が無い。

ソーマには案の定、強い副作用、中毒性があつた。

宰相であつたコラン伯爵は、この事実にいち早く気付き、直ちに、ソーマの使用を“中止”するよう伝えた。しかし、その頃には、中毒患者と化した幾人かの貴族が、錯乱した上に、市民や家族まで殺害して狂死する事件が起きており、最早、公にできない国家の威信に拘わる事件へと発展した結果、極秘裏に製造元の探索と摘発が行われることになった。

「ですが、使用者は後を絶たず、一度、ソーマから身を引いても、あの快感が忘れられないといって、また、手を出す者が後を絶たないのです」

「しかし、そのソーマがどうして私やスンと関わってくるのですか？」

サリーさんは私の質問に対して、一度スンを見つめた後、話しを続けた。

「ソーマの副作用の一つが、実は、見た目の一時的な若返りなのです。ソーマの主成分は高濃度の魔素を、どうやっているのかは不明ですが、結晶化させ、それを粉末状にしてから服用するというものです。もつとも、一時的なもので、精々1日で元に戻るのですが、シヨウさんには、この薬の魅力がおわかりですか？」

私は頷いた。

なるほどねえ・・・高い強壮作用で一時的に若返って性交渉ができるとなれば、おじいちゃんおばあちゃんは大喜びだね。

「ですが、この一時的な若返りも、薬の作用としては燃え残った燃料に、高い濃度のお酒を振りまくような物で、薬の効果が切れたら、燃えカスしか残りません」

「そこにまた、ソーマを・・・」

「ええ。しかも、常習者は気が付かないうちに、服用していない時の見た目が、急激に年老いて行くのです。だから気が付いた時にはもう、ソーマを止めるのが難しくなる」

そうして中毒症状が悪化し、精神を病む。

このような事実を公表はできない。速やかに製造元を特定し、二度と製造できないように記録ともども抹消することも考えられた。

実際、宰相閣下は、精力的に捜査を指示し、王都でのソーマの蔓延は下火にはなったが、製造元だけは判明せず、捜査が続けられていた。

「そんな時です。セニエの二重狂騒の報告が夫の下に届けられたのは。その報告書はセニエ侯爵様からのものと、夫の独自の情報源からのものがあり、後者の方に、黒髪の魔術師のことが書かれていました」

「・・・ゲ」

「たった一人で、瞬時に三体の大魔獣を倒すという偉業を成しながら、その後は殆ど戦わず、唯一人の少女を抱いて戦場を走っていた」と

私の傍にいたスンが赤い顔をして下を向いてしまった。

あの時は、私も必死だったから・・・ポリポリ

「夫は、ソーマの問題とは別にしても、多くの人材を求めています。だからこそ、その黒髪の魔術師殿に、お味方になって頂きたいと考え、身边を調査させたのです。そして、その方が大事に抱きかかえていた少女が、スンさんであること。そして、スンさんが、何故か若返っている、という噂を得たのです」

「つまり、最初はソーマの常用者ではないかと疑われた？」

その後の調査によって解ったことは・・・

スンが若返ったのは“二重狂騒”の直前頃で、セニエ救援隊として参加、負傷してクブスリーに戻り、その後、行方をくらませるまでの約七日近く、その状態を維持していた。というものだった。

ソーマという薬の副作用としてはあり得ないことだったが、謎の魔術師がここに絡めば、話しは変わってくる。

「つまり、今度は、私がソーマの製造者ではないかと？」

「若返り・・・不老長寿の魔術は、もう、遠い昔に、王国魔術院でも不可能と判断して放棄した研究です。あなたとスンさんの噂を聞いた者達の中で、ソーマと関連付けて考え、接触を図ろうとする者は、二つ。一つは、私達。もう一つは・・・」

「実際に作っている連中ですか・・・」

だが、サリーさん達が王都に向かってるのは、私達が逮捕された

からではない。嫌疑が完全に晴れた訳でもないのに、なぜ、敵かも知れない相手の所に奥方を送り込んだりしたのだろう。確かに、例の7人は片付けて、放置したが・・・

「お解りに成りませんか？夫はソーマの撲滅のために、多くの部下を各地に派遣して情報を集めてきましたが、敵の末端の容疑者を、生きたまま一人捕まえるのに、実に、11人もの部下を失いました。それをあなたは、たった数日で7人も捕らえた・・・」

なるほど・・・私は、食いついてくる魚に、逆に食いつく魚の餌ですか？

あまり、生きが良いとは云えないと思います・・・

36 子供の相手は得意ですか？

三日後の午後、私達は王都に入った。

心配された入管手続きは、それぞれがギルドカードを提示することですんなりと終わった。

王都はクブスリーが「町」と呼ばれる理由を、見ただけで納得させてくれる程の巨大さで私達を迎えた。なんと、高い城壁が三重に王城を囲っており、最も外側の城壁に至っては、近くに寄ってしまうと、左右の端が見えなくなるほどのものだった。

私達は、その三重防壁の三つ目を超えた所で、馬車ごと大きな屋敷に入った。

「三重防壁の内側を貴族街、その外が商人街、さらに外が臣民街です」

簡単な説明だったが、城壁を超えるたびに町の様子が変わり、人の身形まで変わるのだから、実に解りやすい。

「母上しゃまあああ！」

白亜の屋敷から元気な声がしたかと思えば、小さな影が二つ飛び出してきてサリーさんに突進していった。

侍女と思われる女性達と護衛の騎士たちが数名、必死に追いかけている。

「ただいま！ケーナ、ユート。二人とも良い子にしていたかしら？」

「はい！母上しゃま！ケーナは良い子にしました！」

「僕も良い子にしていましゅた！」

噛んだね？今。噛んだよね？間違いない。

かわいいなあもう！

胸に飛び込んできた二人の子供を抱きしめるサリーさんは、スンから聴いた剣狼妃のイメージとはかけ離れた、ただ、ひたすらに優しいだけの母親だった。

そして、抱きしめられる子供達は、5歳と3歳程と思われる二人の天使達。

しかも、ケーナちゃんには可愛いふさふさのお耳と尻尾があった。

私はあまりモテタことがないのだが、何故か、動物と子供と年寄りには懐かれる。

捨て猫や子犬は、私と目が合うと“みい”とか“くうん”と鳴きながら必ず近寄ってきたし、小さな子供は必ず私の膝に蹴りを入れてきた。

お年寄りも、延々と昔話をリピートし、何処からともなく、飴玉を取り出して、私に食べさせようとするのだ。

あ、いや、あの、咽飴は結構ですから・・・て、その飴玉、今、どっから出した！？

ああうちよつと過去にトリップしてしまった。

それはそれとして、屋敷に通された私は、サリーさんから離れようとしていない二人の天使に目を奪われっぱなしだった。それが無ければ、この屋敷の凄まじいほどの豪華な調度品に、目を奪われていたかもしれないが、私は実用性のない物には興味が無い。

“暫く、ゆっくりしててください”と云われ、サリーさんは直ぐに何処かに行かなければならないようで、30畳程の応接室から出て行った。おお、絨毯に足が埋まる。

勿論、その室内には二人の天使が、お茶とクッキーのようなお菓子に齧り付いて、残っていたため、護衛騎士と侍女が二人ずつ、壁の

飾りと化していた。

二コリともしないんだこれが。

しかし、時間が経つにつれて、二人の天使は暇を持て余し始め、サリーさんを探してきよろきよろし始めたので、私の提案で、室内で迷宮探査ごっこを始めた。

結局、二人が私をお客様として遇してくれたのは僅かな時間で、直ぐに私の膝に蹴りを入れて来るようになった。ちなみに私は魔獣の役である。

迷宮探査ごっこは、子供たちが、侍女に夕食に呼ばれるまで続き、神竜の体を持つ筈の私は、誠に失礼ではあったが、客間のソファでぐったりとさせて貰った。

子供と遊んだ後は、いつも後悔はするんだが、反省はしない！しかし、なぜか、スンとアリスがとても優しく迎えてくれた。

「スン、アリス。屋敷の内外を含めて、警備の騎士が多すぎると思うわないか？」

「ああ、確かに。サイモンとキャンベルも既に警備についているようだ」

「それだけじゃないわ。何人か魔術師も見かけたわ。それに・・・」

それから暫くして、侍女の一人がお茶の代わりを持って現れ、有りがたく頂戴することにしたが、一口飲んだ途端に、白磁に金縁のカップを取り落として、スンとアリスが崩れ落ちた。私も、一瞬、意識が遠のき、目の端で、護衛の騎士とお茶を持ってきた侍女も含め、次々と崩れ落ちる姿が見えた。

すると、直ぐに扉が開き、護衛騎士の格好をした男達が入って来た。

「フン！何が“黒髪の魔術師”だ。あっさり引かなかったじゃない

か？」

「そういうな。仕掛けにどれだけ掛ったと思っている。さあ、そっちの二人を運び出すぞ。もう一人の小娘は必要ない。殺せ」

「りようかい！で、向こうの様子はどうか？」

「ガキ二人と“剣狼妃”とはいえ、女一人だ。もうそろそろ終わってんじゃないか？」

そうして、最初の男がスンに手を伸ばした瞬間に、私は爆発した。つまり、その男の手を“そっと”掴んだのだ。

ベキベキベキ・・・っぎ・・・むぐッ！・・・こきんッ！

男の右手首が碎ける音がして、私は悲鳴を上げようとする口を、後ろから押さえていた左手で逆方向に軽く捻ると、頸椎がささやかな音を立て、男から力が抜けて床に転がった。

その男が完全に床に転がる前に、私が背を向けていたもう一人の男が、短剣を抜いて背後に迫っていたが、私と、殆ど同時に起き上がっていたスンが、私の直ぐ脇をアクセルで加速しながら駆け抜けて、引き抜いた長剣をその男の喉に突き刺していた。

「あなた方は、うちのアリスの実力を甘く見過ぎです」

カハッ！カハッ！と咽を詰まらせながら倒れて行く男に、私の声は聞こえただろうか？

完全に息の根が止まったのを確認してからスンが剣を引き抜く。返り血を防ぐためだ。

「アリス！」

「もうやっているわ！・・・付いて来て！拙いわ、敷地内に侵入者ざっと20」

「タイミングからいって、敵だな」

「迎撃と殲滅は放棄。子供とサリーさんの確保と脱出を優先」

「了解！」

廊下に出た所で出会った男は咄嗟に剣を抜こうとして、スンに咽を付かれて倒れた。

あちこちに、この屋敷の使用人や護衛騎士達が倒れていたが、アリスによれば室内にいた人達と同じく、意識がないだけ、このことで無視。

廊下を走り、階段を上り、南側の端にある部屋までくると、敵と思われる男達の死体が幾つも転がっていた。赤い廊下を走りながらスンが“さすが剣狼妃だ”と呟いた。

しかし、開け放たれた扉に辿りついて、私が見た物は・・・

立ったまま三人の刺客に三本の剣で貫かれたサリーさんと、二人の子供に短剣を突き付けた二人の男だった。

私は、とても静かに、本当に静かに・・・理性の枷を取り外した・・・

37 刺客の相手は得意ですか？

アリスが異常に気が付いたのは、私が子供たちと遊び疲れて、ソファ―に座りこんでから直ぐだった。屋敷全体を覆う防御魔法に違和感を覚えたのだ。外からの侵入を防ぐ防御魔法が、二重に展開され、しかも、その内の一つは内側に向かって展開されていたのだ。これでは、内側にいる者は外に出られない。

更に、護衛騎士の中に、数名の魔術師が混ざっていた。

それ自体はおかしくは無いが、騎士として働くには、その何れもが魔素の体内保有量が、大きすぎるという事実がそこに加わると、これは、私達を閉じ込め、捕らえるための罠なのではないか？という疑念にかわる。

しかし、此処までできてしまった以上、少し様子を見ようとしていたところ、遣って来たのが、お茶のお代わりを持ってきた侍女だった。アリスが疑いを持っていたため、最初からそのお茶を飲む時は、身体強化魔法をスンとアリスは起動していた。

私には、恐らく毒物は通用しない。実際、仕掛けは毒物ではなかったらしい。

そして、二人の男がやってきてベラベラと話してくれたおかげで、状況判断が可能となった訳だが・・・少し、後悔している。

もう少し、彼らを信頼していたら、こうは成らなかったのでは？と・・・

「スンは子供を！」

叫んだ瞬間、私はサリーさんを串刺しにしている三人の男達に襲いかかっていた。

ブオオオン！・・・ブオオオン！・・・ブオオオン！

三度転移した。三度とも男達の首に人差指で触れながら・・・
脊髄の神経を丸ごと奪われた男たちは、糸の切れた人形のように、
あうあ・あ・あ？と声を上げながら倒れていき、私は、崩れ落ちる
サリーさんを抱きとめた。

「・・・ケーナ・・・ユート・・・」

か細い声を上げながら、その手は子供たちに向かって伸びていた。
私は・・・母親を失った子供の泣き声なんか聴きたくない。どんな
に懷いてくれても、母親を求める子供に、母親を与えることはでき
ないのだから。

だから・・・ 鬱進行は認めない！！！！

私はサリーさんの体の剣を抜かないまま、サリーさんの握り締めて
いた剣に左手を沿わせて切り裂くと、その血をサリーさんに飲ませ
た。そして間違いなく飲み込んだところで、アリスを呼び、麻痺の
魔術をサリーさんにかけて貰ってから剣を引き抜いて行った。

大量の血が溢れたが、直ぐに出血が止まった。

その間、スンはあっさりとアクセルで二人の魔術師を倒し、意識の
ない子供を両手に抱えていた。

「大丈夫、安定しているわ。シュンの力って、ホントに反則ね」

「よし。サリーさんは、暫く動かさない！そのベッドに寝かせて。
予定変更だ、スン、アリス、ここで迎え撃つ！」

そう宣言しなくても、二人とも、そのつもりだったのかもしれない。
ニヤリと笑った。

小さな子供を人質にとり、その母親を殺そうとする輩など、もう、生きていて何の意味がある？ そうだ・・・少しは自分達のしてきたことを、後悔しながら死んでもらおう。

その時、私も笑っていたと思う。

アリスの探知した敵の増援は20名。

真っ直ぐ、こちらに向かってくる。恐らく、事前の計画どおりなのと、アリスと同じく魔術師が探知魔術で動いている者を見分けているのだろう。

「アリス。この部屋に防御結界を。スンはアリスの護衛を」

そう叫ぶと、私は廊下に跳び出し、階段を駆け上って来た襲撃者達の前に立ち塞がった。

男たちは、どういつもこいつも、醜く、汚く、おぞましい顔をしていた。その中の一人が、舌打ちして“殺せ！”と命じると、二人の男がアクセルで私に迫った。

振りかぶった二本の剣が、私の頭と肩に叩き付けられ、そしてへし折れ、澄んだ音を廊下に響かせた。

かつての私だったら、剣筋さえ見えない斬撃だったろう。だが、スンの剣術の訓練で、私の体が、戦闘時に異常な力を発揮することが解っていた。

まず、アクセルを使った斬撃でさえ、私にはきちんと目で捉えることができた。そして、スンの斬撃さえ、素手で防ぎ、或いは、防御さえ必要としなかった。

お陰で、スンの練習台として散在打ち付けられたが、まったく痛みも感じず、当然、怪我一つすることもなく、試しにアリスの魔法攻撃にも晒して見たが、やはり無傷だった。

そして、こいつらの斬撃は、どれをとってもスンに遠く及ばない。

私は、信じられないといった表情の男達の顔に向けて、ひよいと手を振るった。

斬撃を浴びせ、折れた剣を持った男が二人、壁に“ズドオオン”と激突してオブジェのように赤い花を咲かせた。

相手もプロなのだろう、直ぐに魔術師が人壁の向こうで、ごによごによと呪文を唱え始めたので、その傍らに転移して咽を握り潰した。窒息死するまでの間に、懺悔でもして貰おう。聴いてくれる神様がいるとは思えないが。

「ば、ばかな・・・くそ！全員で行くぞ！」

リーダーの男はあつと云う間に手だれを倒されて、気が動転したのだろうか？命令に従った男達が次々と倒されていくのを茫然と眺めていた。

私は、もう、失敗しなかった。最初の男二人は、力の加減が解らず即死させてしまったが、次からは、極力、そつと力を振るった。

一番気に入っただのは発剄に似た技だった。私の場合は、手に魔力を溜めて男達の腹部に軽く叩きつけるのだが、効果は変わらないように、内臓をぐちゃぐちゃにされた激痛で悲鳴を上げてのた打ち回る。何人かの男をそうやって廊下に沈めた所で、リーダーの男が逃げ出した。

「くッ・・・化け物め！撤収する。引けッ！」

いやいやいや・・・それはないでしょ？此処まで遣っておいて。

生き残ったリーダーと部下の6人は来た道を駆けだしていたが、私は転移で追い付きながら、一人一人、丁寧に処理していった。

こういう人種は、用意周到に準備をしたうえで、確実に標的を始末

することに慣れていて、恐らく、殆ど失敗したことがないだろう。だが、逆を云えば、自分達が狩られる立場になることに慣れていない。

無様な悲鳴を上げながらのたうつ男たちに、云って遣りたいことがあった。

最後に残ったリーダーの目を潰し、何か喚きながらショートソードを振り回すところに、とどめの発砲を叩きこみながら、云ってやった。

「随分、無様な暗殺者ですね。全員、みっともない悲鳴を上げてばかりじゃないですか？少しはサリーさんを見習ったらどうです？自分が殺される姿を、子供たちに見せないように、最後まで悲鳴の一つも上げなかった。あの見事な母親を・・・」

38 お掃除は大変ですか？

最後の一人が腹部を押さえて呻き続けるのを無視して、私はその男の襟首をもって引き摺りながら元の部屋に向かった。

廊下には、何人もの暗殺者達が同じように腹部を押さえ、あるものは既に血を吐いて息絶えていたが、私の気持ちは全く晴れなかった。怒りが収まらない。

呻くりーダーの男を廊下に放置して、私はスンとアリスのいる部屋に戻った。

「おわったよう！」

努めて明るく云った私を、スンとアリスが睨みつける。

「おわったじゃあない！私は全然、すっきりしてないぞ！シュン」

「同じく。出番が全くなかったわ・・・」

「ひィ・・・！ご、ごめんなさい・・・」

怒りが収まりましたよ？恐怖で！

二人とも云いたいことは有ったようだが、今はまだ、緊急事態だからか直ぐに鉾を納めてくれた。私はサリーさんを寝かせたベッドに近づき、容態をアリスに聞いたところ“もう出血も止まっているし、傷口も塞がっている”とのことだったので安心した。

倒れたときの苦悶の表情も消えていた。

それに、サリーさんの横には二人の天使がスヤスヤと眠っていて、まるで天使に守られているようだ。

「じゃあ、いつまでも此処にいるのは、子供の情操教育上、良くないから部屋を移るよ」

と云うことで、私がサリーさんをそっと抱き上げ、子供達二人はスンとアリスが抱えて、私達のいた居間に戻ることにした。

流石に、この部屋には、死体が7つ、部屋の外には死体とその予定者数名が転がっていて、ウンウンと唸っているので落ち着かない。

じゃまな重症者を蹴り飛ばしたら“その男はまだ生きていたようだが？”とスンの云われたので“大丈夫！今死んだ”と返しながら歩いた。

二人の子持ちとはいえ、モフモフ美人を抱えていることに気が付き、漸くここにきて役得があああ・・・と、思っていたら、案外あっさり居間についてしまった。

ソファアの長椅子に、シートで包んだサリーさんを寝かせ、その傍に子供達も寝かせた。どちらが先に目を覚ましても、最初にお互いの顔を見られるように。

「さてと・・・シュン、他の人はどうするの？何なら起こせるけど？」

アリスが提案したので、暫く考えて、室内の侍女達だけ起すことにした。

護衛騎士たちは、目を覚ました途端に大騒ぎするだろうし、かといって他人の家では、お茶も飲めない。そして、居間に転がる死体とその廊下の死体も含めて、どこかに放り込んでおきたい。

少し絨毯に血が付いているが、絨毯も赤いから・・・良いだろ・・・

目を覚ました侍女達は、周りの状況に驚いて悲鳴を上げたが、事情を話して協力してもらった。但し、まだ、外には出ないこと。暗殺者達の残りが屋敷の外にいる可能性は高い。

ということ、屋敷の中で入れて貰ったお茶と、お菓子でのんびりすることにした。

「後かたづけ・・・大変だろうなあ・・・」

この後、二階の廊下と部屋は特に。誰が掃除するんだろう？とか、血液って落ちにくいって聞いたなあとか、考えていたら、アリスが不意に顔を上げて云った。

「あら、掃除夫さん達が、なんだか沢山来てくれたみたいだから、大丈夫じゃない？」

探査魔術を展開し続けていたアリスが、そこからは実況生中継をしてくれた。

人数は55名。正面の門と裏口の門から分散して屋敷の敷地に侵入。それぞれ散開しながら屋敷の扉に近づき、数名ずつのチームに分かれて突入を開始。

裏口グループが一気に二階に駆け上がり、正面グループは慎重に居間を目指している。

二階にいった人たちが驚いてるだろうなあ・・・

その後は、チームごとに一旦屋敷の中に散開して状況を確認したのか、数名を残してほぼ全員が居間を包囲。

突入のタイミングを図っているようだったので、侍女さんに扉を開けて貰った。

なだれ込む男達。お茶のカップを手に、幾つもの剣を喉元に突き付けられる私達。

その傍で眠るサリーさんと子供達。

「お掃除、ご苦勞様です。あ、あと、隣の部屋にゴミが纏めてあり

ますからヨロシク」

それからは予想通り、“蜂の巣を突つついた状態”が未だまし、と思える状態になり、屋敷の彼方此方で、目を覚ました侍女さんの悲鳴が響き、目を覚ました護衛騎士と救出に來た正体不明の男達の間で、怒号が飛び交った。

サリーさんと子供達は、直ぐに何処かに連れていかれたが、アリスが探査魔法で位置を確認して安全を確かめていた。

折角、いぬ耳モフモフ美人と、その将来楽しみな子供達の寝顔を、存分に堪能していたのに、そこは残念に思うところだった。

ところで私は、かつて何故だかトラブルの処理ばかりを担当させられて、随分酷い目にあつたことがあるのだが、この手のトラブルが全くの他人ごとの場合、傍らでそれを見るのは実に愉快であることが解った。

おのれ、元上司！

これだけの騒ぎになりながら、死傷者37人は全て暗殺者。

ここにサリーさんをカウントするかどうかは微妙だが、次第に、救出部隊の男達にも状況が飲み込めて來たらしく、次々に報告に來た男達の話しを聞く度に、救出部隊のリーダーらしき男の顔が引きつっていった。

剣狼妃サリーさんの倒した数名を除き、約30名の暗殺者を、たった三人で迎撃して全滅させた事が解つてきたのだから・・・この居間に残って、私達を警戒している屈強な5人の男達では、まるで牽制にならないことが解つたのか、人数が一気に三倍に増えて15人になった。

それでも足りてないけどね。全然。

「あ、お茶のおかわりください！」

「うむ。私も頼む」

「じゃあわたしもね」

一々、ビク付かないでください。

まあ、スンは剣を取られたし、アリスは杖を。

私はスンから借りっぱなしのショートソードを取り上げられたが、大多数の暗殺者が素手で殺されている事ぐらい、気が付いているだろうから、本当なら縄を打ちたいところだろう。しかし、それをしようとはしなかった。

もし、しようとしたら、その時は……スンは亀甲縛りで！ぜひ！

39 ”おち”はどこですか？

クロード・フォン・コラン伯爵の別邸で起きた一連の事件は、完全に隠蔽されることになった。一国の宰相の家族が複数の暗殺者に襲われた、という事実だけで、関係無いのに隣国の仕業だと主張して戦争を始めようとする阿呆がいるそうだ。それに、それだけで国の威信に傷が付く。

私達がコラン伯爵（宰相閣下）に直接会ったのは、事件の日の翌日だった。

実際には、深夜に帰宅したらしいのだが、私達は、さっさと眠っていたので起きなかったらしい。朝食の席で、昨日は見なかった執事長と名乗るお爺さんに説明され、丁重に謝罪とお礼の言葉を頂いた。そして、その日の午後・・・

「今回の件、こちらから招待しておきながら、詫びのしようも無い」

白髪混じりのダンディを地で行く二枚目のおじさんが、深々と頭を下げた。

彼が宰相閣下だそうで、国の現状を説明され、事件の隠蔽に協力してほしいと云われた。

要は、黙っている、と云うことだ。

私としても自分の存在やスンのこともあり、表ざたになるのは避けたかったので、快く協力する旨を伝えた。

一国の宰相が頭を下げるのが珍しいのか、スンやアリスは恐縮していたが、私の経験から云えば、優秀な人ほど必要な時は、きっちり頭を下げ謝罪することを厭わないものだ。

それをする事で、後顧の憂いが格段に減る。

それが解らない阿呆は、結局、いつまでも問題を引き摺り続け、足を引っ張られるのだ。

此处で頭を下げるのは、ある意味では、“この件はこれで終わりだ”というメッセージでもある。

次に、今回の原因だが・・・

まず、この館はコラン伯爵の別邸であり、本来は宰相の公邸で生活しているのだが、妻のサリーさんが獣人族であることから政治的な軋轢があり、やむなく、サリーさんと子供達は別邸で生活をしていった。

今回、私達を招くにあたって、公邸では目立ちすぎることもあって、別邸に案内させたが、別邸の警備を担当していた護衛騎士に3名の内通者が潜り込んでいた。

私達が最初に倒した男達だった。

刺客の全員が死亡したので詳細は不明だが、もともと宰相の家族を狙った襲撃計画が存在し、そこに私達という獲物まで加わったことで、急遽、計画の一部を変更して同時に拉致することになったらしい。

三人の内通者は、事前に防御魔法陣の展開システムの一部を書き換えて魔術師を引き入れ、任意の場所に魔法陣で昏睡の魔術を仕掛けて、時を待ち、更に、数名の魔術師を護衛騎士に偽装して潜り込ませて計画の実行に移ったらしい。

「実際、あの方が、ここまで愚かなことを為さるとは、想像も・・・」

宰相閣下は頭を抱えた。

恐らく、“あの方”とやらは、前に二人組の一方が云っていた“殿

下”なのだろう。

殿下の敬称は、王族にしか使われないのだから、頭を抱えるのも解る。

そして、この問題の解決がさらに難しくなってしまったことも。

だが、私は素知らぬ顔で尋ねた。

「捕まえるのは拙いですか？」

「拙いな・・・最悪の場合、隣国との戦争にも成りかねない」

宰相が“あの方”という言葉を使ったときから“このおっさん、巻き込む積り、満々だな？”と思っていたが、巻き込まれたうえに、使い捨てならまだしも、うまく片づいた後で、口封じに命を狙われてはたまらないから、“あの方”ってだれ？とは聞かなかった。まして、隣国との戦争ってなによ？

「そこで、私個人として、あなた方に依頼をしたい」

「ギルドをとおした依頼なら」

私は、すかさず釘を刺した。

例え報酬が良くても、ギルドを通さない依頼は後に何の証拠も残らないし、後始末も楽だ。

そんな簡単に始末されるつもりは無いけどね。

「無論。報酬も十分に用意しよう」

宰相閣下は全く表情も変えず即答したが、彼の左の眉がほんの一瞬だけ、ピクリとしたのを、私は見逃したりはしなかった。

やはり、この人は良くも悪くも宰相なのだ、ある意味感心したが。

依頼内容は、表向きは、交易商人の護衛。

但し、報酬は金貨100枚と破格。（経費別）

目的地は・・・マッカーシー領、ケイネース・マッカーシー・グラ
ンバル、先代国王の弟にして現国王の伯父、マッカーシー大公の所
領である。

王族は予想していたが、まさか大公殿下とは思わなかった。

スンやアリスもかなりの大物を予想していたはずだが、流石に此処
までとは思っていなかったようで、幾分、青ざめた様子だった。

宰相閣下の説明によると、現国王が即位した際、ケイネースは大公
の位を授かり、王族直轄領の一つをその所領として得た。

その性格は・・・まあ、弟だからという理由だけで国王に成れなか
った人物の、典型的なひがみ体質を想像すれば良いらしい。

宰相閣下はそこまではつきり云わなかったが。

ケイネースが大公となり、所領に引き籠っただけなら、それで良か
ったのかもしれないが、もともと兄の国王より賢かったのが災いし
て、所領は繁栄した。

但し、主に奴隷売買によって・・・

領主が進んで奴隷貿易をするのだから非常に儲かり、その金で、騎
士団を勝手に組織し、領内では、まるで一国の王のように振る舞い
始めた。

そもそも、奴隷の出所が不明で、どこから連れてきているのか解ら
ない。

他の貴族の支配する領地から誘拐してきている、という噂が大勢を
締めたが証拠はなく、マッカーシー領で正式な奴隷契約が結ばれて
いるために、だれも口出しできない。

また、国王も叔父であることから、あまり強く出られない。

そのような状態で、ずるずると問題を先延ばししてきたのだ。

「だが、今回はやり過ぎだ。下手をすれば王国の浮沈に関わる」

「あの・・・まさか、殺してこいつて云いませんよね？」

「云ったら、了承してくれるかね」

「いいえ。ですが、結局のところ、私達は何をすればいいんです？」

「大公殿下ご本人には手が出せない。だから、諸君には殿下の手足となって動く組織を壊滅させて貰いたいのだ。それさえできれば後は、私が何とかする」

あああ・・・落ちが無い・・・

40 会ってみますか？

コラン伯爵邸の襲撃事件後、宰相閣下との話し合いが終わり、それでは行きますか？とは成らなかった。マッカーシー領に向かう商隊を不自然に成らない程度に、偽装しなければならぬからだ。

しかし、生憎と、今の時期は交易があまり盛んでないため、宰相の配下でも商隊をでっちあげるのに一月近く掛るということだった。

ならば今のうちに、自宅に一旦帰ろうと思ったのだが、そこに邪魔が入った。

私の存在は、コラン伯爵邸の事件との関連があるため、極秘であったにも拘わらず、どうしても極秘にできない人物がいる。国王だ。

この国王が、宰相に是非にもあって見たいとの要望をだされ、断りきれないままに謁見の予定が組まれてしまった。

無論、極秘にはあるが。

「えええ……めんどいいい」

この時ばかりは、女子高生レベルの反応をしても許されるだろう。それに、こういう反応は、交渉術に長けているとはいえ、宰相閣下にも初めての経験だろうから、どういう対応を見せるか今後の参考にしたい。

私なら……精神年齢のレベルを落とせば、いける、のだが……

「申し訳ない、シュン殿。陛下におかれては“どうしても”とのご要望なのだ」

「王宮まで行くんですかあゝ？」

なるほど、華麗なスルースキルをお持ちで……私一人がアホの子

みたいじゃん！

隣でスンとアリスが固まってるし・・・

それを別にしても、また本当に面倒なことになった。

ご機嫌を損ねたら唯では済まないし、気に入られても困るのだ。

私の生まれ育った世界は民主主義国家だった。

これに大きな不満がある分けではないから、今更、君主制国家に戻りたい、戻したい、とも思わないが、単純に民主国家と君主制国家のどちらが優れているか？という問題に対しては、民主国家が最も優れている、と即答することに躊躇いを覚えてしまうのだ。

歴史をみれば分かる通り、民主国家は君主制国家を打倒して生まれたと云ってよいと思うが、出来た民主国家は、本当に君主制国家より素晴らしいものだったのだろうか？

ああ、いや。確かに素晴らしいものなのだ。

そう思うのだが、元の世界の状況をみるとね・・・

結局、民主制は“君主制よりはまし”程度の違いしかないのではないのか？そんなふうに思えてくる。いかなあ、とは思うのだ。

それは、現在の社会を良くしようとする努力の放棄であり、逃避であるからだ。

まあ、少なくとも、呼び付けられてイヤと云えない社会体制よりは良いかもしれない。

と云う訳で・・・

国王との謁見は、本来、大変な栄誉だから、普通は大喜びするものらしいが、私にとっては面倒くさいとしか思えない。

服装から礼儀作法から、これから覚えなければならぬ、かもしれないのだ。

礼儀作法をないがしろにしてはならないぞ！

もともと、我が国では相手に敵意のないことを示すために発達したと云われているくらいだから、礼儀作法を誤れば、即刻、首が飛ぶことだってあり得るのだ。

現在では首が物理的に飛ぶことはないが、社会的には十分あり得るし、それが此方側ならマヂで物理的に飛びかねない。

そして、もう、分かって貰えると思うが、この世界での礼儀作法について、殆ど知識のない今の私には、知らないうちに、葬式に白ネクタイで参加してしまうような、そんなマネをやらかす恐れだってあるのだ。

それは社会人としてのプライドが・・・！
あ、無職だけど・・・すみません。

そういう訳で、謁見のことを伝えられた私が、まだ、回避モードにあつて、自閉モードではないのは、寧ろ、褒めて欲しいところなのだが、隣に座るスンやアリスは褒めてくれそうにない。

そして更に、私の心配をよそに、宰相閣下の策略第一段が発動する。

「シュン様、陛下は本来とても気の安い方ですから。それに、夫の手引きで、王宮の中庭で偶然に、という段取りです。そう、構えることもないのでは？」

この宰相の嫌な所は、やはり、私以上に交渉術に長けているところだろう。

きっちり、サリーさんという援軍を連れてきていたのだ。

サリーさんは襲撃事件の後、直ちに子供達とともに嚴重な警護のもと宰相公邸に移されて療養していた筈だが、まあ、衰弱が激しいとはいえ、怪我どころか傷口さえ無い状態なので、三日後にはベッド

から起きあがっていたらしい。

だが、本人にも、魔術でも助からない致命傷だったはずの自分が、なぜ助かったのかは解っていないようで、そのことは、宰相閣下にもしつこく聞かれたが、黙秘した。

まあ、仕方が無いと思う。全く無傷なのに衰弱し、ドレスは穴だらけ、しかも大量の血が足元まで濡らしていたのだから・・・

今日は、そのお礼も兼ねて、と云う名目があって、わざわざ私達が逗留している事件のあった別邸までやって来たらしいのだが、お礼になってませんよ、サリーさん？

それでも、此処までなら、まだ、自閉モードで部屋の隅に体位座りするという、拒絶の手段も使えたのかもしれない。が、援軍はそれだけではなかったのだ。

「おにいちゃまは、王様に合いに行くの？すごい！」

お・お・おにいちゃま・・・？

ハッ！やめて！そんなキラキラした澄んだ瞳で、汚れた私をみないで！

この、くそ宰相が！モフモフいぬ耳のケーナちゃんまで使いやがって・・・でも、私は断固として拒・・・

「しゅごい？」

たわばあ！

弟のユート君がソファアをヨジヨジと登って、わたしの横に立ち、ちっちゃな手で、いい子、いい子してくれた瞬間、私はやむなく、謁見を了承してしまった。

スンとアリスがニコニコして此方を見ている。なにかな？その笑顔

は？

おのれえ！

では、条件として・・・“迷宮探査ごっこ”に、問答無用で全員参加じゃあ！！！！

大喜びしたのは子供達。汗をダラダラ流しながら、キャツキャと逃げるケーナちゃんを追いまわす宰相の傍で、ユート君に膝をゲシゲシ蹴られながら、仁王立ちする私がいた。

幼児の無限の体力としつこさに、末永く苦しむがよいわ！
わははははは・・・

41 ”まぢ”ですか？

この世界で、国王に会うと云うのはなかなか難しい。

一国の大使であっても、謁見を申し込んでから1カ月近く待たされることも珍しくは無いそうだ。

理由はいろいろ。公式には、公務が立て込んでいる、警備上の都合などだが、実際には、そう簡単に謁見を許しては、国王が相手に軽んじられるとか、会いたくないとか、もある。

一方で、国王が会いたいといえば、逆に速やかに段取りが組まれる。国王の要望が速やかに達成されない方が、権威に傷が付くからだ。勿論、そのために謁見する相手の人物調査は精密を求められるのだが、私の場合は宰相の紹介があり、また、あくまで非公式であるから、私が謁見を了承してから僅か二日で実際に登城することになった。

私はその間に最低限の礼儀作法をサリーさんに教わり、スンとアリスには国王の評判を王都で集めて貰った。なんか、普通の人っぽいので、あまり意味はなかった。

服装については、民族衣装を着ているということで、ジープンにスニーカー、グレーのシャツに黒のロングコート。

これは社会人としてどうかあ？と思うが、無い物はない。買う？寸法と時間がない。

礼儀作法については、特に奇妙なものではなかった。

最初に5メートル程離れて片膝を付き、頭を垂れて待つ、国王からの言葉があつてから通常のご挨拶（ここは臨機応変に）、面を上げよとか立ちなさいとかの言葉が無い限り、顔を上げたり、立ち上がったりしては駄目。

ん？専制君主に民主主義国で育った私が、膝を屈するのか？
歴史的には、それを忌避して外交関係に軋轢を生じさせた無能な外交官はいるが、最初から戦略としている場合を除いて、私は相手の礼儀に合わせただけで、自国の権威がどうこうとは思わない。

そして、民主主義絶対な人には納得できないかもしれないが、国民が国王の権威を必要とし、崇めてもいるのなら、そんな状況で、国王の権威に傷を付けるような行為は、その国の国民そのものをバカにし、見下している行為になるのではないか？と思うのだ。

だから、どんなにバカで阿呆な総理大臣であろうと、私は国民の代表であるという権威に対して、頭を下げることを厭わない。

昔、就職したての頃、尊敬する先輩によく云われた言葉を、別の意味で思い出す。

“此処には沢山人が来る。そしてお前に頭を下げるだろうけど、勘違いするなよ？彼らはお前の座っている椅子に頭を下げているだけだ”だったな。

「ほう・・・その方が“黒髪の魔術師”か？黒髪には見えんがな・・・」

このセリフで始まった謁見は、予定通り中庭で行われた。

広い中庭は、所謂、西洋式で、バラに似た棘のある植物が背の高い迷路を構成しており、その中心部にあるベンチとテーブルは、確かに密会には最適な場所と云えた。

ちなみに、私は現在金髪である。

此方側に来た時は、最初は茶髪、クブスリーの町を出るときは金髪に染めていた。

その後は、通過儀礼を経て、碎けた会話になった。

フィリップ・オベローラン・グランバル。グランバル王国国王。

180センチの身長と堂々とした体躯、煌びやかと云うより、重そうな衣装に身を包み、腰には剣を差している。50過ぎの筈だが、若々しさもあり、それでいて王としての貫録もある。誰もが理想とする昼寝する獅子的な存在感。

平時においては民を慈しみ、戦時においては獅子となる。そんな雰囲気だ。

話題の中心はセニエの“二重狂騒”の際のことだったので、在りのままに受け答えたが、私の能力やスンの“若返り”については聞かれなかったので話さなかった。

そして、セニエ侯爵について意見を求められたが、私は直接会っていないし、そもそも、下位の者が上位の者について、さらに上位の者と話すのは自らの品位を下げることになるので、分からないと答えた。

総じて、さぞかし詰まらない謁見だっただろう。

お茶も出ないし・・・

「素手で凶王を倒した“黒髪の魔術師”よ。きっと、また、遊びに来るがよい」

こうして、国王との謁見は無事に終了した。

「陛下は、シュン殿を気に入られたようだ。分かってはいたが、シュン殿が自らを売り込まなかったのが良かったか・・・？」

「・・・」

翌日、こちらでの用が片づいたので、そろそろお暇しようと荷物を

整理していた所に、宰相がやって来た。今日は一人らしい。残念だ。だが、昨日の謁見の際よりも、幾分緊張がみられて、何事かが起きたのかと、ちょっと身構えてしまった。

まあ、昨日は、階段を上り下りする際に、たまに腰に手を当てて痛みを堪えていたようなので、それどころではなかったのかもしれないが・・・ククク！

「シュン殿・・・」

「・・・？」

私に、呼び掛ける宰相だったが、云いよどんでいる。何があったのか？

すると、懷から銀の鞘に包まれたショートソードを取り出し、私に差し出した。

そして、室内を見渡し、信頼できる部下や家人しかいないことを確認すると、その短剣を抜くように云った。

もしかして下賜品とか？

スンやアリスも何事かと集まって来たが、その剣は立派ではあるが、取り立てて豪華なものには見えなかった。引き抜いた刀身も名工の作であることは間違いなく、美しい剣ではあったが、装飾は控えめで、どちらかと云えば実用品のように見られた。

「魔力を通して見てくだされ」

宰相に云われて、握った柄から魔力を通して見ると、刀身が薄く光りを帯び、柄の近くに何かの紋章と文字が浮かび上がった。

もしかして魔剣？異世界ファンタジーきたあああ・・・と思ったのだが。

「陛下からのお言葉だ。“ 暫しの間、剣を使わす。必ず、自ら持ち帰るように” だ」

げ、返すの？と少し残念に思ったが、それらを見ていた護衛騎士や侍女、スンやアリスまでが、驚愕の表情で固まり、そして慌てて膝を折って頭を垂れた。へ！？

「そこに描かれている紋章は、獅子と交差する二本の剣。グランバル王家の紋章だ。書かれている文言は“ 王国の剣” …… それを持つ者は、国王以外に膝を屈する必要は無く、国王を代理する」

「・・・マジですか？」

「ああ、“ まぢ” なのだ」

42 やっぱ我が家が最高ですか？

王都から三日かけて自宅に戻った私達は、さっそく、大手の宝石店に向かった。

支度金として受け取った金貨10枚は、一部を王都で宝石に変え、それを此方に持ち込んで換金することにしたのだ。

理由は簡単。此方と向こうとの金の価値が10倍近いため、金貨を此方で換金しても大した金額にはならない。金の流通量が違うからだ。

買い取ったのはダイヤやルビーなどだが、正直、それぞれの価値が解らないので、スンとアリスに適当に買ってきてくれと頼んだ。

結局、宝石は全部で1500万円になった。

金貨の価値から考えると、かなりの貿易黒字だが、彼方此方の店で少しずつ換金したし、殆ど即金で頼んだので、足元を見られた筈だ。

本当なら2000万はいったかもしれない。

次に購入したのは発電機と250ccのオフロードバイク（免許なし）と燃料、電池とパソコンとその周辺機器に、無線式カメラと盗聴器多数。もしもに備えてソーラーバッテリー。その他もろもろ、結構な金額を一度に使った。

その他には、馬車の乗り心地を良くするため、スプリング式のサスペンション部品とプラスチック製の分厚い透明板（窓用）

私の人生で此処までの買い物はない。

スンはバイクを気に入り、最初はスクーターで神魔獣の間を走り回っていたが、その内、飽きてしまい、オフロードバイクに変わった。

どうも、外を走りたくてウズウズしているようだが、深奥の迷宮で目立ちたくないで、アリスに頼んで、神魔獣の間をスキップして直接、クブスリー郊外の転移魔法陣に出られるように魔法陣を設置してもらった。

それでも、一瞬は“神魔獣の間”と“決断の部屋”を経由しているらしい。

そのため、膨大な魔力を消費するので、私の部屋から直接そこまで転移する時は、私が付き合うしかない。

私の方は、馬車の改造に日曜日のおとうさん状態で、せっせと改造を施した。

バイクの持ち込みにしても、何にしても、身体強化魔術を使えば力仕事は簡単で、あっさり持ち込めた。次は車を持ち込みたいが、まあ、あまり贅沢はよくないだろうと思う。

というか、無理だし。

その他には・・・もちろん、夜も頑張りましたよ？

旅の間は、兎に角、周りに気を使わなければならなかったし、コラン伯爵邸ではいろんな意味で汚れたシーツとか、侍女さんに洗濯して貰うことに引け目を感じて、かなりおとなしくしていた。

まあ、スンとアリスの下着について、侍女さんの間で話題になっていたそうだが・・・

その反動で、私は野獣化しやすくなっていたため、一晚に二人を相手にしても、全く辛くなかったが、アリスにはもっと優しくしてほしいとの要望を受けて深く反省した。

自分本位のエッチはいかん！ということだ。

二人に対しては、全くタイプが違うから、飽きるなんてことは一切なかった。

スンは私より大きく、細身なのに肉感的で非常に抱き心地よく、アリスは私の腕の中にすっぽりと収まる感じがたまらない。

その違いはお風呂に入ると良く分かる。
最近ようやく、アリスも一緒にお風呂に入ってくれるようになったのだ。

それでも、二人とも初々しさを失わず、ちょっとした時に、スカートを捲ったり、お尻を触ったりすると、あ、だめ！と、真っ赤になって、小さな声で私を叱る。

それがたまらなく可愛らしくて、私はつい、抱きしめてキスをしたりしてしまうのだが、二人とも困った顔をしながら応じてくれるのだ。

あああ、幸せ・・・

「ところで、シュン。今回の依頼は今のところシュンの単独受注なのだが“風の旅団”としてしてはどうするのだ？私やアリスは風の旅団のメンバーだから、できればダークとグスタフの了解を取っておきたいのだが・・・」

「あ、そうだね・・・って、チャックさんはいいの？」

完全に忘れ去られて、不憫すぎるチャックさんのことは置いて、仲間と連絡を取りたいという二人の気持ちは分かるので、みんなでクブスリーの町に出て、ギルド経由でセニエのギルドに手紙を出しておいた。

詳しい事情は記載せず、日にちと場所だけ決めて、次に、王都に行く前に会って話しをすることにしたのだ。

宰相との約束の日時までは、まだ、大分余裕があるが、打ち合わせも必要だし、直前に別邸に行くという訳にもいかない。連絡さえとれたら、転移魔術で1日で呼び寄せることもできるのに、冒険者は

基本的に住所不定なので、ギルド経由で手紙を出すしかない。

結局、次に私達がクブスリーに赴く時にギルドに寄り、返信の手紙を受け取るか、直接ダークさん達が来ているか、という状態になる。

ここまでの準備が整うと、やる事が無くなってしまったので魔法の稽古をすることにした。

前にコラン伯爵邸を襲撃した連中に使った技は、一見、発劄のように見えるが、実は、ある程度の科学的な根拠に基づいてイメージしている。反則気味だし、普通できないけどね。

それは第二次世界大戦ごろに開発された粘着榴弾だ。

戦車の装甲を破壊せず、衝撃波を車内に叩きこみ乗員だけを死傷させる砲弾なので、効果だけみると、発劄や“とおし”と呼ばれる技によく似ている。

それが人の身で理論的に可能なのか？は別として、魔素でやってみたら出来てしまった。

だが、その技では、もっと大勢を相手にしたら、時間がかかり過ぎるので、もっと大技を修得したかったのだ。

使いたいって訳じゃないよ？

使えたら、結構、脅しに使えるからだよ。

・・・でも、ホントはちょっとやってみたい・・・ちょっとだけね。

アリスに相談したところ、大勢を相手にするなら基本は、火属性の魔術だろうとところで協力してくれたのだが、アリスの良く使う“ファイヤーストーム”とかは、個人で使える攻撃魔術としては、最大級のもで、それ以上の上級魔術は数人がかりで発動させるものらしい。

上級魔法は、複数の魔術師を配置するのが前提なので、個人で使用する術式がない。

「シユンは、体内魔素は十分だから、上級クラスの術が使えない訳ではないんだけど。それを使える攻撃魔術が無いのよね・・・」

「それじゃあ、こんなのどお？」

私は、スンとアリスを連れて、クブスリー近くの荒れ地に来ていた。そこで、私の考えた、現代兵器の理論をイメージした魔法を、“軽く” 荒野に向けて放って見たのだが・・・

ピッ！・・・ちゅどどどどおおおおおんん！！！！

「・・・これは、あれね・・・取り敢えず、さっさと逃げましょう？」

「・・・うん・・・なんか・・・ごめん・・・」

43 待ち人は来ましたか？

約束の日が近づき、私達はクブスリーの町にやって来た。

6人乗りの馬車に荷物を満載したうえ、馬車の後ろにバイクを器具で固定して牽引していたため、ゆっくりだったが、私の改造した馬車は揺れも少なく、実に快適だった。

時々、スンがバイクに乗りたがって困ったが、“ダメ”というとき少し拗ねたような顔をするので・・・萌えた。すんげえかわいいの！

町に入り、取り敢えずギルドに直行して、ダークさんやグスタフさんからの伝言がないか聞いたところ、いつもの宿で既に待っていることが分かり、急いで「春の風花亭」へと向かった。

この宿も、殆ど「風の旅団」の定宿と化してきた感があるが、いつもと変わらず丁寧な接客とおいしい食事はホッとさせてくれる。

「おう！久しぶりだなあ、元気にしてたか？がははは・・・」

「お久しぶりですね。シュン」

「ちーっす！」

約2か月ぶりの再会は、宿の食堂だった。

食堂というよりはこじやれたレストランで、場違いな“がはは笑い”と、私の肩をバシバシ叩く音が響いた。いたいたいですって！

三者三様の挨拶のあと、お互いのこれまでの経緯を話したところ、マッカーシー領への護衛依頼は“風の旅団”として受けることに決まった。

「まあ、ロイの奴の頼みを断れなかった俺達にも責任があるかならなあ」

「そうですね」

「それよりさあ、いつそシユンが風の旅団に入ればいんじゃない？」

これにはスンもアリスも同意してくれた。

まあ、この時点で、スンだけでなくアリスも「私の女」になったことがバレタました。

そりゃそうでしょ・・・三人で一部屋しか取って無いし！

が、私の立場が今後どうなるか分からないので保留ということになり、現状は臨時メンバーということにした。

そして、翌日、ギルドで臨時メンバーの登録をしていたとき、ねこ耳受付嬢に指摘されたのは、私が登録後、全く依頼を受けていないと云う事実。

このままでは、規定の3カ月を過ぎてしまい、登録が抹消される可能性がある。

マッカーシー領へ商隊護衛という公式の依頼は、王都のギルドで受ける事に成っているため、ここには依頼書がないのだ。

「何か依頼を受けて頂かなくては・・・」

このねこ耳受付嬢は、私が“黒髪の魔術師”だということを知っているため、申し訳なさそうに規則を説明した。そして、何か簡単な依頼がないものかと見て行くうちに、ダークさんが見つけたのが一枚の依頼書。

「おめえ達はしらねえだろうけど、この町の郊外で、何日前にでつけえ爆発があったらしくてよ。神魔獣クラスの大魔獣でも出たんじゃねえかってことで・・・ん？なんだ？」

スンとアリスが私の方を何とも云えない顔でチラ見していた。あ、穴があったら入りたい・・・無ければ掘って埋まりたい。

あれ、穴はあるのか？

「それやったのシュンなのよ。ちょっと、魔術の練習してるときにね」

原因と結果が分かかっていても調査依頼を受ける以上は、行って最低限の調査はしなければならぬので、翌朝、6人で郊外に向かって町を出て行った。

どんな仕事でも、きっちりやるのが大人ですから。

ちなみに、私以外の5人は野次馬だ。帰れえ〜！

「最大直径150メートル、最少直径50メートル、最大深度6メートル、のティアドロップ型の爆発痕。正直なところ、魔術でこれをやったなら上級魔術の中でも最大の戦術級魔術ですが・・・これで“ちょっと”ですか・・・」

「いったい、そりゃあ、どんな魔術なんだ？」

「名前とかは？あんの？」

あ、穴があったら・・・結局、原因そのものは不明と云うことにした。

あの攻撃魔術は私の五本の指から、所謂、ファイヤーボールをそれぞれ打ち出し、掌上で故意に指向性を持たせて爆発させることで、魔素を爆縮し、純粹な高エネルギーの塊にして打ち出す、要するに、ある種のレーザーなのだが、出力が大き過ぎた。

でも、名前は決めた。その名も“ディープインパクト”てヘッ☆

依頼の内容は、現場の確認と周囲の探索だったので、クレーターの中にも入ってみたが、案の定、クレーターの底の中心部は、超高温でガラス状に溶けていた。

その割れ目から僅かに水が湧いていて、小さな火山湖みたいになっ

ていたが、水深は30センチほどで、直径3メートルといったころだった。

「水が湧いているのは発見ね。この辺りは厚い岩盤のせいで、水が出にくいんだけど、シュンの魔術の威力で岩盤を割ったみたいだわ」

「うむ。もしかしたら、この辺りで農業ができるかもしれん」

「ですが、水を求めて魔獣も出やすくなりますよ?」

ワイワイと調査をしていると、クブスリーの方角から武装した三騎の騎馬が向かってくるのが見えた。全員がおそろいの軽装鎧を身に付け、槍を担いでいる。

近くまで寄ってくると速度を落として、並み足で近づいてきて、漸く、その中にサイモンさんとキャンベルさんが居ることに気が付いた。

二人は、コラン伯爵邸の襲撃事件の際、一時別邸の警護に付いたものの、そもそも近衛騎士であつたため、一旦、王宮に戻り、コラン伯爵に事の顛末を伝えに向かつていた。

襲撃事件を知ったのは二人が、急に動きのあつた敵性組織の摘発に出向いた後で、それも、内偵していたアジトは、もぬけの殻、後で判明した所によれば、そのアジトを出入りしていた者のほぼ全員が、襲撃に参加していたらしい。

しかし、最後の一人はだれだろうか?初めて見る顔だ。

二人より前をやってくるところを見ると、偉い人かもしれないが、サイモンさんは無表情だし、キャンベルさんは渋い顔をしている。

「黒髪の魔術師とかいう、大層な名前の魔術師は貴様か?」

私をのっけから見下している。

聞けば、この「女性」は、第13番隊の隊長様らしいのだが、宰相がソーマ事件の解決にあたって、冒険者を雇ったことが気に入らないらしく、単身、王都を出て、私の顔をしっている二人をお供に、クブスリーまでやってきたのだそうだ。

「魔術師、私と勝負しろ。いったいどれ程の腕かは知らんが、閣下に判断の間違いを正して頂くには、それが手っ取り早い」

クレーターの底で、“大体、これ位の腕ですよ”とは、云わなかった。

44 勝負しますか？

その女性は、兎に角、大きな人だった。

ダークさんには及ばないが、190センチ近くあるのではないだろうか？それでいて全体のバランスは取れているようで、プロポーションは悪くない。

腰の位置が私の胸下の辺りにあり、軽装鎧の胸は特注なのか、盛大に盛り上がっている。

その人が馬を降りた瞬間に、逆に思わず見上げてしまった。

「ええ・・・はじめまして、シュン・ムラカミと申します」

「貴様の名前など、どうでも良い。どうせ、直ぐに忘れる」

キャンベルさんがやってきて、事情を説明してくれた。

本来、隊長さんは“剣狼妃”と肩を並べる程の剣士なのだが、サリィさんが、6年前にコラン伯爵に請われて結婚、退団した結果、腕を持て余しているのだそうだ。

それまで、騎士団内部でこの女性と正面から打ち合うことができるのは、サリィさんだけで、他の男性騎士で相手ができるのは、団長か副団長くらいだったとか。

赤毛のショートヘヤーに精悍な顔立ち。実は結構な美人なのだが、その目が全てを台無しにしている感がある。

同じ剣士でも、スンのそれとは異なり、恐らく、圧倒的な剛の剣を使うのだろう。むき出しの発達した腕の筋肉が、日ごろの鍛錬の成果を物語っている。

キャンベルさん曰く“できれば、戦いを避けて貰いたい。我々では立场上止められないが、シュン殿に怪我をされては閣下に申し訳が

立たない。できれば、適当なところで剣を捨てて降参して欲しい”
とのことだが、これを聞いた風の旅団のメンバーは皆、キョトンとした顔をした。

キャンベルさんは私のことをある程度知っている筈なのだが・・・
信じてない？

これを聞いたスンは、自分が相手をしようとは向かって行きそうだった。
スンはBクラスだが、私と出会ってから若返り、そして強くなった。
私と交わると若返るだけでなく、魔術での身体強化とは別に自力が
底上げされるため、正直なところ、スンが戦っても余裕でスンが勝
つと思う。

当然、アリスも同じく、体内魔素保有量が増えたそうだった。

「どうした？ 相談は終わりか？」

「一つ、提案があるのですが・・・」

「なんだ？」

「あなたには、この勝負に目的があって、勝てばそれが達成される
そうですが、私には全く無意味な勝負です。あなたの勝ちで結構で
すから、やめませんか？」

忘れないでほしい、私は事なかれ主義だ。

無意味な勝負に付き合って怪我を“させる”必要もない。

私の言葉を聞いてスンやアリスまで、何か云いたそうにしたが、ダ
ークさん達は、少し距離をとって面白そうに眺める態勢をとった。

「私は、勝利を恵んで貰う程落ちぶれた覚えはない！ 臆したならそ
この『鉄壁』が相手でも一向に構わんぞ！？」

突然指名されて、さらにキョトンとするダークさん

ああゝあ。返って怒らせてしまったらしい。どうしたものか・・・

・・・よし・・・逃げよう！

「なッ！貴様ああ！！！」

と云う分けて、クレーターの反対側に向けて全力疾走開始！

後ろでみんながキョトンとし、その女性だけが大声で叫んでいる。

まさに、一目散、しかし・・・私の上にスッ細長い影が差す。

あ？

ザンッ！

避けなかったら真っ二つになっていた。

慌てて急ブレーキをかけて、振り返ると、何処から出したのか大剣を大地に叩き付けた隊長さんが、こちらに視線を飛ばしている。

次の斬撃がくる、と察して回避に移るが・・・早いって！！

キンッ！

大地を割った大剣をそのままに、土煙を巻き上げながらの切り上げが襲い、私は咄嗟に腰のショートソードを抜いて受け、それが受け切れないと判断して上方向に流した。

しかし、上に流れた大剣の剣筋が、そのまま右上方からの斬撃に変わって、瞬時に襲ってくる。どういう筋肉してるんだか・・・

思わず右斜め後ろにバックステップして、何とか距離をとったところで一段落。

「ほう・・・少しはやるようじゃないか？」

なに、この人？バトルマニアかなんかですか？

スピードならسنの方が早いけど、パワーはこの人の方が上っぽい。

右手の大剣を引き摺るように持ち、スタスタと向かってくる。
仕方ないので、魔法で……

「云っておくが、私の鎧には対魔法防御の魔法陣が編み込まれている。貴様の得意な魔術は私には通用せんぞ？」

ゲロゲロ！

アリスに聞いた事がある。騎士の中には、体内魔素の大半を魔法防御に回し、殆ど身体能力だけで、戦闘をこなす者がいるそうだ。個々人の魔素保有量にも寄るが、強力な防御魔法を発動し続けられ、身体強化魔術のアクセルは使えなくなる。

その代わりに、魔術師の魔術攻撃に高い防御性を持つことができ、一気に接近して魔術師を倒すことができる。

例えば、魔術で使われる火属性の魔術は、見た目は炎だが、それは魔術師のイメージが具現化しているだけで、本質は魔素の塊であるから、魔素そのものを拡散させ、或いは無効化させる防護魔術に掛れば、炎の本質である熱を発することなく滅せられる。

説明すれば簡単だが、実際は、防御魔術にはかなりの体内魔素を必要とするし、身体強化ができないということとは、この世界の戦闘では、簡単に死にかけないことを意味する。

しかし、この女性はその戦い方に、完全に慣れている。

やっかいな女性だなあ……。しかたがない……。そう思った時だった。

「シユンが本気になる前に、止めておく事を勧める」

「ええ、私もそう思うわ」

大剣を振りかぶったその喉元に、いつの間にかスンのロングソード

が突き付けられ、背後にはアリスが杖を構えて立っていた。

「な・・・バカなッ！」

45 決着が付きましたか？

私が高校生の頃、一度だけ、剣道9段という剣士に稽古を付けて頂いたことがある。

当時の私は17歳。体力、反射神経ともにピークを迎えようとしている年頃で、90歳近いその剣士では、例え9段だと云われても全く負ける気がしなかった。

しかし、竹刀を合わせた途端、あっさり面を取られて啞然としたのだ。

云っておくが、一切、油断はしていなかったと断言できる。

無拍子という技がある。

ファンタジーや剣術マンガ、アニメによく登場する技で、概ね、予備動作が無く初動の読めない必殺の一撃と説明される。そのため、表現としては“見えなかった”とか“気が付いたら切られていた”となる。

当時の私も、実際、そのように理解していて、部活の中で実現できないか試案したことがあるのだが、それだけでは説明できないことがあった。

無拍子が、本当に、予備動作を無くした初動の読めない一撃だとしたら、ボクシングのジャブも同じではないか？と思うのだ。どこが違うのか？

しかし、あの時の私には、その老剣士が竹刀を振りかぶり、振りおろす所まで、しっかり見えていた。それなのに、避けるどころか、竹刀で受けようとする動作さえできずに面を打たれたのだ。

決して“早くて見えなかった”訳ではなく、“気が付かなかった”訳でもない。

あれ以来、少しだけ剣道を見直したと同時に、自分に無拍子など不可能だと、思い知らされたのを覚えている。

だから、私は、非論理的な云い方かもしれないが、無拍子を“避けられない斬撃”だと理解している。それは、超一流の剣士が、その才能を努力で研磨するようにして、初めて身に付けられる『奥儀』なのだ。

そして、才能を努力で研磨してきた天才が此処にいた。
スンスール・オードラン。

神竜の加護を受けたことで、実力が底上げされたことは事実だが、スピードだけに拘泥していたら、神竜である私に一撃を加えることなどできなかった筈だ。

しかし、剣術の訓練であったとはいえ、私は、スンの斬撃を何度か受けている。

斬撃が見えなかった訳ではない、気が付かなかった訳でもない。
スンは確実に奥儀に近づいていた。

そして、そのスンの斬撃に一步も動けず、咽元に剣を突き付けられた女剣士がいた。

その彼女も、かつて私が知った驚愕を、今、味わったに違いないのだ。

見えていながら、避けられない、受けられない。

そして、無為に剣を喉に突き付けられている自分。

「なんだ、今のは・・・魔術か？・・・いや、そんな気配はなかった！」

「剣を降ろすことだ。奇襲だったのは認めるが、シュンにこれ以上危害を加えるなら、容赦はしない」

彼女にとって、例えば奇襲だったとはいえ、あり得ない敗北だった。

スンの斬撃が見えていたのに、動けなかった。剣に生きてきた彼女には、これでは、たとえ仕切りなおしても結果は同じだと、理解できてしまった。

そして、完全に私を無視してゆっくりと剣を降ろし、スンを睨むと彼女は尋ねた。

「お前、名前は？」

「スンスール・オードラン」

「お前程の腕がありながら、こんな魔術師に・・・なぜだ？」

「さつき、云った筈よ？ シュンが本気になる前に止めておきなさいって」

「？」

「あなた、此処が何処だかわかっている？ シュンが、ちょっと魔術の練習をしたせいで出来た大穴の底なのよ。あなたのチャチな防衛魔法陣なんて、2秒と持たないわ」

そういつて、アリスが私に駆けより、スンが剣を降ろすと、彼女は改めて周りを見渡し、改めて、クレーターの規模の巨大さに気が付いたようだった。

「そっちのキャンベルさんだったかしら？ あなたもよ。自分の上司に相手の実力くらい、もう少し、正確に教えてあげたらどうなのかしら？」

「あ・あ・いえ！ 自分は・・・その・・・」

「キャンベルに過失は無い。大魔獣三体を素手で倒したという噂話なら報告を受けている。私が信用しなかったただけだ。まして、モラニスの凶王など・・・」

彼女、ノーマ・アレアンドロさんは、かつて、モラニスの森に現れた大魔獣の討伐隊に参加したことがあるのだそうだ。ノーマさん自

身、まだ、未熟だったとはいえ、剣も槍も魔法も通用せず、生き残ったのは一個大隊120名のうち、僅かに39名。結果は惨敗。

その大魔獣がモラニスの森から出てこようとしなかったこともあり、また、あまりの被害の大きさに、王命によって討伐が禁止されたため、再戦も叶わなかった。

その戦いによって、モラニスの大魔獣は神魔獣クラスと認定され、『凶王』の二つ名が送られたのだそうだ。

「ええっと・・・気が済んだら、そろそろ町に戻りませんか？ギルドに報告にも行かなきゃいけませんし、お腹もすきましたよ？」

自分で云うのもなんだが、もっとも建設的な意見だったと思う。

しかし、だからといって、全てが丸く収まる訳ではなく・・・相変わらず、ノーマさんは私とスンを睨みつけているし、サイモンさんとキャンベルさんは実に居心地が悪そうだし、アリスを始めとした風の旅団のメンバーは、それを面白そうに眺めている。そして、それが宿に着くまで続いたのだ。

ギルドへは私一人で出向いた。兎に角、一人になりたいの・・・大穴の規模の報告はしたが、寧ろ、水が湧いていることの方が重要だったらしい。

ねこ耳じゃない受付嬢に、暫くの間は、その事実を伏せておくように云われた。

報酬は銅貨50枚だった。

宿に戻ってみると、食堂の奥で、女性三人がテーブルを囲んで何やら話し込んでいた。

カウンターで聞いてみると、他の面子は、酒場に向かったと云う。

確かに、昼食には遅すぎ、夕食には早すぎる時間だ。その日暮らしの冒険者なら酒場で管を巻いていてもおかしくない時間だったが、私は酒はやらないので、行き場を失ってしまった。

スンとアリスだけなら迷わず二人のテーブルに向かうのだが、ノーマさんは時折、険しい表情をしているし、スンとアリスも真剣な顔をしている。

明らかに私は邪魔者だ。

仕方が無いので宿の裏に回って、キョロキョロしていたら“みいゝ！”という鳴き声で、建物と建物の隙間から子猫が出てきたので、隠し持っていた干し肉の欠片を与えておびき寄せ、瞬時に捕獲。

その後は座り込んで、兎に角、撫でまわし、ピンク色の肉球をぷにぷにしたり、ねこ耳と尻尾を堪能し、凌辱の限りを尽くした。

はあああ・・・癒されるううう・・・

46 食事の後は運動しますか？

暫くして、空が夕焼けから夜空に変わる頃、私は食堂に戻った。時間潰しに付き合わされた茶虎の子猫は、遊ばれ疲れて足元がふらふらしながら、元の隙間に戻って行った。ふっ・・・勝ったな。

食堂内を見ると、三人がいた席では、既に別のグループが食事に勤しんでいた。カウンターで、夕食を注文する時に聞いたところ、暫く前に、部屋に戻ったとのことだった。

私は一人寂しく、サラダとスープと何だか分からない肉料理とパン2個を詰め込んで早々に部屋にもどることにした。そろそろ、混んで来たし、私はそういうのが特に気になる性質だ。

部屋には鍵が掛っておらず、そして何故か誰も居なかった。

しかし、お風呂場で水音が聞こえたので、また、二人で入っているのだろうと思って、さっさと服を脱ぎ、次に入ろうとベッドで待っていたのだが、なかなか出てくる気配がなく、しかも、やけに静かだ。

もしかして・・・私を待っていてくれるのかも？

と云う分けて、お風呂場に突撃！

パンツまで全部脱ぎ棄てて、浴室のドアをノックするのも早々に“はいるよー！”と声を掛けてから勢いよく飛び込んだ。

だが、そのにあったのは、全裸の巨大な筋肉の壁だった。目の高さに、水滴を弾く巨大な二つの山があり、頂上は更に隆起して赤く色付いている。

私のスンの身長差は5センチ弱。あり得ない光景だ。見上げると、ノーマさんが私を見降ろしていた。

なんで、ノーマさんが???

と思う間もなく、回れ右して急いで出ようとしたが、ガシ!と両肩を掴まれて動けなくなってしまうた。

次に、あ!?!?と思った時には、頭を押さえられ、無理やりのディープキス!

貪るように、力強い動きでノーマさんの舌が口の中を跳ねまわり、私の舌を捕らえると、絡みつくように吸い上げて行く。

んんんんんん・・・!そんなことされたら・・・私は・・・

私はそもそも、スンとアリスが入っていると思って飛び込んだので、やる気満々だった。

それが、二人ではなく、予想外の女性、しかも殺されかけたノーマさんだったことで、一瞬にして萎えたのだが・・・

・・・自主規制・・・

「魔術師、お前に云ってなかったことがある。私は、常日頃から、私を倒した者は、私の体を好きにして良いと公言していたのだ」

「倒してませんよ?」

「いいや？ スンやアリスから聞いたぞ・・・それに、この宣言は、近衛騎士団では殆どの者が知っている。敗れた以上は・・・」

そして、ノーマはその大きな体を私の上で起こすと、淫らに蠢かせた。

ノーマは最高だった。

37歳と云っていたが、肉感的で、鍛え上げられた筋肉がしなやかに躍動し、それでいて女らしい柔らかさも併せ持っていたし、スンやアリスに無い積極性があって、進んで様々な態勢を取った。なにより、抱き心地が良く、感じやすく、反応が良かった。

私達は時間を忘れて、お互いを堪能し尽くしていた。

朝になってもノーマは、なかなか私から離れようとしなかったが、朝食の時間が近づき、ショートカットの頭を撫でながら云い聞かせると“うん。シュンがそういうなら”と素直に起きてくれた。

ちなみに、ノーマは、若返りは起きなかった（「男の責任」コンちゃんをお忘れなく！）が、極度の“甘えん坊”に変身した。

でかい図体で、これをやられると、それはそれで、萌える！

46 食事の後は運動しますか？（後書き）

ページ数を間違えた上に、自主規制ありで文字数が、異常にへりました。

お詫びに、次話を連投します。

またまた、誤字の指摘をくださったお二方、ありがとうございます。

47 朝は気まずいですか？

朝食を食べるためにノーマを連れて、宿の食堂に降りると、スンとアリスが待っていて、私とノーマを迎えた。

「おはよう。シュン。ノーマ」

スンとアリスの手前、昨夜のノーマのことは非常に気まずいのだが、この二人が協力しなければ、ノーマが私の部屋に居た理由が分からない。そもそも、二人とも結局、別の部屋に泊って私達の部屋に戻ってこなかったのだ。

宿のウェイトレスが、朝食のハムエッグとサラダにパン、そしてコーヒー（すべてもどき）を運んで来て、私達の前に並べて行く。

「おはよう。二人とも。じゃあ、そろそろ説明してくれる？」

それから私は彼女達三人を前にして、説明を求めた。

ノーマには部屋で聞いてみたが、スンとアリスが一緒の時に話すから、と云われて結局聞いていないのだ。

「うむ。きっかけは、ノーマが私を騎士団に勧誘したことから始まったのだ」

昨日の私とノーマとの立ち合いの後、宿に戻ったノーマはスンを騎士団に勧誘した。

冒険者から騎士団への就任は、ある意味で大出世だから、ノーマは断られるとは考えていなかったのだが、スンはあっさり断った。

その理由が、騎士団に入ると私と一緒にいることが出来なくなるから、だったため、ノーマとしては、スンがそれほど私に執着する理

由を聞いたのだった。

「そのことと、昨夜のことと、どう関係があるのかな？」

ノーマによれば、この世界の男はいつもこいつも、基本的には“俺について来い！”というタイプが多く、要するに男尊女卑。

そのため、力を持ったノーマのような女性にとっては、例え近衛騎士団の大隊長にまでなっても、実力は下に見られるし敬遠される。実力が全ての騎士という人種？であってもそれは変わらず、腕は良くても実績のない女性騎士はなかなか認められないものらしい。

「スンが云うには、シュンはそんな男ではない、というから試させてもらったのだ」

結果は合格だったらしい。

ノーマによれば、大体の男はノーマが相手でも一度寝れば、兎に角、自分本位な関係を望んで従わせようとするのが普通で、私のように相手にも気持ちよくなって欲しいと頑張る男は珍しいのだとか。それは相手が悪かっただけでは？

うううむ・・・以前、アリスにも叱られたからなあ・・・

アリスはノーマに、セニエの二重狂騒の際、スンを傷つけた大魔獣を相手に、私がどれ程キレたかを事細かに説明した。そして、アリスはその姿を見て、私がどれ程スンを大事に思っているかを知って私を好きになり、スンに相談して伴侶の一人になることを決めた。そして、そんな関係になっても私は変わらず、ただ、二人に愛情を注ぎ、それでいてちゃんと意見を聞いてくれるし、厳しく叱ってくれる。

ん？大人としては当然では？

聞いている私が恥ずかしくなるような話しだったが、ノーマは、私
が強いのは分かったが、力で二人を縛っていると思ったらしい。そ
こで、手っ取り早く私の男としての本質を見極めるため、二人の了承
をとってから部屋で待ち構えていたのだ。
やれやれ・・・

「スンとアリスの言葉が事実だということは分かった。そこで、頼
みがある」

「「？」」

「私は近衛騎士団の大隊長で、責任ある立場だから、二人のように
シュンに付いて行くことはできない。だが、たまにで良いから、シ
ュンを抱かせて・・・いや、抱かれない」

いま、“抱かせて”って言ったよね？

確かに、昨夜はそれっぽいところもあったけど・・・

「私達は構わないわ。シュンが良ければだけだね？でも、ノーマに
とっては、シュンの何処が良かったの？」

「シュンは・・・私を“お姫様だっこ”してくれたのだ・・・この
図体だからな。どんな男も、そういうことをしようとすらしなかつ
たが、シュンは・・・その・・・優しく、そうやってベッドに運ん
でくれたのだ。私は、初めてだったのだ」

そう云えば、しましたね・・・第一ラウンドが床の上だったから、
第二ラウンドをベッドで始めるために。

ああ、そうか・・・あれ以降だな、ノーマが急に甘えん坊になった
のは・・・

しかしだ。

私の周りの女性はどうして、普段とエッチのときの性格が変わるの

だろう。

スンは普段は凛々しく、エッチの時は女の子になり、アリスは普段は快活なのに、エッチの時はお淑やかになる。そして、ノーマは普段は完全に男で、エッチの時は甘えん坊。
嫌いじゃないけどね。

ノーマはこの中で一番年上だし、男性経験もそれなりにあるようなので、スンやアリスはいろいろ聞いてみたいことがあるらしい。
他の男との比較ですか？それは止めて欲しい・・・聞かなくても落ち込むから・・・

女性諸君！男ってそういうもんなんですよ！？

「ああ、シュンには別に隠すつもりは無いな。騎士団内部では副団長に、一度不覚と取って寝たことがあるし、付き合いで、男娼を買った事もある。まあ副団長は、ただ、突きまくるだけで気持ち良くなかったし、男娼というのは気持ちが悪かったな。優しいというよりは、媚びて来る感じが・・・私のことを“子猫ちゃん”と呼ぶんだぞ？だが、シュンは良かった・・・私は男には“抱きたい”とか“抱かれない”と思ったのはシュンが初めてだ。スンやアリスは本当に幸せだな」

ノーマは昨夜のことを思い出したのか“とろん”とした目で私を見つめてくる。

いったいどういう付き合いで、男娼なんか買ったんだろう？

いやいや、私は大人の男ですから、過去の男性遍歴なんぞ聞きませんよ？

しかし、女性って、ここまで奔放にエッチの話しをするものなのか？
ガールズトーク恐るべし！

そうこうしていると、他のメンバーが頭を抱えてやって来て、私達

から少し離れた場所に座ってコーヒーを飲み始めた。なぜか騎士団の二人も一緒だ。

昨夜は深酒をしたらしい。行かなくてよかった。

私は酒を飲まないのも、大学生の頃は、飲み会になると常に救護班だったから、深夜から朝方にかけて、汚物処理と粗大ゴミの処理に追われていた。

唯一まともなのは、やはり、グスタフさんくらいか・・・相変わらずイケメンだね！

ん？何か急に、脳裏に引つかかるものが・・・何だろう???
ノーマのさっきの言葉の最後の方に、何かが????

あ！『男には』っていった！

48 心配事は何ですか？

近衛騎士三人と風の旅団は、王都に商売に向かう商人達の護衛任務をギルドで受けて三日間の行程を進んだ。クブスリーには四日間滞在したが、二日目はノーマに襲われ、三日目は騎士達の食料調達などに付き合い、四日目は件の商隊護衛の日程調整のためにブラブラしていた。

ノーマは初日の夜以降、私を襲ってくることはなかったが、それは、スンとアリスがノーマを、私の愛人として認定したために落ち着いたからだそうだ。

ちなみに、ノーマはスンにも興味があるらしい。聞けば、ノーマは男性経験より女性経験の方が遥かに多く、近衛騎士団の殆どの女性騎士と肉体関係があるのだとか。

これはサイモンさんとキャンベルさんに確認済み。いいのか？

それは兎も角、王都への旅は、何事も無く過ぎて行く、商隊は次々に便乗者で膨らみ、馬車15両になったが、王都外縁部は基本的に安全地帯なので、依頼料は安い。

そろそろ、山賊とか？が出てきてくれたりするとファンタジーというか、護衛している雰囲気も出て来るのだが、何にもなし。

強いて言うなら、異世界土産の袋麺が騎士達に一部振る舞われ、好評を得た半面、ダークさんが涙目になった事ぐらいか？ いっぱいあるから！

明日は王都に到着するという夜、見張りをしていた私はノーマに襲われた。

暫くは出来なくなるから“どうしてもしてほしいの”と甘えた声でおねだりされたら、そこは男として愛人に対する責任を果たすべき

だと思っただよ、私は。

空一面の星空の下で、一糸纏わぬ姿になったノーマと声を殺してのエッチ。

星明かりしか無くても、微妙にお肌スベスベの強力版になっているノーマの肌触りは最高で、つつい頑張ってしまった。

翌日、王都に入って商隊は解散。ギルドへの報告と依頼料の受領を済ませ、次の依頼として打ち合わせ通りに、マッカーシー領への商隊護衛の依頼を受注した。

この段階で、ノーマ達は城へ戻り、私達は商業区に宿を取った。宰相の別邸を借りることもできたが、もろもろの事情？で御遠慮申し上げた。

但し、スンとアリスは異世界土産？を持って別邸に挨拶に向かった。土産ってなんだろう？

「ブラはムリだが、ショーツならある程度のサイズが分かれれば履けるからな。それと化粧品類と“ぼでいそーぷ”にバス○クリンだ。サリー殿の分もある」

荷物に妙に重い物があったり、大きいのに軽いものがあったのはその所為か？

しかし、おじさんは心配です。どれもこれも、こちらの世界にはない物ばかりですから。

安定供給できないから、後で大変かもよ？

云い忘れていたが、以前クブスリーでスンにミニスカートを穿かせたことがあるが、王都の臣民区と商業区では、あれほどではないもののミニスカートの女の子は居る。

そもそも、女性冒険者の殆どがズボンに皮のミニスカートというスタイルだから、それをカッコいいと思った娘達が、生足でマネをす

るのは分かる気がする。

まあ、膝上5センチでロングブーツの組み合わせが流行らしいが、膝上5センチでは私にはどうにも野暮ったく見えるのだが。

しかしだ。あの、街ゆく娘たちの殆ど全てが、ノーパン、ノーブラなわけで、おじさんとしては、いろんな意味で心配です。

？・・・しまったあああ！！！！・・・どうして私は“そよ風の悪戯”とか“春の嵐”とか、ついでに“神風の術”とか、風魔法をアリスに習って居なかったのだろう！！！！

あるのかどうかは聞いてないけど。

「シュン、何を考えている？」

見とれていたら、スンがちよつと怖い顔で私を見ている。

スンもアリスも私の女性関係に関して異常に理解があるが、だからと云って嫉妬心が無いわけではないから・・・調子に乗ってごめんなさい。

「あれが良いのなら、私だって、云ってくれたら着るのに・・・」

久々にきたああああ・・・スンの女の子言葉！しかも、拗ねちゃったバージョン！

私は、お約束通り、必死に弁解して、誤解だと説明して、それからスンのミニスカート姿が見たいとお願いして・・・

ええ、その夜はコスで萌えて、そして燃えました！

やっぱり、スンは最高だなあ・・・と思っていたら、アリスが何か考え込んでいる。

それはそれで心配だが、ニッコリ笑って、何でもないと言われた。

そして二日目、宰相からの使いがやってきて、別邸での打ち合わせ

と報告、作戦の関係者の顔合わせが行われた。

報告によると、先の襲撃事件の犯人は全員死亡したものの、近衛騎士団第13大隊が別途に捕捉していた組織の構成員達は、ほぼ全員を捕縛することに成功した。

これによって、主犯がケイネース大公殿下であることがほぼ確定する一方、王都の組織は、ほぼ壊滅。但し、再建される前に、本拠地を潰す必要があるとの意見で一致した。

派遣される商隊のリーダーは、あくまで商隊を率いる商人で、コービと名乗った。

彼は全ての事情を知っているが、本当に商売するためにマッカーシ一領に向かい、作戦には一切関知しないことが確認された。

そして作戦だが、なんと、殆ど行き当たりばったりだった。

潜入後は、私の方で適当にやるしかなさそうだ。その代わり、現地に既に潜入している者や一緒に潜入する第13大隊の騎士達の指揮権は私に預けてくれるそうだ。

その中には、サイモンさんとキャンベルさんも居る。

なんでも、そもそも第13大隊は宰相が作った部隊で、予算の都合で実数は30名と本来の四分の一しか騎士がいない。

しかも、その多くが宰相の領地から引っ張ってきた者達で、優秀ではあるが、逆にそれが反感を買って、隊長には4番隊で持て余していた副隊長のノーマが当てられ、宰相の直属となっているのだそう。近衛なの？

出発は二日後、それまでにそれぞれが準備を整えて待機となった。

「シュン殿、情報が少なくて申し訳ない。潜入させた者達の多くが・・・」

「まあ、そうなんでしょうねえ」

声を掛けてきたのは宰相だった。

そして、打ち合わせでは云わなかった事実を打ち明けてくれた。

なんと、相手の組織の母体は、もともとグランバル王国の諜報部隊だったのだそうだ。

先王崩御の後、現国王が即位するまでの間、諜報部隊を率いていた男は、所謂、王弟派に属していて、かなり派手に裏工作に走ったらしい。

その結果、現国王が即位すると居場所を無くし、多くの部下を引き連れて職を辞して姿を消したが、それがいつの間にか大公の部下として暗躍していた。

宰相が、宰相補佐であったときのことで、それが誰だったのか？など、具体的なことは知らされていなかったが、捕らえた者の中にかつての諜報員がいることが確認され、特に、死番隊と呼ばれる特殊部隊が健在であることが分かったのだとか。

ということは・・・いるよなあ・・・多分・・・

49 狩りは楽しいですか？

打ち合わせの翌日、私は宰相との個人的な打ち合わせに従って、王都から馬車に乗り、商人にふん装し、一人でマッカーシー領に向かって出発した。

初めての道で、たった一人は心細かったが、時間も無いし、仕方が無い。

初日は順調に進み、その夜のことだった。

私には、野営のスキルが不足しているが、火を起こしてお湯を沸かすこと位はできる。

主食はビスケットとコーンポタージュ。

辺りが真っ暗になり、満天の星空が見える頃、周囲からガサガサと人が集まってきた。

「お前が黒髪の魔術師か？悪いが此处で死んでもらうぞ！」

現れたのは山賊ではなかった。

予想通りと云うべきか、装備はバラバラだが、きちんと訓練を受けた兵士達が15人もいた。

そもそも、山賊ならたった一人を相手に夜に襲ったりはしないし、私を“黒髪の魔術師”とも呼ばないだろう。

だって、金髪だし！

「黒髪の魔術師？誰のことですか？私は見ての通り金髪ですが」

「フン！とぼけても無駄だぞ。宰相から話しは聞いている。金髪に髪を変えて、今日、此处を通ることをな！」

その男がサッと手を上げると、周りの兵士達が一斉に襲いかかって

来た。

有る者は剣を振り上げ、ある者は槍を突き出し、そして、魔術師らしき数人の男達は呪文を唱えた。

「周辺に結界魔術を張ってある。もう、お前は魔術を使えん。部下の敵だ、切り刻んで明日来るお前の仲間死体を晒してやろう」

だが、私はその時、既にその場には居なかった。

彼らの張った結界魔術は、結界内の魔素を強制的に結界外に排出することで、魔術の発動を妨害するものだったが、私の体はその殆どが体内魔素で構成されている。

そして、体内魔素まで妨害しては、騎士達が使う身体強化魔術まで使えなくなるが、相手は魔術あつての戦闘力、十分勝てると踏んだのだろう。

バキッ！ぎゃあああ！

ドスッ！うわあああ！

ペキッ！ぐおおおお！

普通の魔術師が相手なら正解なんだけどね。

私は、次々に襲ってくる兵士達を余裕を持って捌き、その手足を粉砕していった。

「ばかな！アクセルは使えん筈だぞ！結界魔法を、もう一度だ！」
「あ、いやぁ・・・それはムリだと思えますよ？私、アクセル使ってませんから」

実際、私はアクセルを使っていなかった。

そもそも、使う必要がなかったから、アクセルの使い方知らない。私は神竜の体を持っている。その自力だけで普通のアクセルの加速

を超える速度が出せた。

今の私のスピードに付いてこられるのは、アクセルを使ったスンくらいだろう。

「バ、化け物め！」

「失敬なやつだな、チミわ」

いかん。シリアス路線にシ〇ムラケン様が登場してしまった。

私は気を引き締めて、結界内にいる兵士達を無力化していった。

自分でやっておいて云うのもなんだが、ホントに痛そうだ。結界内に居る限り回復魔術も使えないし、みんな腕や足を押さえて転げ回っている。

そして、誰も居なくなった。b yア〇ガサ・クリ〇ステイ

「さて！残りはあなたと、魔術師の皆さんですが・・・どうします？」

「魔術師は結界を解き、攻撃魔術の準備だ。こいつは俺が仕留める！」

「あら、そうきちやいますか？」

リーダーの男は、腕に余程自信があったのだろう。

アクセルを行使して一気に間合いを詰めると、“死ねいッ！”のセリフと共に、腰のロングソードを横なぎに抜刀した。

大した速度だった。でも、十分避けられた。

バックステップする瞬間に、男の鼻にデコピン一発・・・ていッ！鼻にかましたのに、デコピンとはこれいかに？

「ほおお！今のを良くかわした。褒めてやるぞ！しかし、まぐれは二度続かん」

哀れだった・・・

高いお鼻が消し飛んで、豚っぱなに成っているのに、それに気付かずにカッコつけている目の前の男が。ほらほら、鼻血拭きなよ・・・ん？チガーヨ？ソージャナイヨ！彼が私と同じくらいの年齢で金髪で、でも私より遥かに背が高くて、イケメンで、足が長かったからじゃないよ？

早く、眠らせてあげよう。反省、反省、僕、反省。

私は、男が改めて斬りかかってくる前に、その正面、至近距離に転移して、ありったけの慈悲を込めて、その鼻にパンチをお見舞いした。ほんと、お見舞い申し上げる。

そのとき、私が“あゝ○んパンチ”と叫び、吹き飛んでいく男が“バイ○バイキーン”と叫んだかどうかは、内緒だ！

その後、逃げ出した魔術師達を、ふふふふふと笑いながら、荒野を身動きできなくなるまで追い回し、観念した彼らが、私にお尻を蹴られながら元の場所に戻ったのは、それから2時間後だった。

これで、全員捕縛。馬車に積んでいた縄で・・・亀甲縛り！

何だろう？このやりきった感は・・・良い運動だったが、眠いので寝た。

朝、誰も起してくれないので、随分と寝坊したらしい。

でも、その甲斐あって、起してくれたのはノーマだった。

第13番大隊は、今朝早く、例の商隊に先駆けて王都を出発、私を追って来ていた。

目的は勿論、阿呆どもの捕縛と護送のためだ。

「流石だな、シュン。しかし、随分と大物が釣れたものだ」

「ノーマの知ってる人？」

「ああ、近衛騎士団副団長のアーロ・ホリマンだ。なるほど、情報

が漏れる分けた」

「・・・」

ノーマは、全く無表情に、テキパキと男達を護送馬車に放り込むように部下達に指示して、直ちに、王都に戻るよう命令した。

「ところで、シュン。商隊が来るまで大分時間がある。私は、今とてもお前に抱かれない気分なんだが・・・」

私は、朝っぱらから、街道の真ん中でノーマを裸にして、犯した。

50 気を取り直して行きますか？

私に犯されながら、ノーマは泣いていた。

数人の部下を殺され、見えない敵に復讐を誓っていたノーマだったが、それが、まさか自分の信頼する騎士団の副団長だったとは思わなかったようだ。そして、自分は、その男に剣の勝負に負けたとはいえ、知らなかったとはいえ、抱かれたことがある。悔しくて仕方がなかったのだろう。

だから、私はノーマの許可を貰ってから、力づくで犯すことにした。ノーマも力いっぱい抵抗して、何度も私を殴りつけたが、それを私は神竜の力を使って、力づくで組み伏して何度も犯した。

そして犯しながら“お前は俺の女だ”と云い聞かせ“私はシュンの女です”と何度も云わせた。そして、なんの抵抗も出来ないくらい疲れ切ったところで、漸く涙が枯れた。

「酷い男だな、シュンは・・・」

「そうさ・・・でも、ノーマはもう私の女だからね？他の男に抱かれちゃ駄目だよ」

「本当に酷い男だ・・・でも、とても優しい・・・」

私の胸に頭を載せて、ノーマは息も絶え絶えに、嬉しそうに、そう呟いた。

商隊が到着したのはそれから暫くしてからだった。スンやアリスには、私とノーマの様子から、何があったのか分かったかもしれないが、後で、説明しておこうと思う。

その後、ノーマは“元気に”王都に向かって引き返して行った。

あの、色男・・・ナンマンダブ、ナンマンダブ・・・

念のために云っておくが、私はレイプ犯と児童虐待犯は、問答無用で死刑で良いと思っている。

今回は、特別だ。

ううううう・・・でも、物凄い罪悪感が・・・

いいかぁ！女性はなぁ！愛でるものであって、傷付けるものではないんだぞ！

「さあ、行きましょ！先は長いのよ」

アリスとスンが手を引いて、野営の準備に入った商隊の所に連れて行ってくれなかったら、私は道端で自閉モードに突入し、体育座りで地面を見つめていただろう。

そして、二人とも私の告白を黙って聞いてくれて、そして、いい子、いい子してくれた。

ホントに、私には過ぎた娘達だと実感した。

そして翌日。

「さあ、いっちょお！ぶわっと、いってみようかああああ！！！」

変なスイッチの入った私が居た。

諸君、覚えておくがいい！こう云うのを“ナチュラル・ハイ”という。

二三日自宅に戻れず、眠れず、薄汚く、汗臭く、そして、気分だけは最高潮にある状態であるが、まあもともと、限界を超えているので、直ぐガス欠を起こす。

お仕事には万全の体調で臨むこと。でないと、気分が良くてもミスをする。

そんなわけで、私は強制的に馬車に隔離された。

もとに戻ったのは、その日の午後。

懲りもせず、山賊風味の兵隊さんの団体が道を塞いでいた時だった。勿論、問答無用で殲滅。

どうせ、マッカーシー領の兵隊だろうし、変装している時点で、こちらも遠慮はいらないということで、スンとダークさんが突撃、アリスとグスタフさんが魔法と弓で援護、チャックさんが止を刺す。

私が出る幕がない。

考えてみれば、私は、風の旅団の臨時メンバーではあっても、実際に組んで戦ったことが無い、所謂、イラナイ子・・・グレテモイーデスカ？

スンとアリスが慰めてくれて“ シュンは風の旅団の秘密兵器だから ”と云ってくれたが、それは“ 最後まで秘密のままでした ”というフラグじゃないのか？

結局、損害無しで切り抜けはしたが、これからは敵も絡め手で来ることが予想された。

正直しんどいが、アリスが全方位探査魔術を駆使して警戒し、発見次第、私が一つずつ潰して行くことにした。

アリスの探査魔法は、私と交わってから精度と範囲が、とんでも無く広がっていた。

それからは、ブッシュに伏せる弓兵の右手と右足を丹念に潰して、荷物を取り上げ、またある時は、岩山の上で、落石を起こそうとする者達を、ていっ！と突き落とし、更には、100人もの大集団で突撃しようとしていた者達を、デイープリンパクトで吹き飛ばした。勿論、手加減はしたが、怪我人の救助まではしない。あんな大人数は養いきれませんので。

「ようし・・・見えてきた！」

「着いたぞおおお、あれがマッカーシー領だ！」

喜びの声が爆発した。涙ぐんでいる者までいる。

此処まで五日程かった。

普通なら、此処まで商隊の人達が喜びを爆発させることは無かつただろう。

しかし、普通ではなかった。日に一度から二度、それこそ普通なら商隊全滅確実の襲撃を受け、そのことごとくを撃退（殆ど殲滅）してきたが、正直、生きた心地がしなかったことだろう。

本当にい、すまないとお、思う！

特に商隊のリーダーのコービさんに至っては、たった五日で、みるみる痩せた。

女性諸君、羨ましいなんていってはいけないよ？

私も、初めての大失恋の時は、五日で7キロ体重が減ったことがあるが、良き友人たちがいなかったら、私は死んでいたと思う。

まあ、今の私は死ねないんですけどね。

すれ違うマッカーシー領からの商人たちは、不思議そうな顔で私達を見送る。

ここまで来れば、もう、襲撃はない。

ここで襲撃すれば、立場上、兵を出して私達を守らなければならないからだ。

そして、私達は、その巨大な城塞都市の門をくぐり、内部へと歩を進めた。

マッカーシー領が、所謂、悪の巢窟だったとしても、そこで暮らす一般市民までが悪者と云う訳ではない。

そこには、普通の生活がある。

裕福な家庭の娘だろうか？数人の少女達がミニスカートを着こなして、繁華街を闊歩しているし、露天のおやじさんやおばさんは、威勢の良い声で、客引きをしている。

ごく普通の街にしか見えない。

だが、ここが間違いなくソーマを売りさばき、多くの人の人生を狂わせ、奴隷商人に便宜を図り、誘拐を黙認し、莫大な資金を溜めこんで軍備を整え、そして……

宰相の話では、グランバル王国の宿敵、セルヴェ王国と密かに密約を交わして、大公国として独立を企んでいるらしいのだ。

そして私は、それを阻止するために、密かに雇われた冒険者なのだ。

あれ？“密かに”ってところで、何でだろう……目から汁が……

51 どこから始めますか？

マッカーシーの街は、よく整備された美しい街と表現してよいだろう。

石畳の馬車道や歩道が整備され、街路樹まであり、目抜き通りには幾つもの店が軒を並べて、売子達が威勢の良い声を上げて客を誘っている。

行きかう人の顔も明るく、この街で幾つもの犯罪行為が密かに行われているとは、とても思えない。

私達は、マッカーシーの街に入ると同時に、商隊と別れてギルドに赴き、依頼達成の証明書を提出して依頼料を受け取った。報酬は銀貨60枚。

ギルドで、手頃な宿を紹介して貰い、馬車二台で宿に向かう。

「いらっしやい！おや？お客さん、初めての顔だね」

「おお、マッカーシー領は初めてだ。なかなか立派な町じゃねえか？」

「嬉しい事云ってくれるね！一見さんだけど、安くしとくよ？」

ダークさんが宿のカウンターで手続きをしている間に、私達は荷物を運び込んだ。

例によって例の如く、私は広い部屋に一人、スンとアリスで一つ、残りの野郎どもで一つで部屋を借りて、取り敢えずは荷物の整理を始めた。

一旦落ち着いてから、5階建ての宿の全員の部屋と廊下、階段にカメラを仕掛けて、パソコンを起動。微調整を加えて、一通りの監視態勢を整えたところで、さっそく動きがあった。

「女将、どうだ。連中の様子は？」

「ああ、来たよ。でも、本当なのかい？あの連中が山賊だなんて・・・」

「いや、まあ、その可能性があるってことだ」

「でもさあ、あんな可愛い娘が二人もいて・・・」

「だからみんな騙されるんだ。あの二人は、魔人族らしいから見た目は当てにならん」

「怖いねえ！そんならさっさと捕まえちゃって、首輪でもしちまえばいいじゃないか？」

「ああ、いずれはそうするさ！」

カウンターの裏に両面テープで張り付けた盗聴器から、この宿の女将と男の声が聞こえてきた。チェックインの時に、ダークさんが張り付けたものだ。

ちなみに女将の云った“首輪”とは奴隷の首輪のことだ。これをされると、主人に反抗できなくなり、その許可がなければ魔術も使えなくなる。

この街は、奴隷貿易で栄えている街なのだ。

私達は、この街に入る前に今後について話し合っていた。

当初計画は、とうの昔に廃棄した。道中あれだけ襲われて、隠密活動に拘るなどあり得ないからだ。

そして、私は、この街の何もかもが信用できないことを説明した。

当然、その中にはギルドもあったが、これには、みんな眉をひそめた。

ギルドは国という権力からある程度独立して存在している。だからこそ、その独立のために特定の権力と結ぶことは、すなわち信用を失うことになる。

しかし、宰相が幾人もの諜報員をこの街に送り込みながら、殆ど有

益な情報が得られなかったという事実から、幾つかの原因が推測できる。

その一つが、スパイの存在。

だから私は、宰相にスパイの炙り出しの方法を伝授した。

やり方は簡単、私が商隊に先行して前日にマッカーシー領に向かうという情報を、特定の人物にだけわざと流すというものだ。

その結果、手足を切り落とされた組織は、騎士団の副団長が直接行動に出てスパイ認定に成功したが、あれで全部かどうかは分からない。まあ、その辺りは宰相がうまくやってくれていると思う。

もう一つが、ダブルスパイの存在。

例の副騎士団長ではないが、まさかというところにスパイは存在するものなのだ。

宰相が送り込んだ情報員の多くは殺害されたらしいが、全てではない。取り敢えず、その生き残った情報員は、全く信用できないと考えている。ここにギルドも含まれる。

更には、ある種の洗脳や誤認による善意の第三者の敵対だ。

この宿の女将のように、私達が悪人だと思い込ませることができれば、この街全体が私達の敵になる。彼らは自分達が正義だと信じているから、全く躊躇せず、悪党に協力する。

これには、自分が正義だと疑わない人や、良い人だと思われた人、特別だと思いたい人、騙されないぞと思っている人、が特に引かかる。

新興宗教の布教活動と同じだ。

と言う分けて、ギルドも信用していなかった私は、ギルドで紹介されたこの宿も、泊り客も含めて信用していない。

だから、ダークさんにカウンターに盗聴器を仕掛けるようお願い

したのだ。

結果は、先程の会話の通り。私のようにスパイ映画とかに“嵌った”経験のないこの世界の素人情報員では、赤子の手を捻るようにやられただろう。

それは兎も角、内密に調査するのはもう無理なので、私達は基本的に適当にブラブラすることにした。実際の調査は、一緒にやってきたサイモンさんとキャンベルさんのグループに任せて、精々、派手に遊ぼう。

彼らには、小型の無線機と盗聴器、それに大量の電池を渡してあるので、実際に会うことなく連絡を取りながら、まずは、私達を監視する者達の洗い出しから初めてもらった。

「こんな便利なものを・・・」

機能や使い方を教えている時の二人の表情は、秀逸だった。

彼らが、特定の人物を洗い出ししやすいように、私達は、毎日、一人を残して、全員がバラバラに街に出ていた結果、やはり、私とスンに対する監視が一番強い事が分かった。

こちらも、宿の中に泊り客を装って潜入している監視者を特定できたので、アリスとチャックさんが部屋に忍び込んで盗聴器を仕掛けた。

「で、どうなんだ？動きはあるのか？」

「それが、何も・・・本当にあれが大魔獣三匹を瞬殺したっていう“黒髪の魔術師”なのか？とてもそうは見えんがなあ。俺でも殺れそうだぜ」

「少なくとも上からの情報では間違いない。もっとも、王都の組織から情報が全く入ってこなくなっちゃったが・・・気を抜くなよ。あいつのせいで、死番隊の半数が死んでるし、ここまで来る間に1

50人からやられちまって、こっちは人手が全く足りん状態なんだから。」

「ああ、分かってるさ」

この男との会話は、様々な情報をもたらした。

「ところで、例の物の出荷準備は整ったのか？」

「お前はもう、あっちの担当じゃあない。忘れろ！」

「そうはいつでもよお・・・目を付けてた餓鬼がいて、ちょっと味見したかったんだぜ？それなのに急にこっちに回されちまって・・・あの、アリスって餓鬼でもやっちまうか？なあ、どうせバラすならいいだろう？」

「お前、もっと餓鬼が良かったんじゃないか？」

「まあな、けどよ、ああいう澄ました顔した小娘を、ヒイヒイいわせんのも良いもんなんだぜ？こう、必死に抵抗するのを力づくで・・・」

うふふふ・・・よし！殺そう！

52 だれからやりますか？

例の二人の会話を盗聴していた私が、笑いながらスックと立ち上がり、部屋を出て行こうとしたので、それに気が付いたアリスが“ダーク止めて！”と叫んだ。

しかし、私は、身長2メートルを超えるダークさんを、ズルズルと引き摺りながらドアノブを掴む所まで行った。

そこで、アリスが私に飛び付き“私は大丈夫だから！”と云わなければ、私は確実に殺りに行っていただろう。

アリスに感謝しろよゲス野郎！もっとも、いずれ確実に息の根を止めるけどね！

「・・・し、しかし、変な事いってましたね？」

大きく深呼吸して、無理やり冷静になった私は、思考を切り替えた。

「“例の物”が恐らく幼い子供のことだとは分かります。恐らく、奴隷として仕入れて来た子供たちでしょう。でも、分らないのは、あの男が常習的に“味見”している点です。奴隷って、処女とかの方が高く売れるんじゃないですか？それなのに、相手の男も、その点を非難したりはしていなかった」

この点に関してはグスタフさんも同意見だったらしく、直ぐに、サイモンさんに連絡をとって、その関係の情報がないか確認してみた。しかし、サイモンさん達は、未だ、敵のアジトの一つを特定した段階で、盗聴器を仕掛けるところまで行っていない。取り敢えず、こちらの情報を伝えて「出荷」「子供」「奴隷」というキーワードに気を付けて情報を探るように指示した。

私達は、観光客のように、毎日、あっちにこっちにと出歩き、ダークさんとグスタフさんは夜の街に出かけて、この街の裏側を探った。チャックさんはお留守番。

まあ、探ると云っても、娼婦達の噂話や身の上話を聞いてくる程度だが、その都市の暗部を探るには非常に有効な手段だ。

もちろん、ハニートラップというものが存在することは伝えたので、二人とも、余計なことはしゃべらないだろう。

「シュン、おかしなことに気が付きました」

ある日の朝、グスタフさんが私に云った。

グスタフさんによれば、娼館に子供が非常に少ないということだった。

私達の世界なら娼館に子供なっ！と思うかもしれないが、体を売ることを子供の頃から日常的に教えておけば、いずれ、自分もそうするのだと洗脳できる。

忌避感も無いし、先輩が色々教えるので性技も巧みになる。

だから、娼館では結構な数の幼女を下働きとして抱えている。

うまくすれば、養育費なんて軽く返せるほどの美妃に成長するかもしれないし、そうでなくとも、その借金で永久に娼館に縛りつけることができる。

そもそも、体を売る以外のことを教えていないのだから、外に出ても生きられない。

「娼婦達に聞いたら、ここ一年ばかり、奴隷市場に子供が品薄らしいのです」

娼館にとって、育てるなら可愛い女の子でなければならぬから、品薄になれば引き取る子供の数も当然減ることになる。

しかし、それでは、以前、盗聴で聞いた内容と微妙な齟齬を生じる。もっとも、あの男の云った“例の物”が奴隷全体を指していたら、全てが子供だとは限らないが・・・

「それは、娼館に好まれる子供がいけないという意味でしょうか？」

「いえ、子供そのものが少ないそうです。男の子も女の子も。その所為で娼館に来るのは田舎で身売りした年頃の娘が多いそうで、毎晩、泣かれて見てもらえないと」

娘達は、連れてこられて直ぐに客を取らされる分けではない。暫くは、娼婦としての常識を教え込まれ、下働きをさせられる。

直ぐに客を取らせると、実質上はレイプになるから、娘達は、自殺を図ったり、逃げようとするところがある。それを防ぐために、奴隷の首輪をされることになるのだが、客が特殊な性癖でない限り、娘達が人形同然になるから不評なのだからか。

結局、なぜ、子供が少ないのか分からないまま、数日が過ぎたが、サイモンさん達のグループが情報を掴んできた。

私達を宿で監視していたつもり“くそ野郎”が、交代のために宿を引き払ったのだ。

サイモンさん達のグループが、それを尾行したところ、一直線に街の北の端にある貧民街に向かったそうだった。

そこには、大きな孤児院があったと・・・

「あはは？・・・あんのおくそ野郎お・・・やっぱり殺しとくんだったか？」

「落ち着いて！シュン」

その後、サイモンさんのグループに頼んで、孤児院を監視してもらい、そこから次々と不気味な事実が判明した。

このマッカーシー領に連れてこられる子供は減っていない。減っているのは、その多くが都市内にある幾つかの孤児院が、優先的に“買い取って”いるためらしい。

そして、子供達は、ある日、その孤児院から連れ出されて一人も帰ってこない。

だから、それらの孤児院は延々と子供達を飲みこんでいく。

例の男は、その管理人の一人だった。

「だめだああ・・・なんだか・・・我慢できないやああ」

ここ数日、私が不気味に笑っているので、みんな気味悪がっていたが、ついに、私の我慢も限界に達した。

しかし、みんなも、これがただの奴隷売買ではないことに気が付き始めていて、結局、少しばかりの強硬策に同意してくれた。

私は喜び勇んで、同じ宿に泊まっている監視者の部屋に赴き、問答無用で拘束した。

縛ったりはしなかった。そんな必要もないように、手足を砕いたから。

当然、男は盛大に悲鳴を上げたが、アリスが遮音の結界を張ったお陰で、部屋の外には全く聞こえなかった筈だ。

「さて、あなたにはいろいろと話してほしいことがあるんですよ。あッ、黙秘は認めませんよ？そのつもりで。嘘を吐いたり、質問に対して答えを躊躇したら、あなたの指を一本ずつ砕いて行きます。ちなみに、あなたがしゃべってくれなければ、他の人に聴くだけなので、良く考えることです」

両肘を問答無用で握りつぶし、止めてくれと叫ぶのを無視して両膝

を蹴り碎いた後だったので、男は涙を流しながら非常に素直に全てを話してくれた。

「では、もう一つ質問です。城に連れて行かれた子供達に、何をしているのです？」

「俺はしらねえんだ。ただ、仲間内の噂じゃ、餓鬼どもを何かの実験の材料にするとかで、だから、何人でも買って来いって命令されてて……」

「子供を材料に……ですか？それで、あなたが今、受けている命令は？」

「あんたらの監視だ。それだけだ。何でも、死番隊の連中が死んじまって、手が足りねえから、『応援』を呼ぶとか……」

53 ガス抜きてなんですか？

翌日、私はマッカーシー領のギルドから、呼び出しを受けていた。拷問した男は、夜のうちにサイモンさん達が運び出して、もう、どこに居るのか居ないのか分からない。だから、昨夜のことが理由で呼び出された分けではない・・・はず。

そして、この呼び出しは、十中八九、罠なのだ。

「シュン・ムラカミ様ですね。あなたのギルドカードが期限切れになっています」

「は？」

「規定の三カ月が過ぎてもあなたは、一件も依頼を受けていないようです・・・」

そんな筈は無いと、ゴネてみたが受付の女性は、Fクラスのくせに生意気だ！とでも言うように、調べもせずに慇懃無礼な態度に終始した。

「兎に角、あなたのおっしゃるような依頼も、その達成記録もありませんので」

「まあまあ、君。成りたての若い冒険者には良くある事じゃないか？ここは一つ、特別依頼でもこなして貰って、記録を更新してあげたまえ」

「あ！ギルドマスター・・・本当に、宜しいのですか？」

うわあああい・・・すごい小芝居きたああああ！

実にタイミング良く割り込んできたこのおじさんは、ここのギルドマスターらしい。結局、私は、提示された依頼書を受け取り、郊外の森で薬草の採取をすることになったが、力試しの意味もあるから、

必ず一人で行ってくるようにと釘を刺された。

うまくできたら、記録を更新してくれるそうだ。

私は、神妙な顔でお礼を云ってギルドを出ると、そのまま郊外に向かった。

内心、ニコニコしながら・・・

ちなみに私は昨夜も眠れなかった。スンとアリスが抱きしめてくれなければ、直ぐにでも孤児院に乗り込んで、血の雨を降らせただろう。

少しは、発散できますか？

名前も無い郊外の森は、小麦畑の先にある。魔獣も少なく、居ても低級魔獣しかいないそうで、薬草の採取ぐらいなら、手の空いた農民でもできるそうだ。

お礼をいうべきだろうか？

森に入って暫くすると、やっぱり、現れましたよ。お約束ですね？
分かります！

でも、たった一人で・・・結構、強そうですね・・・

「聞ってるだろうが、ギルドマスターの依頼で、お前を“討伐”する。と云うのは建前だ。お前は知り過ぎているから始末しろ、だとなさ・・・悪いな」

「聞いてませんよ。それからあなたには無理です。ついでに“どういたしました”」

次の瞬間には私の首に衝撃があり、黒い軽装鎧の男は遠くで身構えた。

私は切りつけられた瞬間に、男の剣を掴もうとしたのだが、うまく回避されて距離を取られた。大したスピードだ。素直にそう思う。

「おいおい、なんだよそりゃ・・・何で切れねんだ？」

「さあ、あなたの持っているその剣が、ナマクラなんじゃないですか？」

「そうかい？ んじゃあちよつと、真剣に行っとくか・・・」

「ええ、精々、頑張ってみてください」

そして男は、刃に手を添えてゆっくり引き、その刀身に自らの血を滴らせた。

その瞬間に、その血は刀身に吸い込まれていき、全体が赤く染まった。

「こいつは、魔剣バニオーニスつってな。『氷雪の迷宮』の神魔獣バニオーニスを仕留めた時に、そいつの体から出てきた剣だ。おもしろえだろ？ 『氷雪の迷宮』の神魔獣が残したのが、こんな剣だなんてよッ！！！」

それは、白銀に輝く、美しいロングソードだった。

その男の血で赤く染まってはいても、その輝きは失われず、いや、それまで以上に美しさを増し、そしてルビーの残光を残して空を切った。

私は、男の横なぎの斬撃を“転移”でかわして後退した。

男の斬撃が早かった訳ではない。間合いを無視してルビーの斬撃が私を襲ったからだ。

私の後ろにあった大木が、炎を上げて切断された。

「チッ！ こいつもよけんのか？ おめえ、いったい何者だ？」

「そう云う、あなたこそ。神魔獣を倒したと云いましたが・・・もしかしてあなたSクラスですか？」

「ああ、キーナン・ヤング・キースだ。あの世に行っても忘れんناよ？」

男は、ニヤリとした。キースの繰り出した必殺の斬撃は、鞭の様にしなり、次々と放たれる赤い残光が、網の目の様に空間を満たして行き、私の回避場所を奪っていく。

しかも、キースはアクセルを併用して位置を変え、角度を変えて迫ってくる。

そのアクセルの速度は、私の身体能力には僅かに及ばないものの、魔剣バニオーニスの力と相まって、確実に私を追い詰めて行く……かに見えた。

「もう、いいですか？ 奥儀とか有るなら今の内にどうぞ」

「なッ！！！」

網の目の残光が私という獲物を捕らえた瞬間、私は、その外側に立って、キースの肩に手を掛けていた。キースは慌てて魔剣を振り抜き、私から距離を取った。

その瞬間に、キースの顔から余裕と軽く口が消えた。

そして、魔剣を構え、膨大な魔素を魔剣に充填して行く。

「キースさん。あなた勘違いしてますよ？ その剣は魔剣じゃありません。そして、その剣を、そんな風にしか扱えないあなたでは、剣の実力を発揮できないし、私を倒すのも無理なんです」

ブオオオン……パシンッ！！！！

私の言葉をキースが聞いていたかどうかは分からないが、キースの放った網の目の赤い斬撃が“一度に”私に向かって来たとき、私はキースの胸部装甲に手を当てて“魔発剄”を打ち込んでいた。

キースは魔術師ではないが、云ってみれば魔剣士だろう。だから、その黒い軽装鎧にも対魔術防御陣が施されていたが、私の攻撃は、

その防御をいともたやすく粉碎して、キースの体内に致死の衝撃波を叩きこんでいた。

そして、カハッ！と口から大量の血を吐きながら、キースはゆっくりと倒れて行った。

私は、即死したキースの手から“神剣”バニオーニスを奪い取り、鞘に戻して肩に担いだ。

うん！良い剣だから、スンのお土産にしよう。

そして私は、少し離れたところから、キースの死体に向けて、ちよっと大きめのファイヤーボールもどきを打ち込み、完全に死体を焼却処分した。なあゝむうう・・・
流石に、ここでデーパーインパクトは打てませんよ？

さあ、少しだけすっきりした所で、頑張って薬草を採取しないと！
ギルドカードを取り消されてはたまりませんので。

あれ？どんな薬草だったっけ？

54 虐めてもいいですか？

あ・る・こお、あ・る・こお、わたしはあ……上機嫌です。

依頼の薬草を採取した私は、左手の薬草の入ったバスケットをブンブンと振り回し、右手に神剣バニオーニスを担当ながら、トテトテとマッカーシー領に戻り、スキップしながらギルドのドアを開けた。朝っぱらから呼び出されたので、まだ、お昼前だ。

さっさと手続きを終わらせて、スンとアリスとご飯にしようと思う。

「今、戻りました！これが薬草です」

朝の受付嬢の所にバスケットをドンと置いて、依頼書を提示する。受付嬢は、どうやら向こう側の人のようだ。私が戻ってきた事に吃驚して、そして、肩に担いだ神剣バニオーニスを見て震えだした。

「か、確認します」

そう云って、震える手でバスケットを持って、奥の部屋に駆けこんでいく。今頃、ギルドマスターに、どうしたらいいか聞いているのだろう。

暫くして、ギルドマスターが現れて、私が肩に担いだ神剣バニオーニスを凝視する。

「あのお、何か？」

「い、いや！何でもない。ところでその剣はどうした？行く時は持っていなかった筈だが？」

「ああ！これはですね。森の中に落ちてました。依頼中に発見したアイテムは発見した冒険者の物になるんですよね？」

「あ、ああ、そのとおりだな・・・」

そして、ギルドマスター自らが、たかだか薬草採取の確認を始める。

「ああ、そう云えば・・・」

「な、なんだね？」

「あの森には低級の魔獣しかいないですよね？でも、変な魔獣が出てきましたよ？」

「そ、そうか？それで、その魔獣は・・・」

「魔術で消し炭にしたので、死体も残ってません。まずかったですか？まあ、でも、あの程度なら、あと“六匹”出てきても倒せますよ？全然大したこと無かったですから」

私はその時初めて、真剣な目でギルドマスターを睨みつけた。

事なかれ主義の私でも、怒るときは怒りますよ？依頼達成の書類にサインをするギルドマスターの手が、完全に震え出して収まらず、まともに字が書けなくなった。

私は“もう、こんなことがないように気を付けますね？”“お互いの為に！”“ギルドの方も大変でしょうから”と、念を押してギルドを出た。

そして、最後まで受付嬢は戻ってこなかった。

それから私は、宿に戻って、戦利品をスンにプレゼントした。

私の部屋には、監視者を始末したことで、サイモンさんとキャンベルさんが来ていたが、キョトンとした顔で受け取ったロングソードを、スンは何気なく引き抜いて、その刀身を見て驚愕した。

「こ、これは魔剣・・・いや！聖剣か・・・神剣だな！シュン、こんなものを何処で？」

「やっぱり、スンには分かるんだねえ・・・それは親切な人からも

らっ・・・」

「その剣は、まさか魔剣バニオーニスじゃないか!!!」

いつもは寡黙なサイモンさんが大声を上げた。

そして、頼みもしないのに魔剣バニオーニスのデータをしゃべりまくった。前の持ち主のSクラスのキーナン・ヤング・キースのことや、魔剣の由来まで。

サイモンさん、刀剣マニアですか？

そして、興奮冷めやらぬ感じで、美しい刀身を見つめていたが、ハッとしたように私に振り向き、これをどうしたのか？と尋ねた。

「だから、森でひろ・・・」

「さっきは、親切な人に貰ったとか、云ってなかったか？」

「そうでしたっけ？まあ、どっちでもいいじゃないですか？持ち主はもう使えないんですし、剣の方だって、スンに使われた方が嬉しいに決まっていますよ」

室内なのに冷たい風が吹いた・・・様な気がする。

サイモンさんとキャンベルさんは部屋の隅で“まさかSクラスを？”とか“どうやって”とか、青い顔でぶつぶつ話していたが・・・

「がはははあ！要するに、シュンは強ええってことだろ？」

「クスッ・・・そうですね。ダークの云う通りです」

「今後は、兄貴と呼ばせてくださいっす！」

天国の父母よ、私には良い友達ができました・・・チャックさんの希望は却下。

それはそうと、私達がここに来た目的は、敵性諜報組織の撲滅だったが、どうにも、まだまだ、相手は大きいらしくて、全容が判明し

ない。

そして、基本的にギルドも敵であることが今日のことと判明したし、当分はおとなしくしているとは思うが、できれば、諜報組織のトップを潰しておきたいところだ。

さて、その手立てだが・・・

昨夜、グスタフさんの指示で、拉致した監視者の部屋の盗聴器を全て回収しておいたそうだが、私は、もう一度、盗聴器を一つ“置いて”来ることにした。

今度の盗聴器は少しゴツイが、遠くまで電波が飛び、頑丈で長時間機能する物を選び、ベッドの枕の下に潜り込ませた。

さらに、その盗聴器には、スンに“シュン・ムラカミ”と白マジックで書いて貰った。

さて、どうなると思います？

翌日の朝、現れたのは例の“くそ野郎”だった。

交代するはずの男がいない事に毒づきながら、暫くは部屋の中で待っていたが、二時間もすると不審に思ったのか、窓の外や廊下の様子を窺い、その後、直ぐに部屋を出て行った。

戻ってきたのは一時間後。初めて聞く男の声と一緒にだった。

「チッ！セスの野郎、何処行きやがった。おい！奴らは上の部屋に居るんだろな？」

「へい！もちろんでさあ！兄貴。宿の女将にも確認してます」

そんな会話が聞こえたかと思ったら、その男は部屋中をぐそぐそと探り始めた。

そして、予定通り、ベッドの枕の下に“置いた”盗聴器を見つけると、暫くいじくり回し、そこに私の名前を見つけて興奮したようにもう一人に云った。

「こいつは・・・もしかしたら“黒髪の魔術師”の持ちもんじゃねえか!？」

「ええ! 何でそんなもんがここに?」

「セスの野郎が、お前より優秀ってことだろうが! 良し、お前はここにいて、連中の監視を続けろ、こいつはもしかしたら何かの魔道具かもしれない。俺はこれをカッセル様に届けてくるからな!」

彼らには、盗聴器がどんな機能を持っているのかなんて分からない。この世界の人間なら精々、魔道具の一種と考えるだろう。そして、そこに私の名前があれば、間違いなくそれが何かを探ろうとする。“トップ”の指示があるまで、決して壊そうなんて思わない。さて、カッセル様ってだあれ?

55 やることやっときますか？

「どうです、カッセル様？何か分かりますか？」

「さてな・・・唯の黒い小箱にしか見えん。魔素も無いし、少なくとも魔道具ではない。うちの鑑定士に調べさせよう」

サイモンさんの部下の報告によると、監視者の部屋から盗聴器を持ち帰った“兄貴”と呼ばれる男は、マッカーシーの目抜き通りを進み、途中、横道に逸れたかと思うと、大きな屋敷の裏門から、その中に消えた。

しかし、そこは屋敷ではなかった。

「それにしてもカッセル様。応援ってえのはどうなんたんて？そろそろ、手下共の緊張感が抜けてきてますぜ。仕掛けるなら早い方が・・・」

「・・・わかってる！しかし・・・お前、Sクラスを傷一つ負わずに倒すような化け物に、どうやって仕掛ける？」

「え、Sクラス！？応援ってえのは、Sクラスの冒険者だったんですかい？」

「ああ、キーナン・ヤング・キース。奴を今朝、黒髪の魔術師にぶつけたが、どうやら返り討ちにあったらしい。あの野郎、しれっとした顔で戻ってきて、この俺に脅しを入れて行きやがった！」

サイモンさんの部下が報告した大きな屋敷とは、実は屋敷ではなく、マッカーシー領のギルド本部だった。そして、兄貴と呼ばれた男が話している相手こそ、バン・バレリ・カッセル。この街のギルドマスターだ。

「こうなったら仕方が無い。当分は手控える。業腹だが、騎士団長

に連中が街を出た所で始末して貰おう」

「騎士団ならやれますかね？」

「なに、奴のところも手駒を150人から殺られている。今度は千か二千で掛るだろうさ。」

公式には、奴らが街を出た後、実は山賊が“風の旅団”の名を騙っていたことにすればいい。くそっ！それにしても奴に頭を下げることになるとはな・・・」

今朝のことが、余程、頭に来ていたらしいカッセルは、それから暫くの間、兄貴を相手に愚痴をこぼし続けた。お陰で、今回の一連の事件の主犯が、大公殿下を筆頭に、騎士団長とギルドマスターであることが分かった。

カッセルと騎士団長は、相当仲が悪く“誰がセルヴェ王国と話しを付けたと思ってるんだ”とか“ソーマの開発にどれだけ金を融通したか”とか殆ど全部しゃべってくれた。

「それじゃ、連中についてはわかりやした。ああ、それで“例の物”ですが、今月分が揃ったんで、今夜にでもお城に運び込もうかと思いがすが？」

「ん？ああ、そうしてくれ、城の魔術師から材料はまだかと催促がきていたからな」

その後、盗聴器はギルドの鑑定士のところに運ばれてしまったため、その後の会話は聞くことができなかったが、もう、十分だった。

私は、直ぐに、サイモンさん達に撤収の準備と、階下に潜んでいる監視者の“くそ野郎”の始末したら、今夜中にマッカーシーを脱出することを命じて帰って貰った。

「で？シュン、俺たちやあ、どうすんだ？このまま帰るつつんなら縁切るぞ？」

「もちろん、みんなも脱出して貰います。但し、明日の朝に。今夜は忙しくなると思いますから」

「何をするの？」

「家庭訪問」

「「「「「？」」「」」「」」「」」

今夜することに“風の旅団”を巻き込みたくはなかったが、私一人では、時間がかかり過ぎるし、漏れがあるかもしれない。だから、みんなに手伝ってもらうほかない。サイモンさん達は、近衛騎士だし、ノーマの部下だ。関わらない方がいい。

一時期は、みんなも脱出させようかと思ったのだが、それを云おうとすると、スンとアリスは無言で睨み、ダークさんは聞こえない振りをし、グスタフさんはニツコリ笑い、チャックさんは槍の手入れがあるといって出て行ってしまった。

本当に私には・・・向こうでは、こんな友達いなかったんですがねえ・・・

マッカーシー領に来て二週間近くが過ぎていたが、今日に成って殆どのが判明した。

子供達は、ソーマを作るための媒体として“消費”されていたらしい。

どうやっているのかも分かっていないが、子供の体内魔素をその体ごと結晶化させることでソーマは作られる。

作られたソーマの本来の目的は、大公殿下の若返りのため、だったらしいが、それ以外の薬効に価値があったため、王都以外にも外国にまで販売されているようだった。

無論、大公殿下は諦めておらず、だから、今もなお、子供が材料と

して城に飲み込まれていくのだ。

そして、滞りなく準備は進み、私達は十分に日が暮れてから、バラバラに宿を出た。

サイモンさん達が見つけてくれた孤児院は、マッカーシーの街の中に四ヶ所あったが、最初は、北のスラム街にある孤児院にした。そこから時計周りに始めよう。

アリスが孤児院全体に結界を張って遮音し、グスタフさんはアリスの居る場所の建物を挟んだ反対側で援護し、ダークさんが正門を、チャックさんが裏門を封鎖し、スンは建物内で、事が済むまで子供達を保護する。

そして、私は・・・家庭訪問を始めた。

ゴキンッ！グシャ！ベキッ！ザシュ！

こいつらに慈悲は必要ないから、じつくりと死を味わって欲しかったが、それでは、子供たちが目を覚ましてしまうかもしれない。今までさんざん怖い思いをしてきたのだから、もうこれ以上は・・・怯えさせる必要はないだろう？

だから、ここの悪党共には、速やかに旅立って貰った。

そうして、深夜に差しかかる前に、四つの孤児院に対する家庭訪問は終わった。

予想通り、時として私の襲撃に気が付き、窓や裏口から逃げだす者もいたが、みんなが速やかに処理してくれたおかげで、子供達を誘拐して、死に追いやって来たゲス共を、殲滅することができた。施設を離れていた者もいるだろうが、そこは、我慢するしかない。

ああ、私のこの行為は偽善だと思う。

この後、子供達に対して、私は何もできないのだから。

ただ、どうか、子供たちが今後が無事で、できれば幸せになってほしいと、祈るしか・・・

あ???.??. 祈る?

「あのおうもひもひい?」 (byフジヤマ・カンビ様 ぱーと2)

「なんじゃい? 今頃、電話して来otteからに!」

「実は、折り入ってお願いが・・・」

「分かっとるわい! 何でもっと早よう連絡せんかのお?」

なんとか、なりそうです。

56 家庭訪問は続きますか？

私が、ギルド本部の最上階にある、ギルドマスターの豪華な住居にお邪魔した時、カッセルはベッドの上で、女の尻に乗って励んでいる最中だった。途中で止めさせるのも可哀想なので、終わるまで見ていることにしたのだが、相手は、あの受付嬢だった。

確かに、少しぽっちゃりしていて、巨乳で男好きのする体だったが、何と云うか、どこまでも卑猥で厭らしい感じがして、私の好みではなかった。

「あ！終わりました？んじゃあ申し訳ないですが・・・さっさと、死んでください」

「きゃヒイツ！」

「お、お前は・・・ま、待ってくれ！わしはもう、お前に、いや、お前達に手は出さん！」

「“わしは”でしょ？騎士団長さんに頼んで、郊外で殺すんでしょ？」

「なんのことだ。わしはそんなことは・・・」

「おかしいなあ、この人が話してくれたんですけどね？」

別に、盗聴器の機能説明をする必要もないので、嘘付きました。

私は、カッセルと女の乗るベッドの下から“兄貴”の死体を引っ張り出した。

改めて女がヒイ！と悲鳴を上げ、ぶるぶると震えながらカッセルの後ろに逃げ込もうとするが、私は許さなかった。

「カッセルさん、あなたがこの男に命じて、子供達の誘拐をさせてたんでしょ？その女性は、書類の偽造を担当していらしたそうですね？」

「な、なあ、わしらと組まんか？わしらは今、大公殿下と共に、このマッカーシー領を大公国として独立させる計画を進めとるのだ。既に、セルヴェ王国とは話しも付いて、いざという時は、王都を牽制するため兵を出してくれる約束まで出来ておる」

「そ、そうよ！そしたら私は宰相夫人になるんだから！」

世の中の誰もが、生きていれば一度や二度、殺してやりたいと思う相手に会うことがあるだろう。だけど、普通は、だれも実際に手は出さないものだ。

当然だ。そんなことをしたら自分自身の人生も全て失うことになるのだから。

しかし、私は、たった一度だけ、その男が目の前に居たら、例えば自分の人生が終わってしまおうと分かっている、殺すために襲いかかるだろうと確信したことがある。

もう、何年も昔のことだ。

笑われるかもしれないが、それは唯のニュース映像だった。

ある国の独裁者が、民衆の蜂起によって倒されたというものだった。共産主義か社会主義かは知らないが、その男は貧困に喘ぐ民衆をしり目に、宮殿のような家に住み、贅沢な暮らしをしていた。

まあ、このくらいなら“死ねばいいのに”で済んでいたし、即決裁判で死刑が執行された映像を見ても、“いやあ、そこは、ちゃんと裁判はするべきだったんじゃない？”と、冷静にニュースを見ていた。

しかし、その国の首都にある孤児院が映った時・・・当時は冬だった。

暖房も無い広い部屋、窓には鉄格子、一人一人が漸く通れそうな幅で、ベッドが整然と、ぎっしりと並べられ、汚れた敷布団が一枚ずつ乗っていた。

薄暗い部屋にカメラを向けると、3歳から5歳くらいの子供たちが、部屋の隅に逃げ出し、或いは、ベッドの下に隠れた。

そして、一人だけベッドの上に、ぽつんと座る男の子。

肌着一枚で、汚れたベッドに座り込み、カメラのライトが向けられても反応しない。

カメラマンが近づいて、ようやく、ゆっくりと此方を振り向いたその子の目は……

何も……その子の目には、何も写っていないかった。

私は“虚無”を見つめる目を初めて見たのだと思う。

可愛らしい5歳くらいの男の子が……子供がして良い目ではないと思った。

知らずに、ニュース映像を見ながら涙が溢れた。

次いで、全身に鳥肌が立ち、猛烈な憎悪と殺意が湧きあがった。

マッカーシー領に来て、孤児院の子供達のことを知って以来、あの男の子の、あの目を思い出して眠れない日が続いた。

そして、ようやく、終わらせることができる。

まずは一人目。

「云いたいことはそれだけですか？では、さようなら」

「やめろ！よせえええ！」

「いやあああ！」

私は、二人の腹部に魔発剄を叩きこんだ。

二人は悲鳴を上げることでもできなくなり、豪華なベッドの上で、大量の血を吐き、大小便を漏らしながら、糞にまみれて、ゆっくりと死んでいった。

実に、ふさわしい死に様だと思う。

私は、その後、城に転移して地下を目指した。あの兄貴によれば、実験場は城の塔の地下にあるようだ。

城の中には、貴人の幽閉するための高い塔があり、その地下の牢獄が実験場所であることが、分かっていたので、私はさっさとそこに向かい、そこに居た魔術師と衛兵達を、纏めて処分してから火を放った。

直ぐに、燃え広がり、塔を包み込んで燃え上がった。子供を材料にしたソーマの研究データを残すわけにはいかない。これで全て灰になったはずだ。

兵士達の消化活動で、半時ほどで火が弱まって来たが、そこに偉そうな騎士がやってきた。

他の騎士達に“団長”と呼ばれていたので、誰もが目を離れた隙に、首根っこを捕まえて、近くの城壁の上に転移した。

「あなたが団長さんですか？」

「貴様ッ何者だ！」

「はじめまして。あなたが何度も殺そうとして、失敗している黒髪の魔術師です」

流石に騎士団長をやっているだけあって、素早く剣を抜いて斬りかかって来たが、このおじさんもキース程の強さはなかった。

鼻の先一センチ程のところを、剣が上から下に通過するのを冷静に見極めた私は、剣先が完全に下に向いたところで一歩前に出て、おじさんの豪華な胸部装甲に手を当てた。

パシンッ！

「ギルドマスターのカッセルさんは、先に行って待っているはずで

すから、宜しくお伝えください。ああ、あと何人か、あなたのお仲間も・・・」

「グフツ！げえええ・・・た、助けてくれ・・・し、死にたくない・・・ゲフ・・・」

「子供達も、云えるものなら、そう云っていた筈ですよ？それで、あなた止めましたか？」

騎士団長は次第に声も出せなくなってきたので、騎士団長さんの剣を鞘に戻してから、私はその体を持ち上げると城壁の内側に投げ落とした。

グシャリと甲冑の拉げる音がして、騎士団長は永久に黙った。

どうして悪党というのは、自分を柵に上げて助かろうとするんでしょうね？

まあ、そんな連中だから、悪党というのでしょけど・・・

さて、あと一人です。

56 家庭訪問は続きますか？（後書き）

誤字の修正しました。

いつもありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3792y/>

押し入れの異世界

2011年12月10日12時01分発行